

橋本一丁田遺跡4

福岡市埋蔵文化財調査報告書第816集

2004

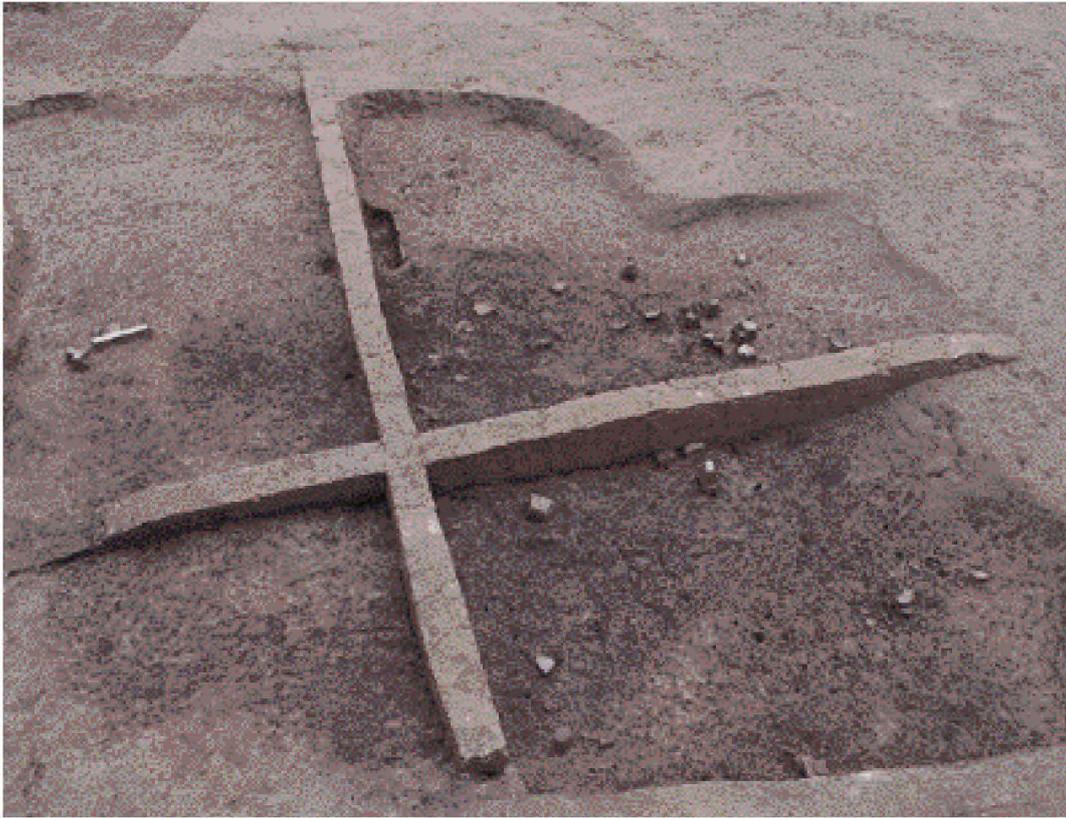
福岡市教育委員会



1.Ⅰ区全景（南から）



2.Ⅱ区全景（北東から）



3.SX100 (北から)



4.SD020出土鏡片

序

福岡市には豊かな自然と先人によって育まれた歴史が残されています。これらを活用するとともに、保護し未来に伝えていくことは、現在に生きる我々の重要な務めです。しかし、近年の著しい都市化により、その一部が失われつつあることもまた事実です。

福岡市教育委員会では、開発に伴いやむを得ず失われていく埋蔵文化財について、事前に発掘調査を実施し、記録保存に努めています。

本書は、平成13年度に実施した店舗建設に伴う橋本一丁田遺跡4次調査の成果を報告するものです。本書が文化財保護への理解と認識を深める一助となり、また研究資料として活用いただければ幸いです。

最後に、発掘調査から本書の刊行まで、多くの方々のご理解とご協力を賜りました事に対しまして、心からの謝意を表します。

平成16年3月31日

福岡教育長 生 田 征 生

例 言

1. 本書は店舗建設に伴い西区福重2丁目463-1外において平成13年11月12日から同14年2月15日に発掘調査を実施した橋本一丁目遺跡第4次調査の報告である。
2. 本書に使用した方位は磁北で、座標北から6° 21′西偏する。
3. 本書に使用した遺構の実測は調査担当者が、遺物は上面を阿部、平川敬治、下面を磨製石器を平川敬治、その他を池田が行った。挿図の製図は濱石正子、撫養久美子、安野良、斉藤貴代子、担当者が行った。写真撮影は遺構を担当者が、遺物を力武卓治、担当者が行った。
4. 本書の作成にあたり上田保子、窪田慧、當早苗、前田みゆき、安永令子の協力を得た。
5. 石剣とした551の保存処理を本市埋蔵文化財センターの比佐陽一郎が行った。
6. 本章の執筆はIV-3を阿部が、他を池田が行った。
7. 本書に係わる図面、写真、遺物はすべて福岡市埋蔵文化財センターに収蔵保管される予定である。

遺跡調査番号	0136	遺跡略号	HTI-4
所在地	西区福重2丁目463-1 464他	分布地図番号	0390
開発面積	11418.12㎡	調査面積	5201㎡
調査期間	2001.11.12～2002.2.1	事前審査番号	12-2-493

目 次

I はじめに	1
II 調査組織	1
III 立地と環境	1
IV 調査の記録	2
1. 調査の概要	3
2. 上層	4
3. 古墳時代以降(上面)の遺構と遺物	6
4. 弥生時代以前(下面)の遺構と遺物	33
V 終わりに	61

挿図目次

Fig. 1 周辺の遺跡分布図(1/2500)	2
Fig. 2 調査区位置図(1/4000)	2
Fig. 3 調査区位置図(1/1000)	3
Fig. 4 調査区全体図 (1/500)	4
Fig. 5 IV、VIII層分布図(1/1000)	4
Fig. 6 2次調査上層模式図	4
Fig. 7 4次調査上層模式図	4
Fig. 8 上面検出遺構配置図 (1/300)	6
Fig. 9 SD003~008上層断面実測図 (1/60)	7
Fig. 10 SD002・003・004・006・008出土遺物実測図 (1/3)	8
Fig. 11 SD009上層断面実測図 (1/60)	8
Fig. 12 SD009出土遺物実測図 (1/3)	9
Fig. 13 河川上層断面②・⑤実測図 (1/60)	9
Fig. 14 河川①出土遺物実測図 (1/3)	10
Fig. 15 SD020出土鏡片実測図 (1/1)	10
Fig. 16 河川上層断面③・⑥・⑦実測図 (1/60・1/80)	11
Fig. 17 河川②出土遺物実測図 (1/3)	12
Fig. 18 河川②出土土師器・砥石実測図 (1/4・1/3)	13
Fig. 19 河川③出土須恵器実測図 (1/3)	14
Fig. 20 河川③出土土師器甕実測図 (1/4)	14
Fig. 21 河川③出土土師器鉢・器台実測図 (1/3)	15
Fig. 22 河川③出土土師器甕・壺実測図 (1/3・1/4)	16
Fig. 23 河川③出土高坏・器台実測図 (1/3)	17
Fig. 24 河川③出土土師器壺実測図 (1/3)	18
Fig. 25 河川081杭列1実測図 (1/60)	20
Fig. 26 河川081杭列2実測図 (1/60)	20
Fig. 27 河川081杭列1出土杭実測図 (1/4)	21
Fig. 28 河川081上層断面実測図 (1/60)	21
Fig. 29 河川081出土須恵器・土師器実測図 (1/3・1/4)	22
Fig. 30 河川081出土土師器・玉類実測図 (1/3・1/1)	23
Fig. 31 河川081杭列3実測図 (1/60)	23
Fig. 32 河川082出土遺物実測図 (1/3)	23
Fig. 33 SB026・027・028・029実測図 (1/30)	24
Fig. 34 SK011・012・052近世土坑実測図 (1/40・1/60)	25
Fig. 35 SK017出土遺物実測図 (1/3)	25
Fig. 36 SK017・018・030・031・033・056実測図 (1/30・1/40)	26
Fig. 37 SK030・033・056・057・064・065出土遺物実測図 (1/3)	27

Fig. 38	SK038・043・064・065・073実測図 (1/40)	28
Fig. 39	SK043出土遺物実測図 (1/3・1/4)	29
Fig. 40	SX057・060実測図 (1/40)	30
Fig. 41	SX037・060出土遺物実測図 (1/3)	31
Fig. 42	SX051出土遺物実測図 (1/3)	31
Fig. 43	その他の遺物実測図 (1/3)	32
Fig. 44	I区下面全体図 (1/400)	33
Fig. 45	SD00、SD055上層図 (1/60、80)	34
Fig. 46	SK050、053、054、062、063、067 (1/40、80)	35
Fig. 47	SK050、053、054、055、062、063、067出土上器実測図 (1/3)	36
Fig. 48	ピット、河川出土上器実測図 (1/3)	37
Fig. 49	SK062出土石器実測図 (1/3)	37
Fig. 50	Ⅲ区全体図 (1/200)	38
Fig. 51	Ⅲ区北壁、SD125-2、5、6トレンチ上層実測図(1/80)	39
Fig. 52	Ⅲ区溝状遺構出土遺物図 (1/3、2)	40
Fig. 53	SX100、121遺構群実測図 (1/80)	41
Fig. 54	SX101実測図 (1/20)	41
Fig. 55	SX100実測図 (1/60)	42
Fig. 56	SX123、124、125、126、127実測図 (1/30)	43
Fig. 57	SX100出土上器実測図1 (1/3)	44
Fig. 58	SX100出土上器実測図2 (1/3)	45
Fig. 59	SX100出土上器実測図3 (1/3)	46
Fig. 60	SX100出土上器実測図4 (1/3)	47
Fig. 61	SX121出土上器実測図1 (1/3)	48
Fig. 62	SX100出土上器実測図2 (1/3、4)	49
Fig. 63	SX100出土上器実測図3 (1/3)	50
Fig. 64	SX102実測図 (1/60)	51
Fig. 65	SX109、110、116、117実測図 (1/60、20)	52
Fig. 66	SX102出土上器実測図 (1/3)	53
Fig. 67	SX102、109、110、115、116出土上器実測図 (1/3)	54
Fig. 68	SX117出土上器実測図 (1/3)	55
Fig. 69	SD125-1トレンチ西壁、SX118実測図 (1/40)	56
Fig. 70	SX120実測図 (1/40)	57
Fig. 71	SD125トレンチ出土上器、試掘出土上器実測図 (1/3)	58
Fig. 72	SX100、115、SD125出土石器実測図 (1/3、2)	59
Fig. 73	出土石器実測図 (1/3)	60
付図	橋本・丁田遺跡4次調査全体図 (1/200)	

図版目次

口絵 1. I区全景 (南から) 2. II区全景 (北東から) 3. SX100 (北から) 4. SD020出土鏡片
 Ph. 1/Ⅲ区全景(北西から) Ph. 2/SD125-1トレンチSX118 Ph. 3/1区SD001~007、009・010 (北から)
 Ph. 4/2区SD004~008 (南から) Ph. 5/2区SD118 (東から) Ph. 6/1区河川③埋土堆積状況 (南から)
 Ph. 7/1区河川②・③ (北から) Ph. 8/2区河川081杭列1検出状況 (東から) Ph. 9/2区河川081杭出土状況
 (西から) Ph. 10/2区河川081上層断面 (南から) Ph. 11/1区SB029検出状況 (南から) Ph. 12/1区
 SB026・027・028検出状況 (西から) Ph. 13/1区SK011 (北から) Ph. 14/1区SK030 (東から)
 Ph. 15/1区SK056 (北から) Ph. 16/SK063 (西から) Ph. 17/SD055 (北から) Ph. 18/SD111 (南から)
 Ph. 19/SD103、105~108 (北から) Ph. 20/SX121 (西から) Ph. 21/上器441出土状況 (東から)
 Ph. 22/SX126 (北から) Ph. 23/SX101 (東から) Ph. 24/SD125 (北から) Ph. 25/SD125-3トレンチ
 (北東から) Ph. 26/SX120 (北西から) Ph. 27/上面出土遺物 Ph. 28/下面出土遺物1 Ph. 29/下面出土遺
 物2

I.はじめに

1.調査に至る経緯

平成13年9月12日付けで有限会社弘信産業代表取締役山下達生氏から西区福重2丁目463-1外9筆における店舗建設に伴う開発計画事前審査願（事前審査番号13-2-493）が提出された。当該地は橋本一丁目遺跡内に位置し、西側の隣接地では2次調査が行われ縄文時代晩期から中世の遺構が確認されている。申請地においても遺構の広がりが予想されるため、埋蔵文化財課は平成13年10月16、17、25日に試掘調査を行い中世の遺構を確認した。これをふまえ、埋蔵文化財課と株式会社デオデオとの間で協議を行った。その結果、建物建設の基礎工事等で遺構の破壊が避けられない部分について発掘調査を行い、記録保存を測ることで両者の協議が成立した。以上の協議を受けて株式会社デオデオ代表取締役久保允誉氏と埋蔵文化財課との間で委託契約を締結し、平成13年度に発掘調査、平成14年度に資料整理・報告書作成を行うこととした。さらに調査終了後には14年度事業を15年度に行うよう変更契約を行った。発掘調査は平成13年11月12日から14年2月15日までの期間で行った、調査面積は5201㎡である。

現地での調査にあたっては株式会社デオデオをはじめとして関係者の皆様には発掘作業についてご理解を得ると共に多大な御協力を賜りました。ここに記して謝意を表します。

2.調査の組織

事業主体 株式会社デオデオ 代表取締役 久保允誉

調査主体 福岡市教育委員会文化財部埋蔵文化財課

調査総括 埋蔵文化財課長 山崎純男

調査第1係長 山口譲治（前任）力武卓治

調査担当 池田祐司 阿部泰之

調査作業 網田美代野 有江笑子 井上紀世子 井上八郎 梅野真澄 大原政幸 海津宏子

木田ひろ子 倉光アヤ子 倉光京子 栗木和子 下司昭枝 小柳和子 柴籐清志

辻節子 徳永洋二郎 永島重俊 鍋山千鶴子 西川吾郎 平田政子 広瀬梓 細川友喜

細川虎男 堀ウメコ 松本順子 松本藤子 三谷朗子 森山早苗 矢野和江

結城千賀子 吉鹿裕隆 吉川春美 和田裕美子

II.立地と環境

福岡市西南部に広がる早良平野は、中央部を貫流する室見川が主に形成した扇状地と低地部からなる。橋本一丁目遺跡は早良平野のほぼ中央、室見川の西岸の沖積低地上にあり、室見川水系に起源を持つ長柄川流域に位置する。現況は水田で標高5.6mを測る。外環状道路が開通するまでは水田が広がっていたが、近年道路に接した開発が進み隔世の感がある。今回の調査地は西側を外環状道路に面し、道路建設に伴って実施した2次調査地点に接する。

橋本一丁目遺跡はこれまで3次の調査が行われている。1次調査では旧河川、矢板を伴う溝等が検出され、古式土師器、刻日突帯文土器が出土している。2次調査では刻日突帯文期の河川とそれを横断する矢板列、弥生前期の土坑、古墳時代初頭の土坑等、中世から近世の溝を検出している。3次調

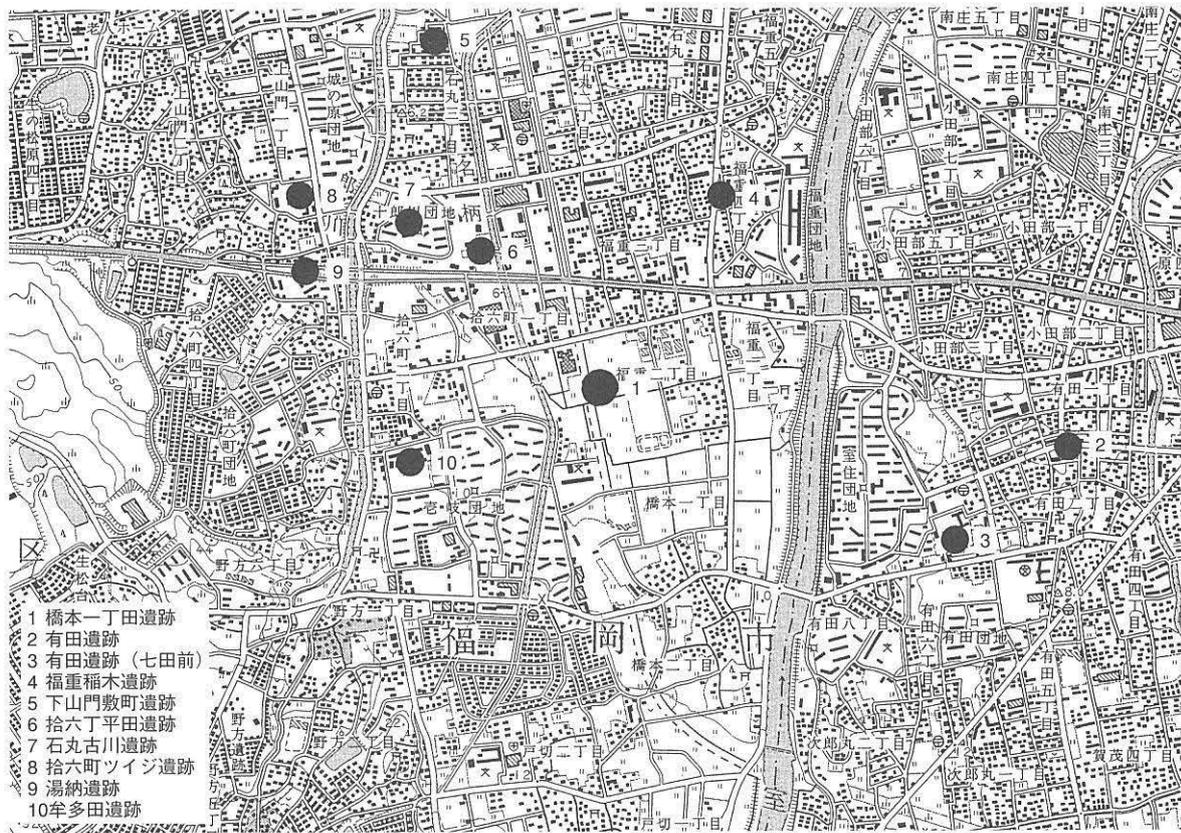


Fig.1 周辺の遺跡分布図 (1/2500)

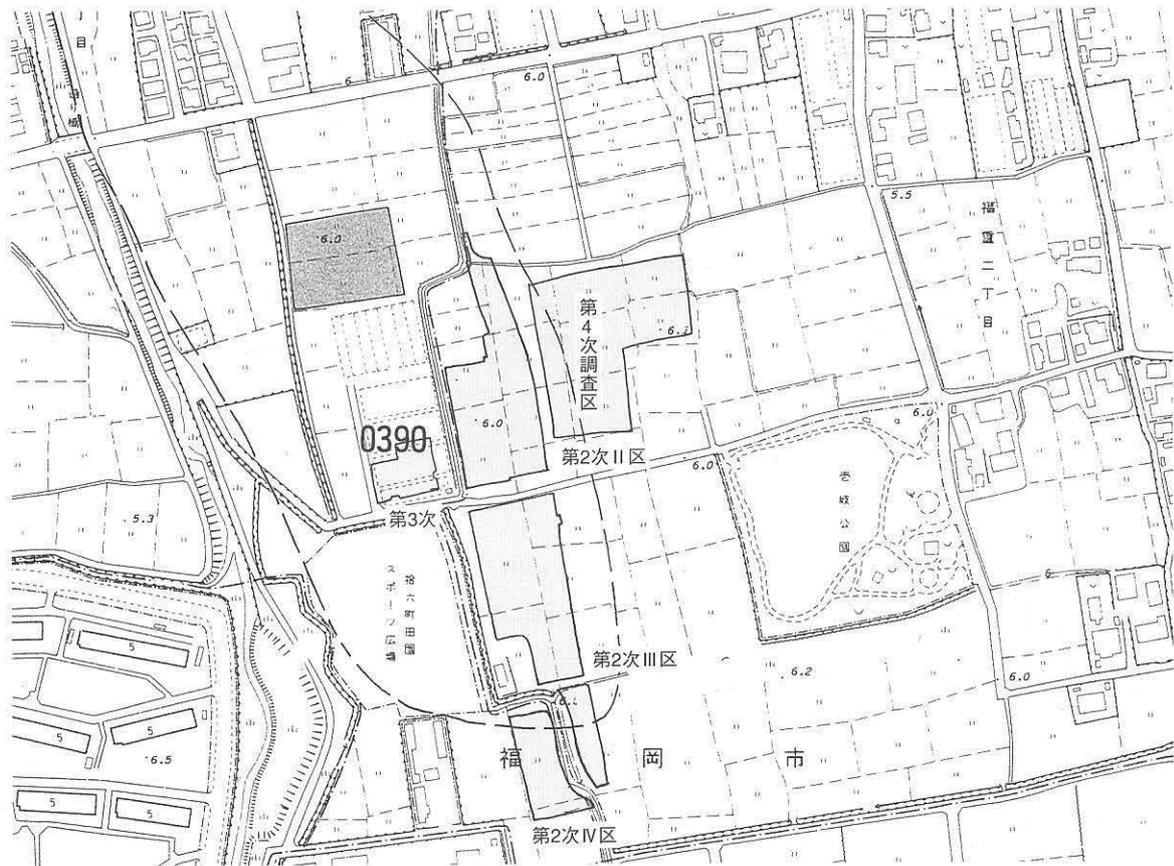


Fig.2 調査区位置図 (1/4000)



Fig.3 調査区位置図 (1/1000)

査では布留式期の方形区画溝と竪穴住居、中世の掘立柱建物と井戸が確認されている。

この周辺の遺構面は、縄文時代後期までに形成された厚い粘土、粘質シルト層の広がり、これを切る新旧河川の粗砂、砂質シルトの堆積を基盤とする。後者の上面は前者より標高が高く、その上にある遺構は現代の耕作土を除去した直下で確認される。前者にはその上にシルトが堆積し、古墳時代、中世の遺構面を形成する。地表の地形に旧河川が表れるのは室見川近くの比較的新しいもののみで、地形から遺跡の存在を予想することは難しい。

調査地点からm北からは後背湿地となり、それまでの沖積低地には福重稲木、拾六町平田、石丸古川、拾六町ツイジ、下山門、下山門敷町等の遺跡が分布する。これらからは突帯文期から古墳時代、中世の遺構が検出されている。

今回の調査地点の西に接する2次調査I区では、磁北およびやや西に偏って走る中世の溝、古代末の河川が第1面で検出され、東側の調査区外に延びる事が予想されている。また、第4面の刻目突帯文単純期の河川SD004も東に流路を取り、今回の地点に向う。

これまでの橋本一丁田遺跡の調査は以下に報告されている。

1次調査：橋本一丁田遺跡 福岡市埋蔵文化財調査報告書第220集 1990

2次調査：福岡外環状線道路関係埋蔵文化財調査報告-5-

福岡市埋蔵文化財調査報告書第582集 1998

3次調査：橋本一丁田遺跡・女原遺跡 埋蔵文化財調査報告書第616集 1999

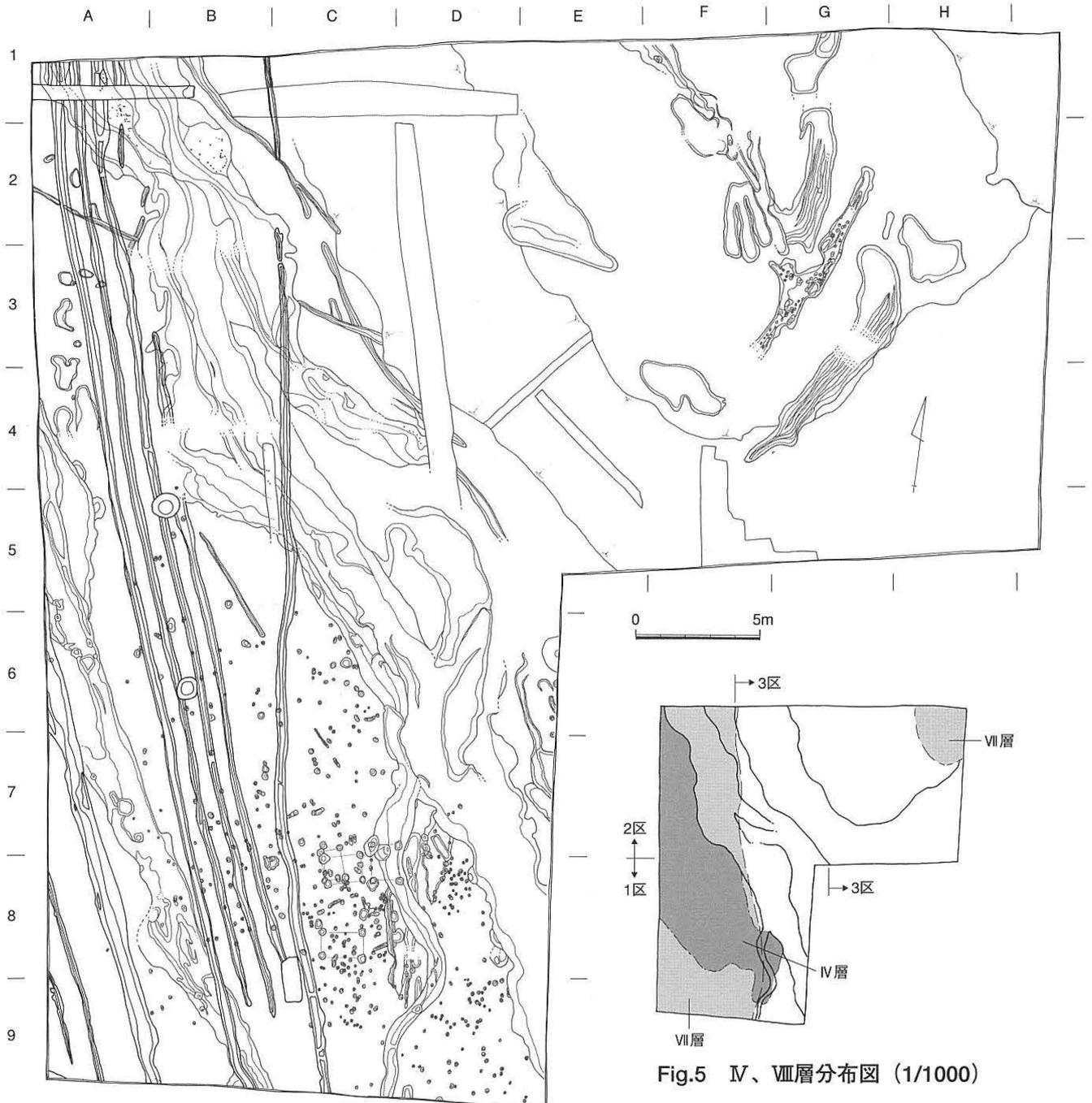


Fig.4 調査区全体図 (1/500)

Fig.5 IV、VIII層分布図 (1/1000)

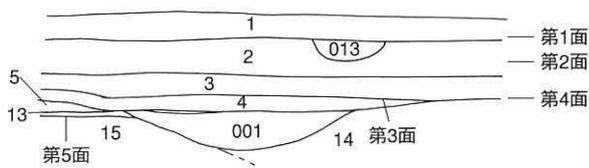


Fig.6 2次調査土層模式図

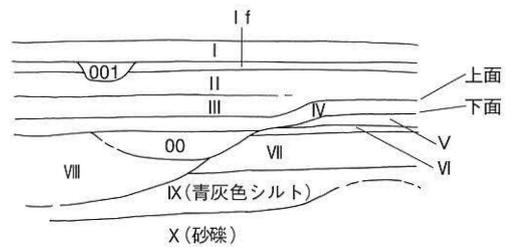


Fig.7 4次調査土層模式図

Ⅲ.調査の記録

1.調査の概要

調査区は2次調査（外環状線用地）Ⅰ区の東側に隣接し、現況は水田である。調査は予定建築物の範囲を対象とし、Ⅰ、Ⅱ、Ⅲ区の順で行った。Ⅲ区は調査中の試掘で遺構の広がりを確認し調査区を拡張した範囲である。Ⅰ、Ⅱ区では、Ⅳ層上面（上面）およびⅤ層上面（下面）の2面の調査を行い、Ⅲ区は実質下面のみの調査である。

（Ⅰ区）上面では掘立柱建物4棟、古墳時代前期の土坑と河川、古代末の河川、中世の併行して走る溝を検出した。掘立柱建物と古墳時代の土坑はⅠ区の南側東寄りに集まる。各時代の河川はⅠ区東側からⅡ区中央に集まり、古墳時代から古代までのものが幾重にも重なる。下面では突帯文期から弥生前期の溝、土坑、ピットを検出した。土坑、ピットは上面の掘立柱建物と同じく南側東よりに集まる。ピットの多くはⅣ層に近い覆土をもち、上面では検出できない。また、掘立柱建物、古墳時代の土坑の覆土が暗褐色粘質土であるのに対し、多くのピットは突帯文期が出土する土坑と同じ淡茶褐色粘質シルトである。以上の点から、弥生時代前期までのものの可能性が高いと考えている。また、南西端ではⅣ層上面で2次調査の突帯文期の河川SD001と考えられる落ちをわずかながら確認した。

（Ⅱ区）Ⅱ区ではⅣ層上面で古墳時代までの河川を検出したが、Ⅰ区から延びる中世の溝を記録した段階でⅣ層を除去し、下面と共に河川の調査を行った。下面では河川に切られる溝を検出している。

（Ⅲ区）河川または谷状を呈すSD125から東側をⅢ区とした。Ⅳ層の広がりはなく下面の調査のみである。不整形のくぼみ状の遺構から刻日突帯文期の遺物が出土した。またSD125では矢板列を検出している。報告にあたってはFig.4のように10mグリッドを設定し、A2、D5のように呼称する。以下、層序、上面で検出した古墳時代以降、次に下面の弥生時代以前の調査の順で報告する。

2.層序

Fig.7はFig.45の土層を基準に作成した概念図である。Fig.6に示した2次調査の土層略図とほぼ対応する。2次調査のⅠ層は現代までの耕作土で少なくとも3面の床土が確認できる。Ⅰf層は暗褐色粘質土で水平に堆積し、かつての耕作土の可能性が高い。中世の溝はこの面の上面から掘り込んでいる。2次調査のⅠ層の一部に対応すると考えられる。Ⅱ層は黄褐色灰色シルトで2次調査の2層に対応する。2次調査では、この上面で第1面の調査を行っている。この層序関係からは2次調査のⅠ面の遺構が3次調査の中世の遺構より古いようにとれるが、2次調査部分では水田耕作による削平で今回のⅠf層が失われ、2層上面で遺構を検出したものと考えられる。また2、3次調査では2層下部黄褐色シルト上面を第2面として古墳時代の遺構を確認している。Ⅲ層は黄色をおびた灰色粘質シルトで2次調査の3層に対応する。Ⅳ層は茶褐色シルトで2次調査の4層に対応し、その広がりをFig.5に示した。今回の調査ではⅣ層上面を上面としている。2次調査では第3面にあたる。Ⅴ層は淡黄灰色砂～砂質シルトで2次調査報告の図、本文にはふれていないが、Ⅰ区の5b層として広がっている。今回の下面の調査はほぼこのⅤ層上面で行った。ただしⅠ区の遺構の遺物にはⅣ層中で出土したものがあり、Ⅳ層上からの掘削の可能性が高い。また2次調査の突帯文明の流路SD001は、13層（今回のⅥ層）からの遺構として報告していたが、今回のⅤ層からの遺構として捉えられる。そうすると、前期の遺構はⅣ層の上から、突帯文期はⅤ層からということになる。以下は薄い黄褐色粘質土のⅥ層（13層）、暗褐色粘土Ⅶa層（15層）と続くが遺構遺物は検出できなかった。Ⅶa層はFig.5の様な広がりが推定される。これが切れている部分は後世の河川等の浸食が行われた部分もしくは堆積が成されなかった範囲である。以下のⅧ、Ⅸ、Ⅹ層はSD125の1トレンチでの観察から想定した。

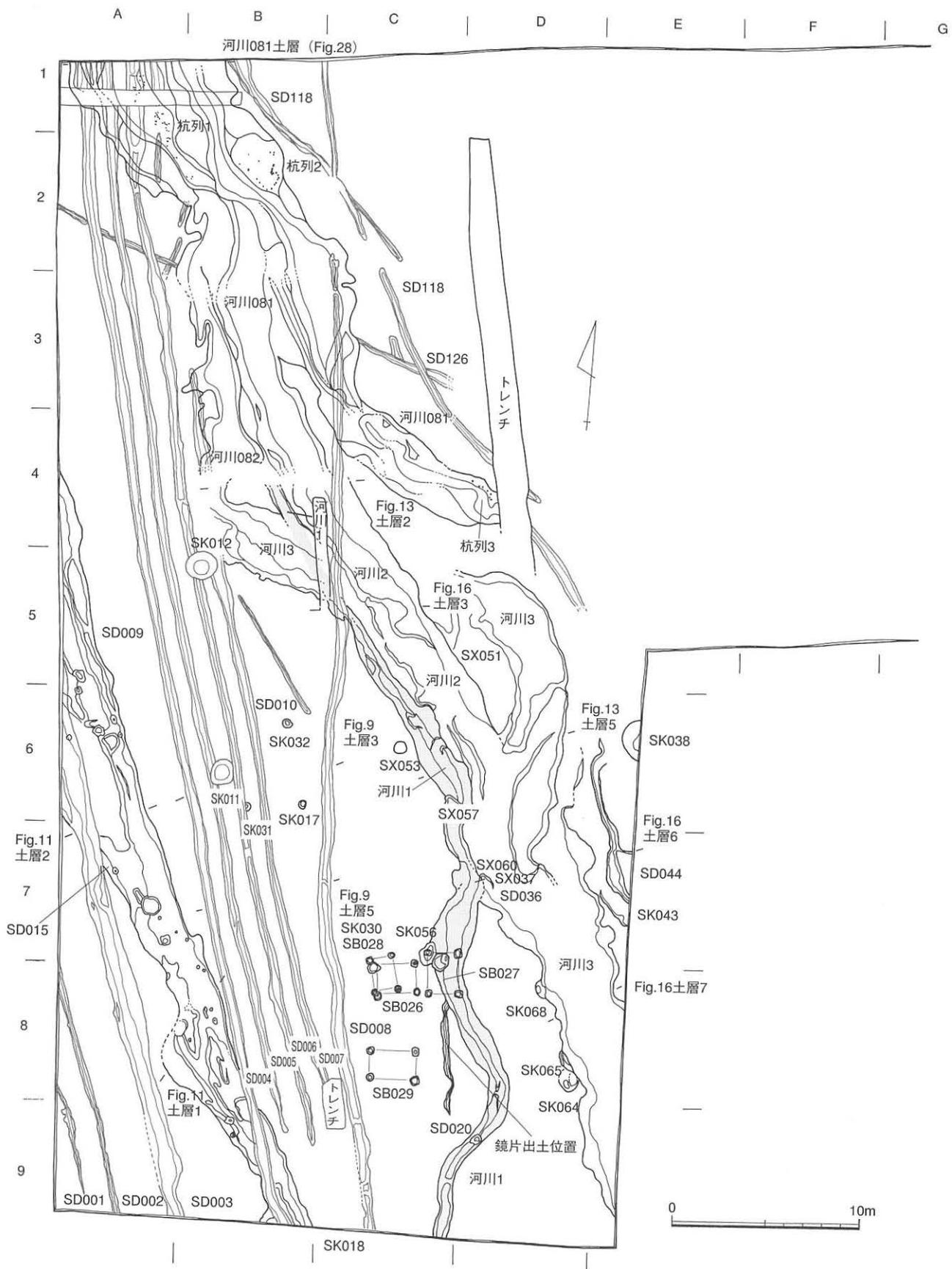


Fig.8 上面検出遺構配置図 (1/300)

3.古墳時代以降（上面）の遺構と遺物

概要、層序の項でふれた様にⅣ層上面で検出した遺構、遺物について説明を加える。中世の遺構は少なくともⅡ層上面から、古墳時代の遺構はⅢ層上面からの掘削であり、検出可能なレベルよりやや下がったレベルからの調査を行っているため、中世の浅い溝の中にはSD001のように痕跡のみになったものもある。河川は複数の河道が切り合うが、遺物の接合関係などから7条に暫定的にまとめ報告する。

(1) 溝

I、II区西半に直線的な溝を検出した。このうちSD001～007は併行して走り、I f層からの掘り込みである。2次調査の1面でも類似した溝を検出している。

SD001 (Fig.8)

調査区南西をSD002にほぼ並行に走る溝で9mが調査区に入る。これまでの削平と表土鋤き取りのため南端部は底に沈着した鉄分の平面プランで確認できたのみである。南壁の土層 (Fig.45) のI f層から掘り込む。幅63cm、深さ13cmを測り、灰白色の粗砂を覆土とする。須恵器・土師器・黒曜石チップが出土したが、細片のため図示し得なかった。

SD002 (Fig.8)

SD001の東約1.3mをN-21° -Wに走る溝で、延長18.5mが調査区に入る。最大で幅93cm、深さ25cmを測る。覆土は緑色がかかった灰褐色シルトで底には粗砂が溜まる。

出土遺物 (Fig.10) 1は、龍泉窯系青磁皿である。1/2個体程度の破片で、口径9.6cm・器高1.9cm・底径4.9cmに復元される。釉調は透明感あるオリーブ灰色を呈する。胎土は精良で、焼成は良好である。その他土師器・須恵器・瓦器が出土したが、細片のため図示し得なかった。

SD003 (Fig.9)

SD002の東約3mをほぼ平行して走る溝で、SD001、002と比べて規模が大きい。断面は丸みを帯びた逆台形もしくはU字形で、幅0.7から1.5m、深さ30cmを測る。所々床の幅が狭い所もある。覆土は緑色をおびた灰褐色シルトで下層には細砂、床には粗砂が溜まる。床面は鉄分が沈着し茶色を呈す。A9・B9の5mほどは不規則に幅広で、深さ30cmと深く溜まり状を呈す。覆土は他の部分と同様である。南側10mほどのうち、幅広の溜まり状部分を除いた箇所では、底を2面確認した。上、下面のレベル差は5cmほどで、それぞれに鉄分が沈着し、粗砂が溜まる。

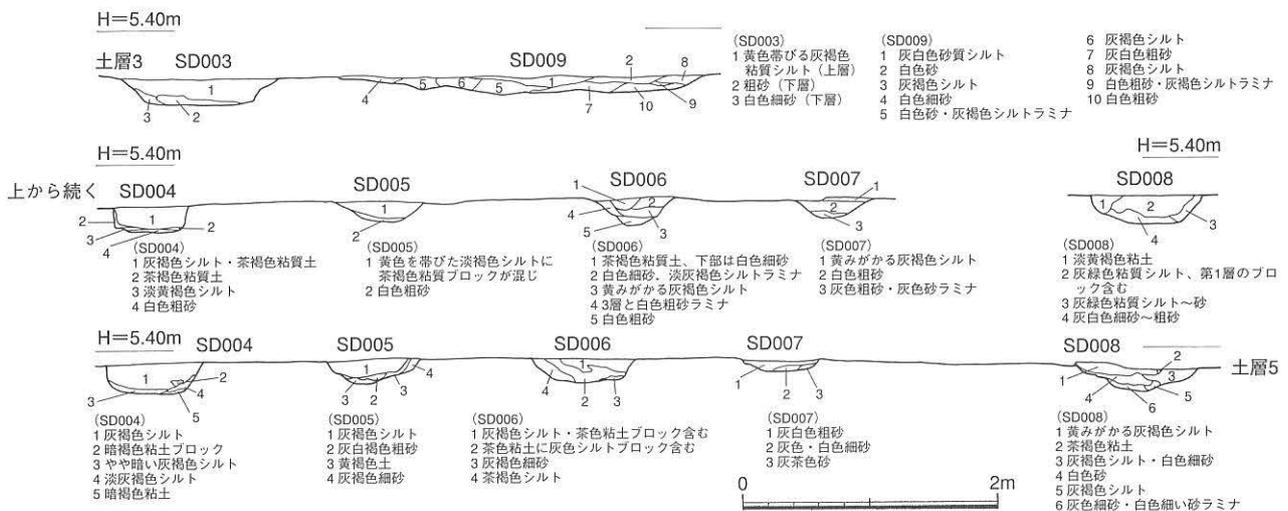


Fig.9 SD003～008土層断面実測図 (1/60)

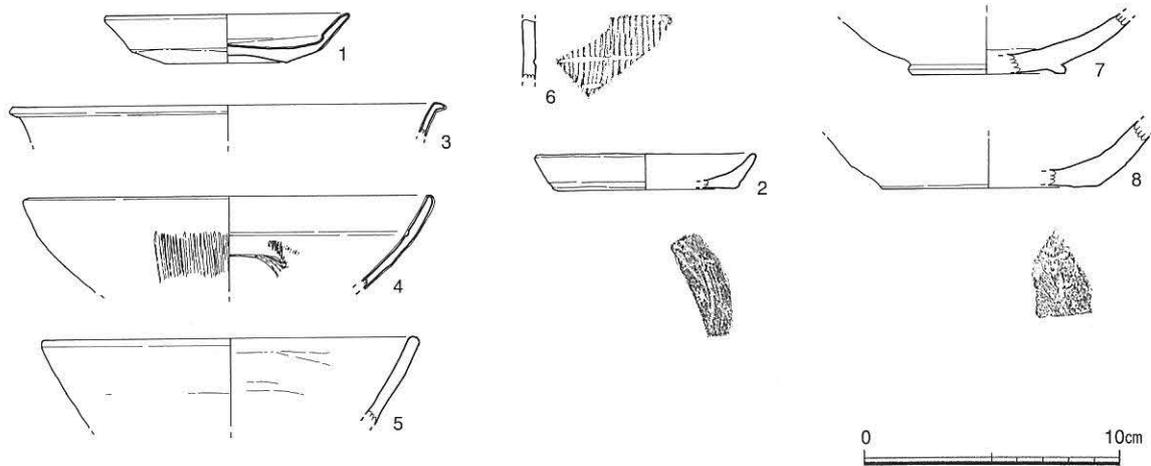


Fig.10 SD002・003・004・006・008出土遺物実測図 (1/3)

出土遺物 (Fig.10) 2は、土師器皿である。1/5個体程度残存する破片で、口径8.6cm・器高1.4cm・底径7.6cmに復元されるが、小片のため不確実。3は、白磁碗である。口縁部の小片で、口径17.2cmに復元されるが、小片のため不確実。その他、須恵器・土師器・陶器・瓦器が出土したが、細片のため図示し得なかった。

SD004・5・6・7 (Fig.9)

SD004からSD007の4本の溝は80cmほどの間隔で平行してほぼ直線的に走り、A2でわずかに蛇行する。その方位はおおよそN-21°-Wである。SD004は調査区の南端から北端までの延長85mを確認したが、SD005,006,007は南端のB9付近が、SD007はさらに北側のB3付近が削平のため途切れる。溝の幅は60~90cmの範囲で70cm前後が平均である。深さは25cmを測る。溝の形態は断面逆台形で、SD006,007は底の幅が狭くV字形に近い部分がある。覆土はいずれも灰褐色シルトを主体とし、底には灰色粗砂が溜まる。床面には鉄分が付着する。Fig.45の土層のSD003の東西1mほどの位置に溝状のくぼみが観察され、同様の溝があった可能性がある。

出土遺物 (Fig.10) SD004:4は、同安窯系青磁碗である。口縁部を1/6残す小片で、口径16.0cmに復元される。5は、瓦器塊である。口縁部の小片で、口径15.0cmを測るが、小片のため不確実。その他、須恵器・土師器・白磁・陶器が出土したが、細片のため図示し得なかった。

SD005:須恵器・土師器・青磁・白磁・黒曜石チップ・突帯文土器が出土しているが、細片のため

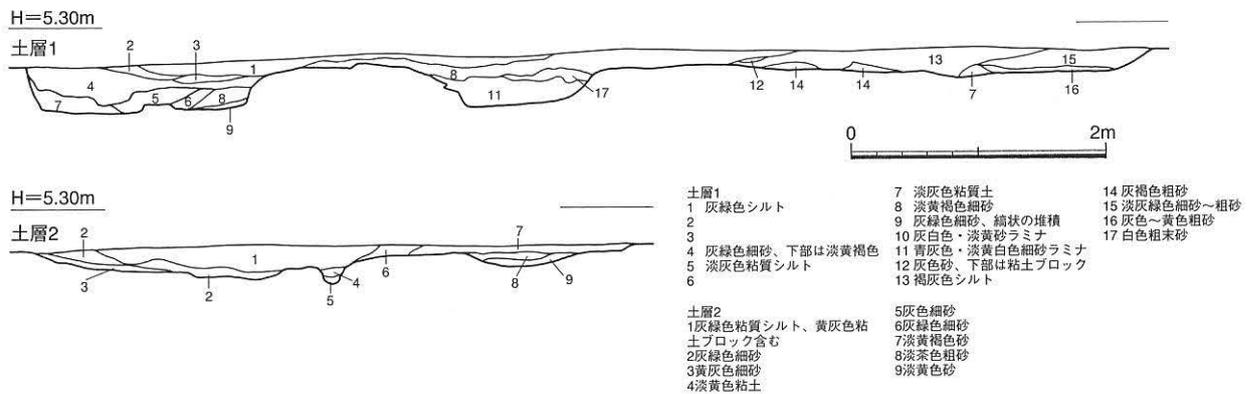


Fig.11 SD009土層断面実測図 (1/60)

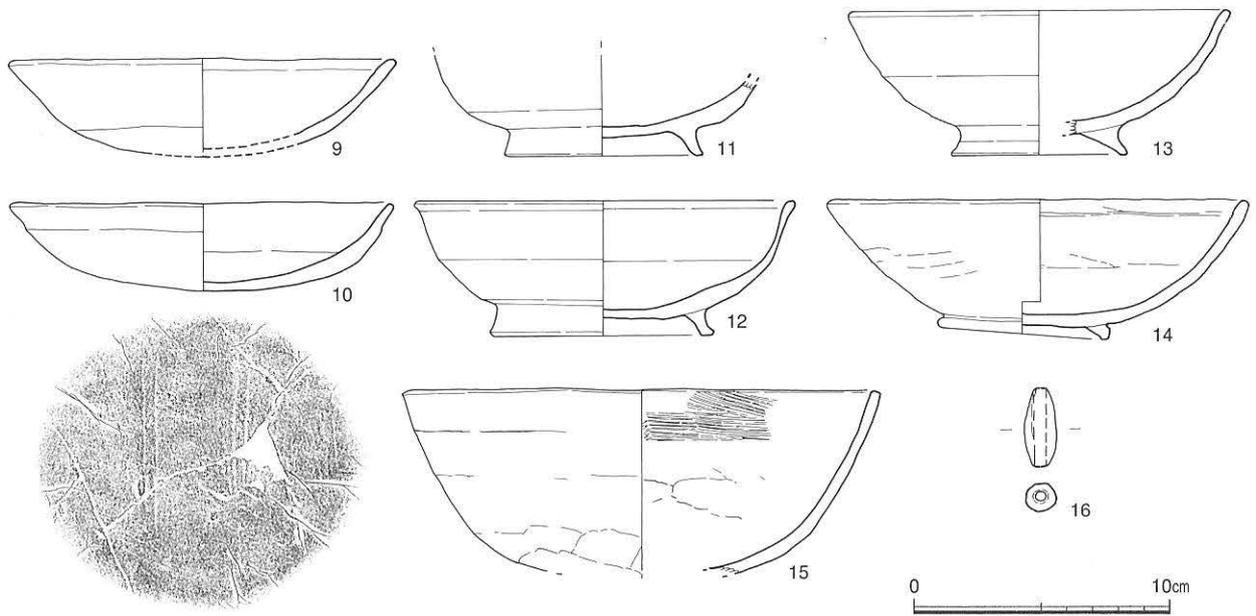


Fig.12 SD009出土遺物実測図 (1/3)

図示し得なかった。

SD006：6は、陶質土器である。胴部の小片で、外面に縄席文、その上から横方向の凹線を施文する。その他、須恵器・土師器・青磁・白磁・陶器・黒曜石およびサヌカイトのチップが出土しているが、細片のため図示し得なかった。

SD007：土師器・サヌカイトのチップが出土しているが、細片のため図示し得なかった。

SD008 (Fig.9)

SD007の東でわずかに蛇行しながらおよそN-4° -Wに走る溝である。C4・5区では河川1・河川2を切り、B2では削平のため途切れる。断面逆台形を呈し、幅は最大で90cm、深さ20cmを測る。覆土は灰褐色シルト、粘質シルトで底に灰白色粗砂が溜まり鉄分が沈着し、SD004等と大差ない。底には有蹄類のものと考えられる足跡が多く見られる。

出土遺物 (Fig.10) 7は、瓦器碗である。底部を1/4程度残す破片で、低くハの字に開く高台を有する。底径6.8cmに復元される。胎土には石英・長石粒が含まれ、焼成は良好である。8は、須恵質土

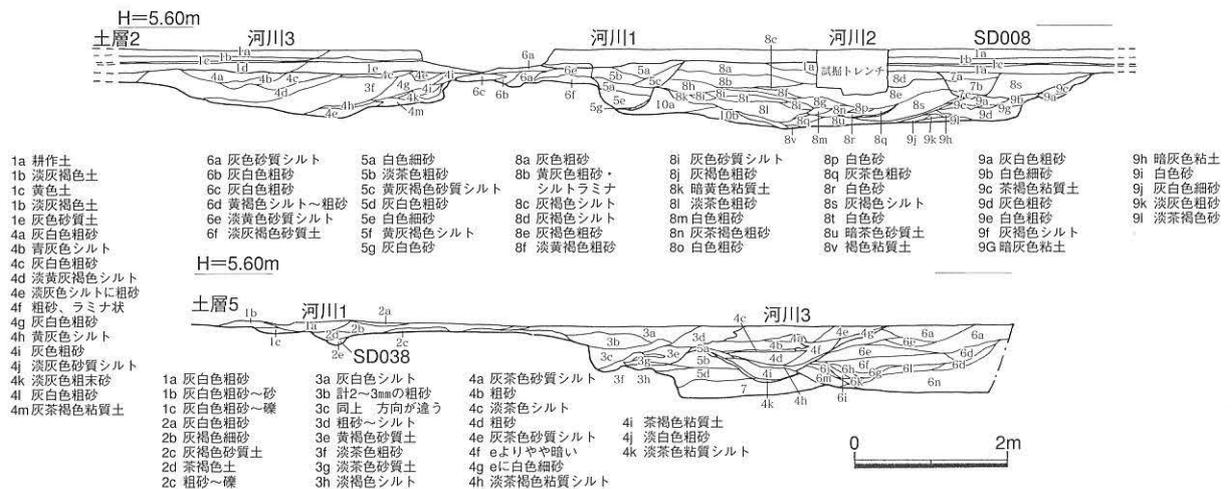


Fig.13 河川土層断面2・5実測図 (1/100)

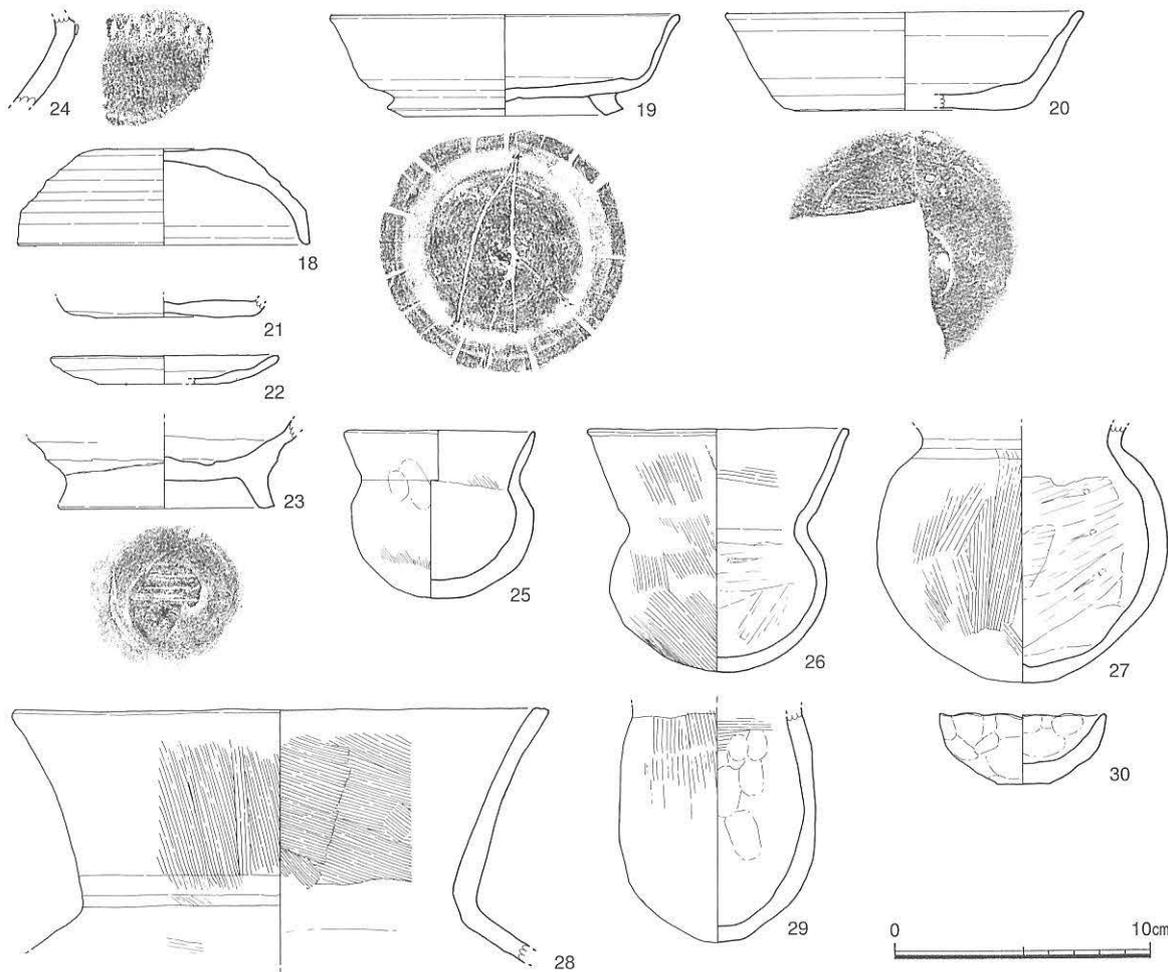


Fig.14 河川1出土遺物実測図 (1/3)

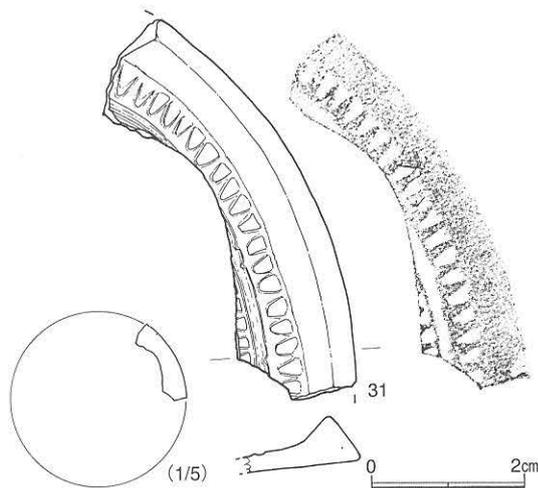


Fig.15 SD020出土鏡片実測図 (1/1)

器捏鉢である。底部を1/6程度残す破片で、底径8.8cmに復元される。その他須恵器・土師器・青磁・白磁・陶器・黒曜石およびサヌカイトのチップが出土しているが、細片のため図示し得なかった。

SD010 (Fig.8)

B5・6区で確認した溝でN35° -Wの方向に直線的に走り、河川2に切られる。淡黄灰色粘質シルトを覆土とする。幅30cm、深さ10cmほどで、断面U字形を呈す。底のレベルはほぼ一定である。南東側は途切れるが、C6・7区に1mほど延長と考えられる遺構を確認した。遺物は、出土しなかった。

SD044 (Fig.8)

E7で検出。SK043から北に延びる幅1m、深さ10~15cmほどの溝で延長14mを確認した。覆土SK043と変わらず区別できない。土師器甕が出土した。

SD118 (Fig.8)

河川081とSD125の間に走る幅40cm、深さ10cm弱ほどの溝でD5からB1間を確認した。この付

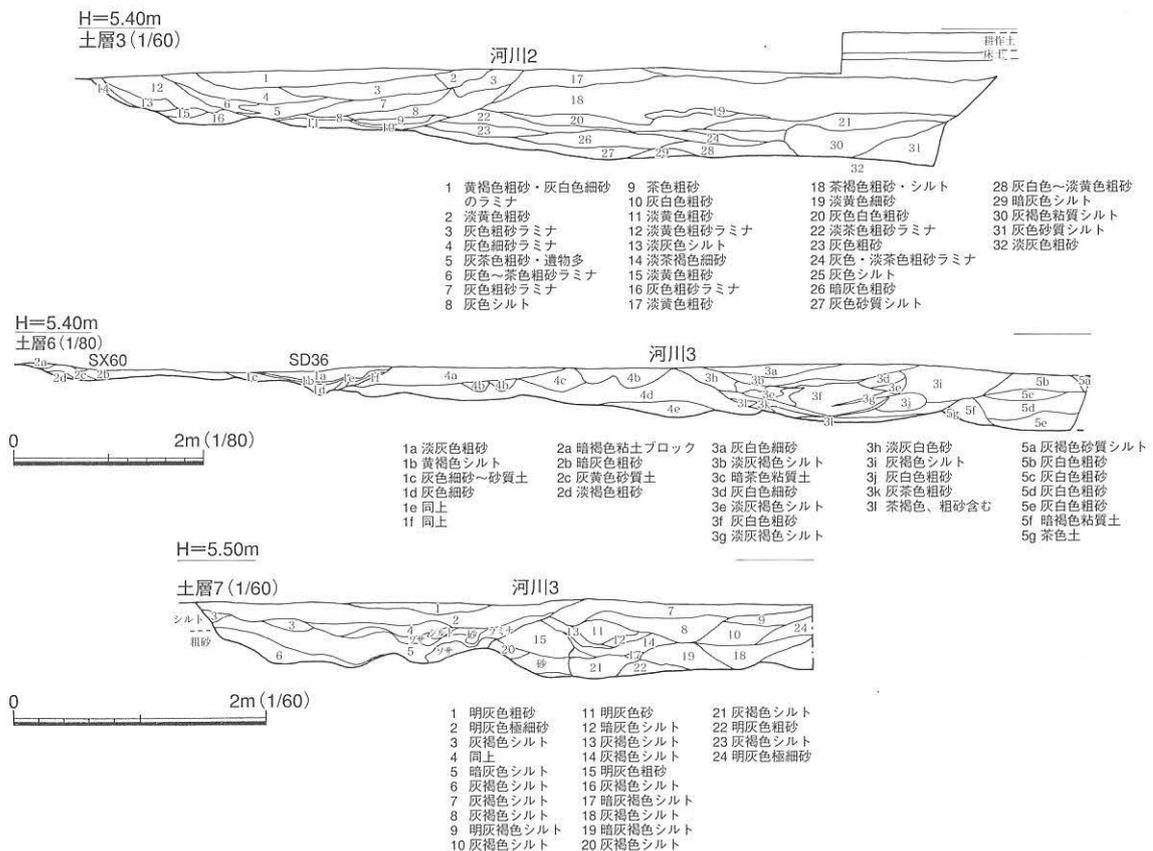


Fig.16 河川断面3・6・7実測図 (1/60・1/80)

近はIV層が無く、下面の遺構の可能性はある。覆土は淡灰茶褐色粘質シルトである。

SD126 (Fig.8)

C3で幅約40cm、深さ10cm前後の溝を検出した。北西に延びSD081に切られA2に続きと考えられる同様の溝が確認できる。南東はSD125と重なり検出は困難である。切り合いは不明。下面の遺構の可能性はある。

(2) 河川

I区の西東端から北流する河川堆積を検出した。西側のSD009は中世はじめの時期に限られる流れと考えられるが、東側では古墳時代前期から古代末までの河川が重なる。調査時に重なった部分は遺物の接合関係などから暫定的に河川1～3にまとめて報告する。II区でもいくつかの重なりが見られたが、調査期間の都合で一括して掘削を行ったため、その記述については推測の度合いが大きい。

SD009 (Fig.11)

調査区南西を流れる河川でSD003、004に切られる。複数の流れが重なっていると考えられる。南端のB9付近は幅2mほどで、その中は西側が幅80cm、深さ20cm、東側が幅1m、深さ30cmの溝に分かれる。他の部分もここまで顕著ではないにしても、2、3本の流れの単位が底の形状から確認することができるが、断続的で流れを追うことはできなかった。深さは10から20cmと浅く、所々で3・40cmの深みがある。覆土は灰色シルトおよび粗砂を主体とする。A7では粗砂がほとんどで、底付近に灰色シルトが若干堆積する(土層1・Fig.11)。同じくFig.11の土層2では西側半分ほどに新し

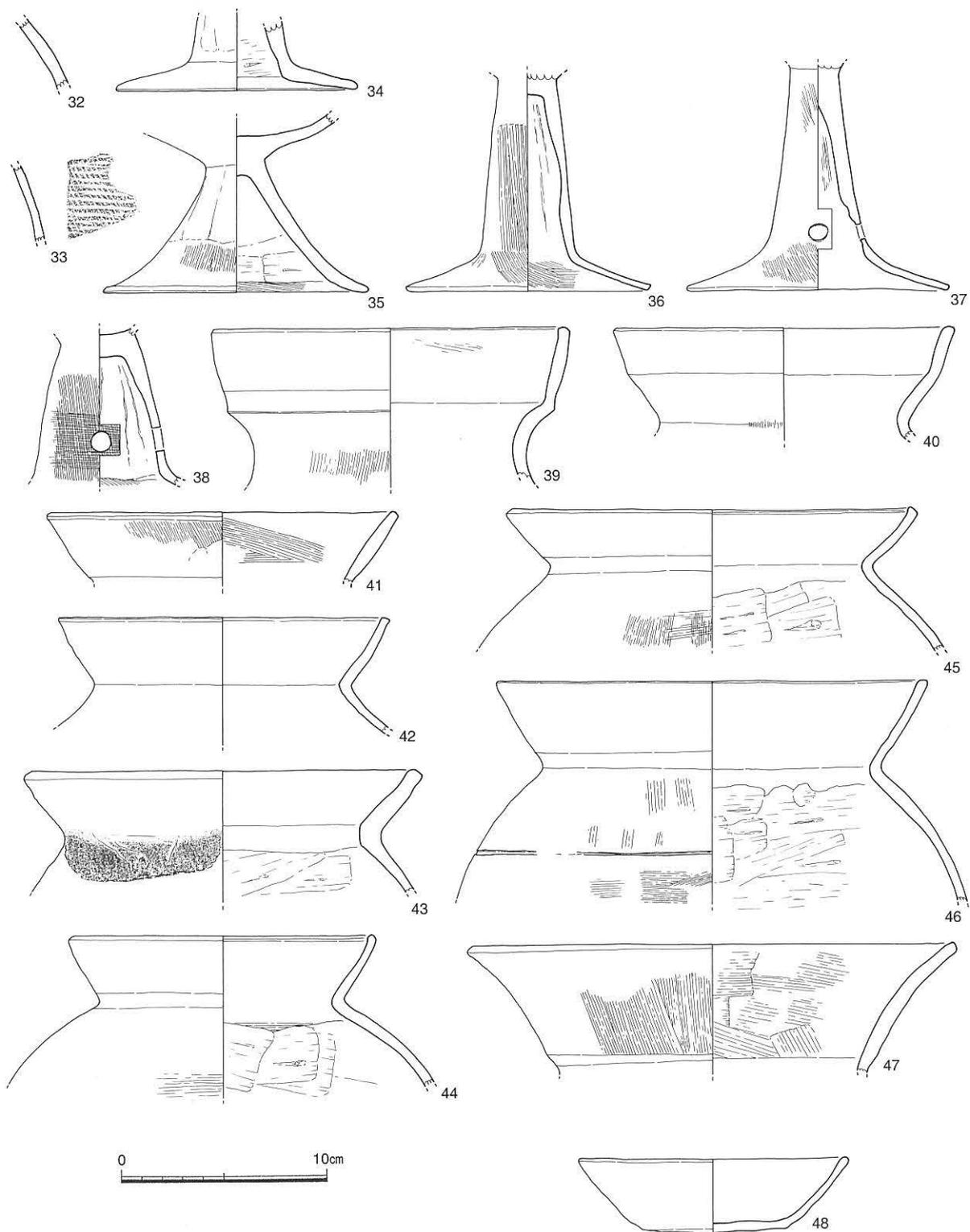


Fig.17 河川2出土遺物実測図 (1/3)

い流れが確認でき、これが蛇行することで川幅を広げている。また、この新しい流れがA6区で西に分かれる (SD015) と考えられるが、土層等では把握できなかった。

出土遺物 (Fig.12) 9・10は、土師器坏である。9は、かなり欠損する破片で、口径15.4cmに復元される。10は、4/5個体残存し、口径15.2cm・器高3.5cmを測る。11・12は、土師器壺である。

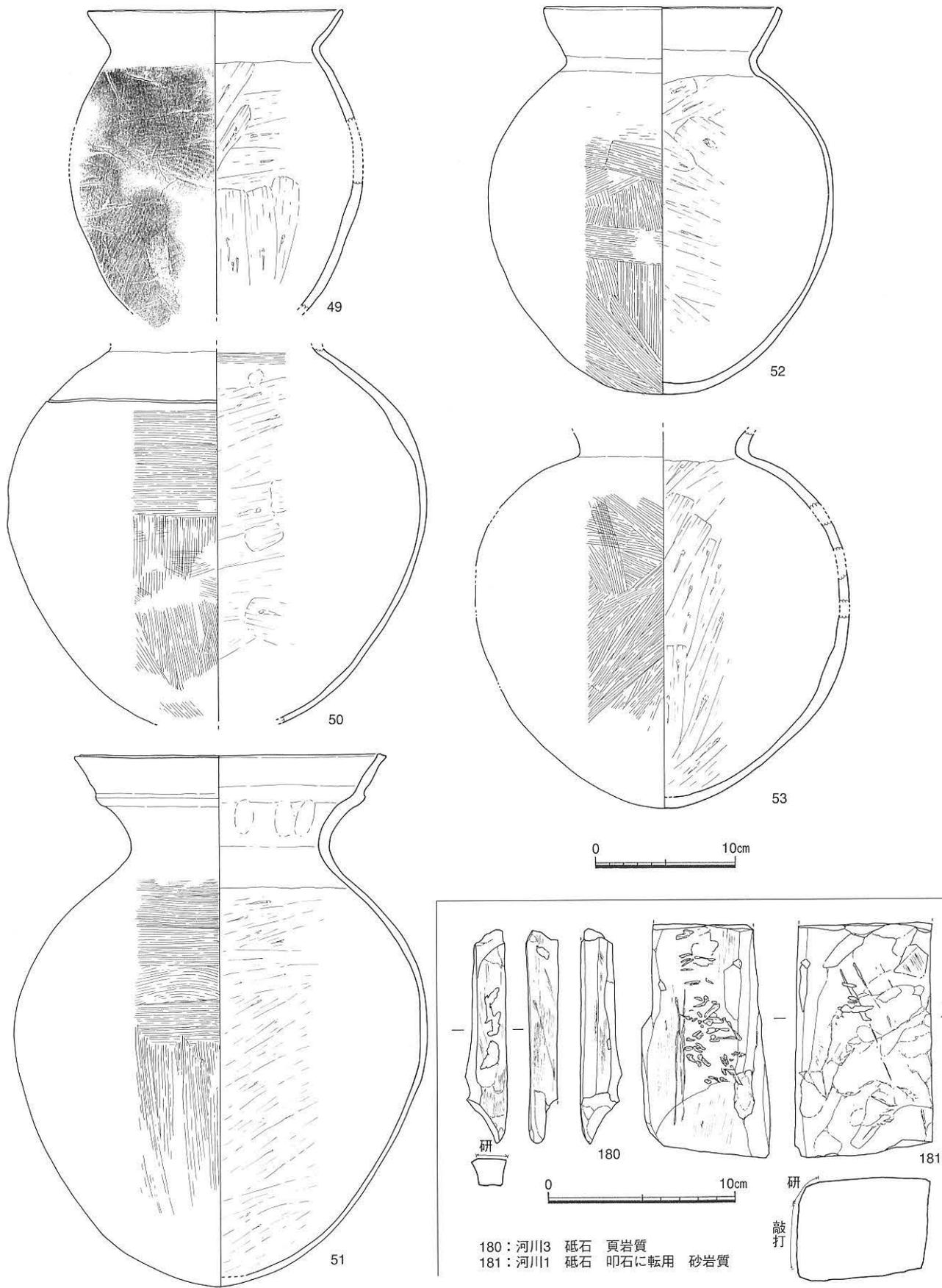


Fig.18 河川2出土甕類実測図 (1/4)

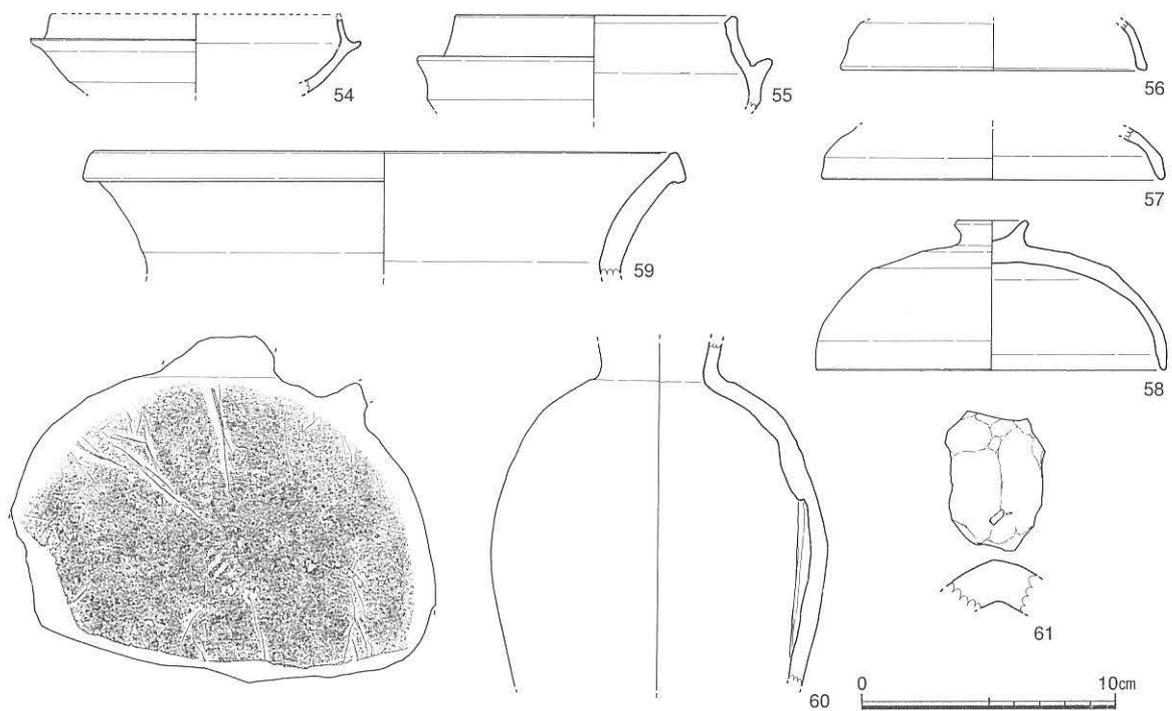


Fig.19 河川3出土須恵器実測図 (1/3)

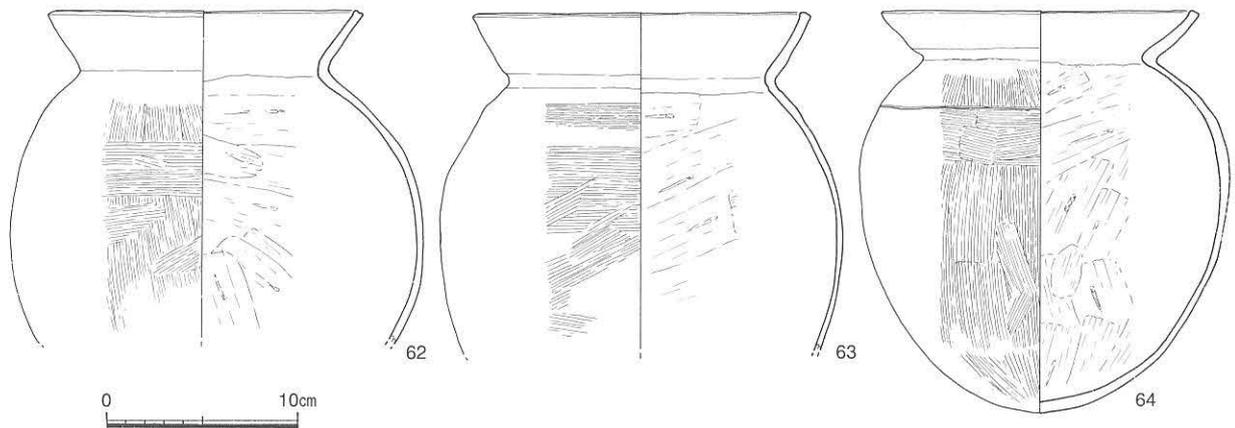


Fig.20 河川3出土甕実測図 (1/4)

11は、口縁部を欠損する破片で高台径7.8cmを測る。12は、1/3個体の破片で、口径15cm・器高5.3cm・高台径8.2cmに復元できる。15は、土師器鉢である。混入であろう。口径18.8cmに復元される。13・14は、瓦器壺である。13は口径15cm・器高11.4cm・高台径6.8mに復元できる。14はかなり破損するが、口径16.6cm・器高5.5cm・高台径6.4cmに復元できる。その他、青磁・陶器・鉄滓が出土したが、細片のため図示し得なかった。

河川1 (Fig.8)

C9南東端から蛇行しD7で東からの流れに合流するまで明瞭にその河道が追える。それ以降は断面から復元した結果、C4でII区に伸びる。幅1mから1.5m、深さ10~30cmを測り、断面U字形を呈す。覆土は白色粗砂を主体とし、所々底面に鉄分が沈着する部分がみられる。SD008に切られる。Fig.13土層5の西側に堆積状況が見られる。底は暗褐色粘土のⅧ層で大小の凹凸がある。B3で河川081に入り、分けて調査できていない。Fig.13土層2で5a~5g層を埋土とする流れが観察されるが、

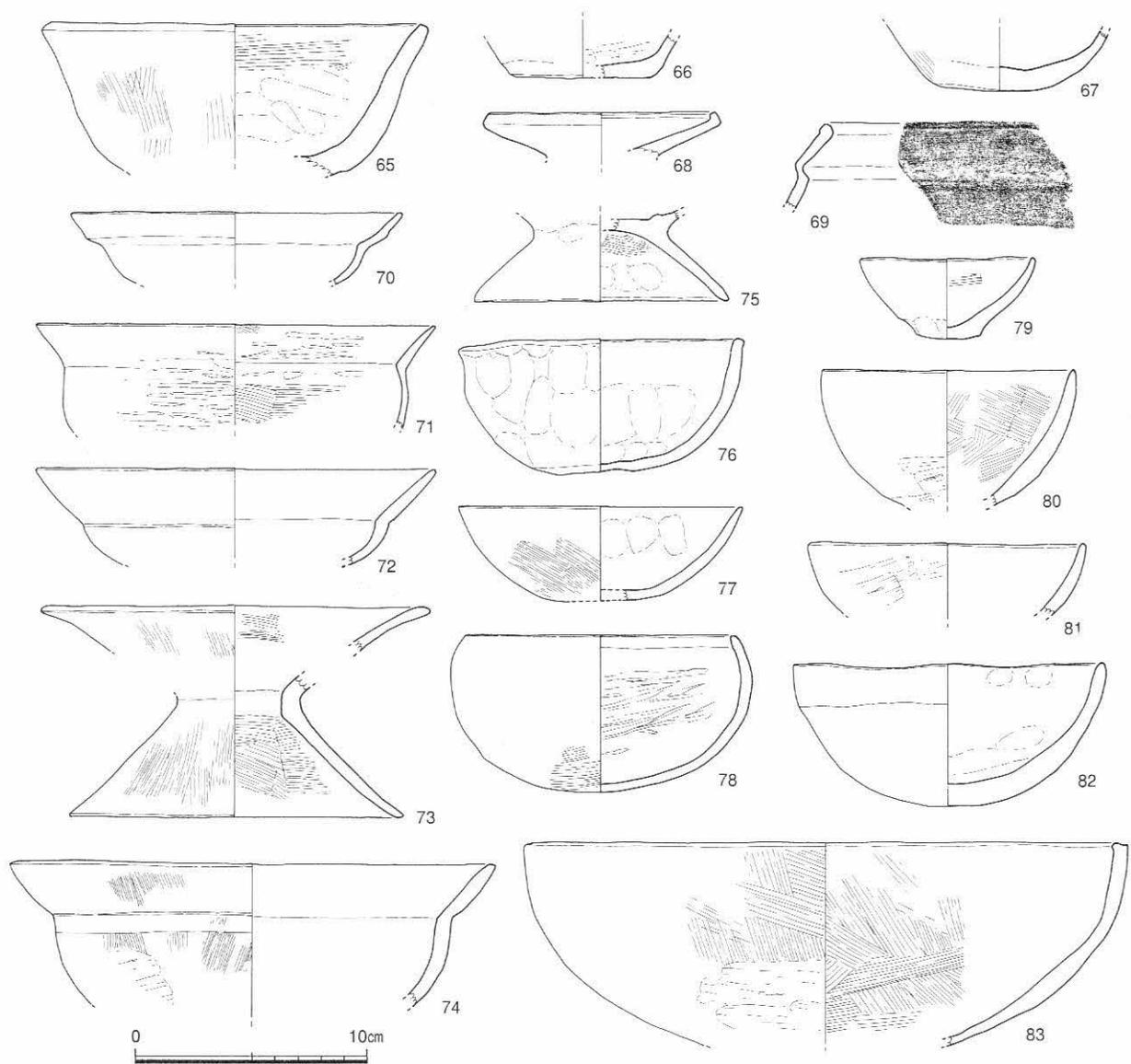


Fig.21 河川3出土鉢・器台実測図 (1/3)

これが河川1の延長と考えられる。

出土遺物 (Fig.14) 18は、須恵器坏蓋である。口縁の大半を欠く。口径11.4cmに復元される。19は、須恵器坏である。口径13.8cm・器高4.0cmを測る。20は、土師器坏である。口縁部にススが附着する。灯明皿か。21・22は、土師皿である。23は、土師器塊である。底部の破片で、高台径8.5cmを測る。24は、鉢の小片。25・26は、小型丸底壺である。いずれも口縁部を破損し、25は口径7.5cm・器高6.6cmを測る。26は口径10.4cm・器高9.5cmに復元できる。27は、甕である。胴部の破片で、胴部径11.2cmに復元できる。28は、壺である。口縁部の破片で、口径21.2cmに復元できた。29は、小型甕である。復元胴部径7.6cm。30は、手捏土器である。1/2個体の破片で、復元口径6.5cmを測る。その他河川1からは突帯文土器・弥生土器の小片が出土している。

SD020 (Fig.8・15)

河川1に切られる。幅50cm、深さ2、3cm、延長5mを確認した。粗砂を覆土とする。鏡片が出土。出土遺物 (Fig.15) 文様帯から外縁部にかけての破片である。文様帯には鋸歯文が2重に巡る。獣帯鏡もしくは神獣鏡か。復元直径11.5cmを測る。その他須恵器坏類が出土している。

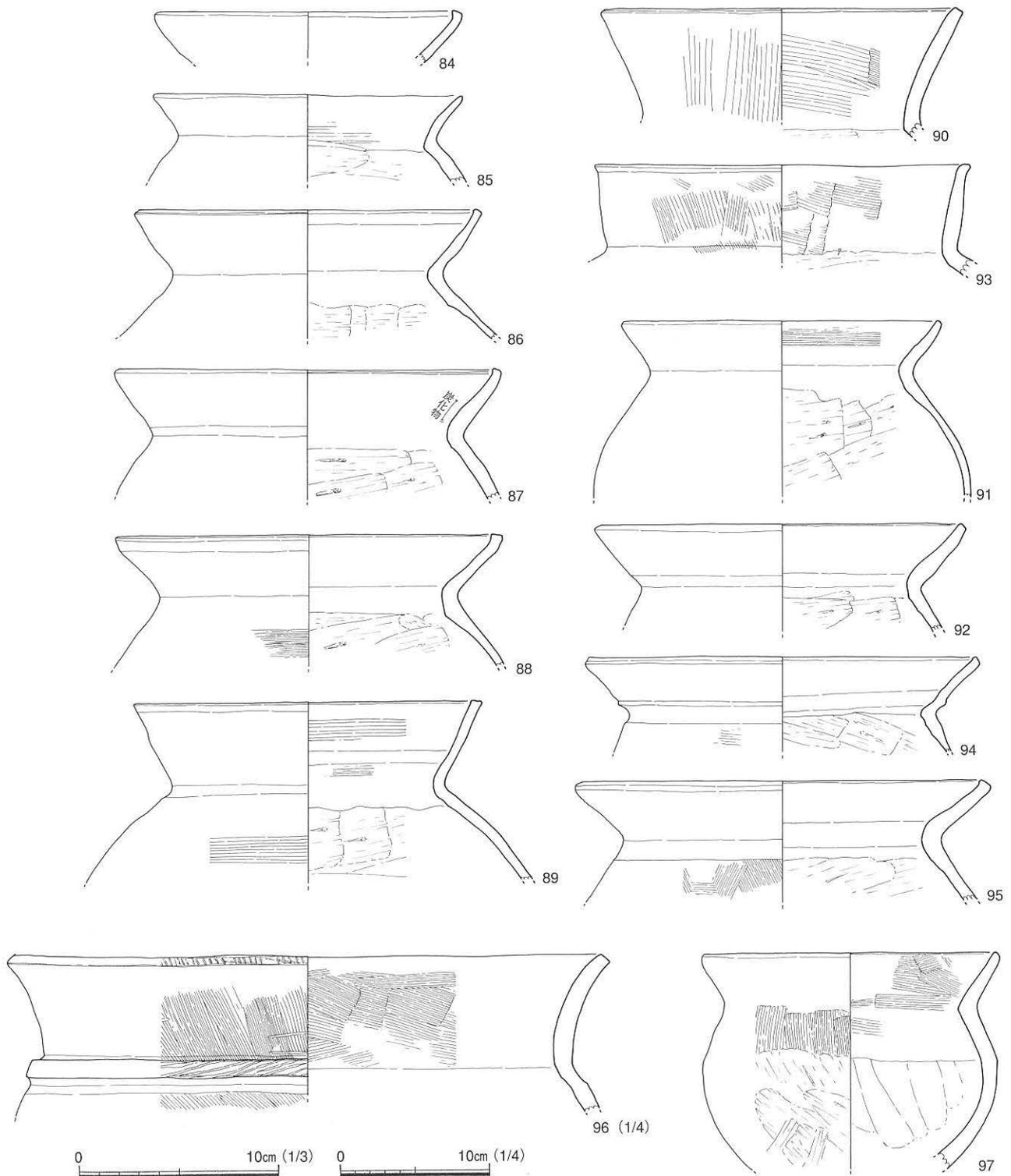


Fig.22 河川3出土甕・壺類実測図 (1/3・1/4)

河川2 (Fig.8)

D6からB4にかけて比較的直線的な河道を検出した。Fig.13土層2・Fig.16土層3に観察され、土層2部分では幅7m以上、深さ0.9mを測る。D7では河道を検出できなかったが、C5付近から浅いプランが検出される。埋土は砂とシルトの互層で、一部ラミナ状を呈する。C5付近が掘り足りない可能性もある。底近くまで遺物があり、完形に近い布留甕が出土している。

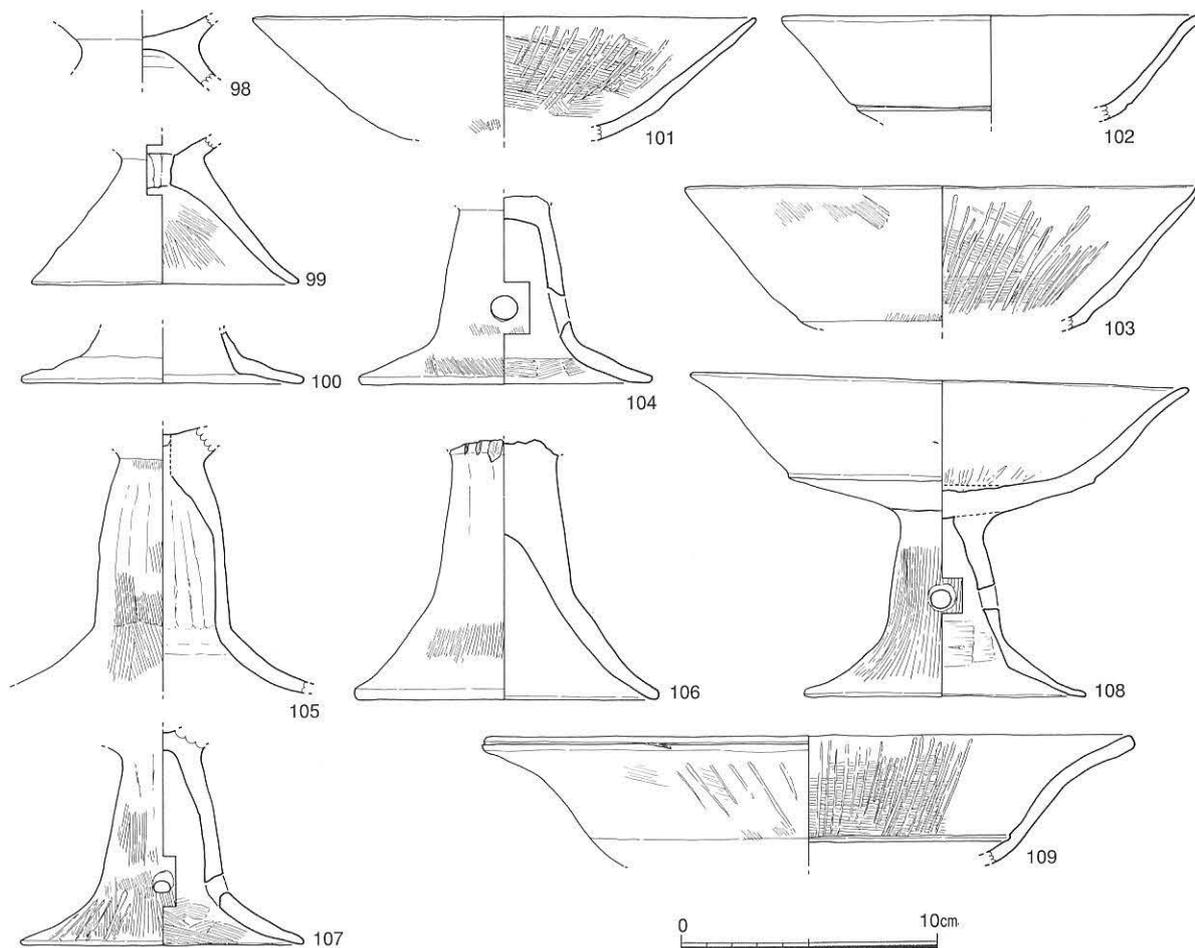


Fig.23 河川3出土高坏・高台実測図 (1/3)

出土遺物 (Fig.17) 32・33は、甕である。胴部の小片。33は外面に叩き目を有する。34～38は、高坏である。34は、脚部の破片。底径11.8cmを測る。35は、坏部を欠損する個体。底径12.9cmを測る。36は、底部を大きく欠く。復元底径12cmを測るが、不確実。37は、脚部の破片。河川081出土遺物と接合する。復元底径12.6cmを測る。38は、脚部の破片。筒部はややふくらむ。39・40は、二重口縁壺である。いずれも口縁部から頸部の破片で、39は1/4程度残存で復元口径17.6cm、40は復元口径16.8cmを測るが、小片のため不確実。41から47は、甕である。41は、口縁部1/4程度の破片。復元口径17.2cmを測る。42は、口縁部から頸部にかけての破片。復元口径16.4cmを測るが、小片のため不確実。43は、口縁部から頸部にかけて1/4程度残存する破片。復元口径19.4cmを測る。44から46は口縁部から胴部にかけての破片で、44は復元口径14.6cmを測るが、小片のため不確実。45は小片のため不確実だが復元口径19.5cmを測る。46は1/6程度の破片で、復元口径21cmを測る。47は口縁部の小片。復元口径24cmを測る。48は上層出土の土師器坏。復元口径13.2cmを測る。(以下Fig.18) 49は、甕である。口縁部から胴部にかけての破片で、復元口径18.4cmを測る。50は、甕胴部2/3の破片である。復元胴部最大径31.5cmを測る。51は、二重口縁壺である。4/3个体残存し、口径21.5cm・器高38.3cm・胴部径29.9cmを測る。52は、甕である。口縁部を大きく欠き、口径17.2cm・器高27.7cmを測る。53は、口縁部を欠損する甕である。胴部径26.8cmを測る。

SD036 (Fig. 8)

Fig.16土層6部分で幅1.8mほどの粗砂の流れを確認したがプランがはっきりしない。断面形態からFig.13土層5の2d,e層が同様の流れか。

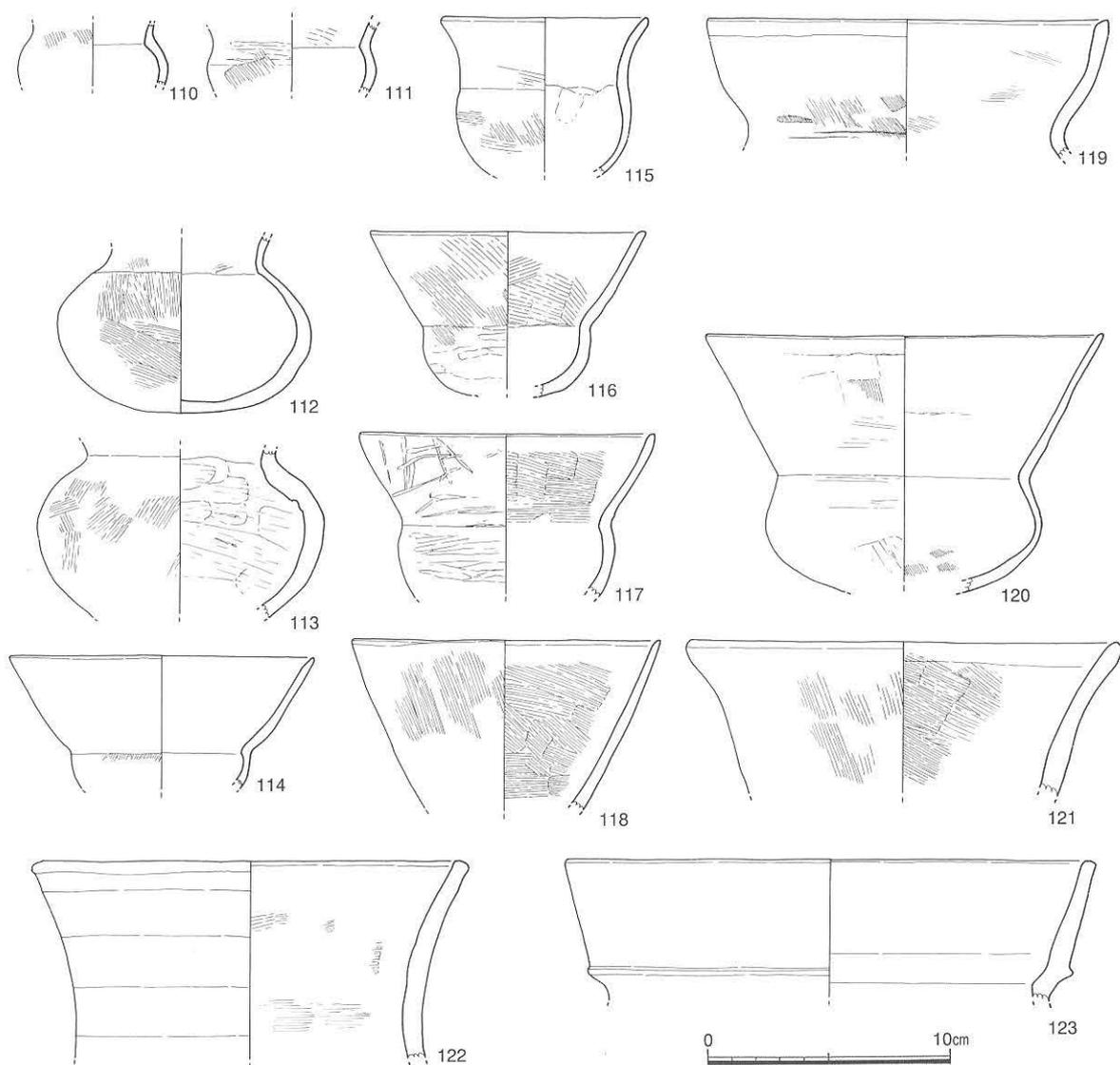


Fig.24 河川3出土壺類実測図 (1/3)

河川3 (Fig.8)

調査区東縁辺部を蛇行しながら流れる。南はE7・E8から検出されFig.16土層7を経てFig.16土層6の3・4・5層に至る。D6になると全体に浅くなり、プランははっきりしなくなる。全体に粗砂とシルト質の覆土である。最下層の粗砂まで遺物を含む。E7では完形に近い土師器が多く出土している。D6付近の底は白色の粗砂になるが、遺構として捉えた河川堆積との境界ははっきりしない。D6、D7、C7付近になると弧を描いて走る。この部分になると南からの河道とのつながりははっきりしない。この部分からは須恵器が出土しており、河川3全体の時期は古墳前期末～後期後半頃にわたる。

河川3にはFig.13土層5に見られるように3から4つの流れがあり、この付近の埋土は粗砂とシルトの互層の堆積である。河川全体にわたり強い流れが想定されると思われる。

出土遺物 (Fig.19~24) (Fig.19) : 54・55は、坏蓋である。54は、口縁を欠く小片。受け部復元径13.0cmを測る。55は、復元受け部径14.0cmを測る。56~58は、蓋である。56は、口縁部の小片。復元口径12.2cmを測る。57は、口縁を1/4残す破片。復元口径13.6cmを測る。58は、口縁部を3/4欠損する。復元口径13.8cm・器高5.9cmを測る。59は、甕である。口縁部を1/4残す。復元口径23.8cmを測る。60は、提瓶である。胴部から頸部の破片で、復元頸部径5.4cmを測る。61は、

羽口の小片である。残存長3.5cmを測る。(Fig.20) : 62は、底部を欠く個体。口径15.8cm・胴部径21.8cmを測る。63は、1/2個体分の破片。復元口径17.6cmを測る。64は、2/3個体残存し、口径16.4cm・器高21.1cmを測る。(以下Fig.21) : 65は、鉢である。1/8個体の破片で、復元口径16.6cmを測る。66は、甕である。底部の破片。復元底径5.6cmを測る。67は、鉢底部である。底径5.2cmを測る。68は、器台である。口縁部の小片。復元口径10.2cmを測る。69は、縄文土器浅鉢である。口縁部から体部の小片。70~72は、鉢である。いずれも底部を欠く破片。70は、1/8程度の破片で、復元口径14.4cmを測る。71・72は、1/6程度の破片。71は復元口径17.2cmを測る。72は、復元口径15.4cmを測る。73は、器台である。口縁部は1/8程度の破片で、復元口径15.0cm・復元器高8.3cm・底径14.2cmを測る。74は、鉢である。底部を欠き、復元口径21.0cmを測る。75は、脚付坏である。脚部1/3程度の破片。復元底径11.0cmを測る。76~78は、坏である。76は、2/3個体残存する破片で、口径12.3cm・器高5.8cmを測る。77は、1/2個体分の破片で、復元口径12.2cm・器高4.0cmを測る。78は、ほぼ完形である。口径9.5cm・器高6.7cm。79は、手握土器である。口縁部は1/4残存。復元口径7.6cmを測る。80~83は、坏である。80・81・83は底部を欠く。80は復元口径11.0cm、81は復元口径12.0cm、83は26.0cmを測る。82は1/2弱の破片で、復元口径13.6cm・器高6.1cm。(以下Fig.22) : 84は、口縁部の小片。復元口径15.6cmを測る。85~89は、口縁部から頸部にかけての破片。85は小片で復元口径15.6cmを測る。86・87は1/6程度残存する破片。86は復元口径17.6cmを測る。87は19.4cm。88は口唇部が内傾し、復元口径19.4cmを測る。89は口縁を1/2残す。復元口径17.5cmを測る。90は在地系の壺。口縁を1/6程度残す破片で、復元口径18.4cm。91~96は、口縁部から頸部にかけての破片。91は口縁を1/6残す破片。復元口径16.2cmを測る。92は口縁を1/4残す破片。復元口径18.6cm。93は伝統的V様式系の壺。復元口径19.0cm。94は復元口径19.6cmを測る。95は全周の1/6程度の破片。復元口径21.0cmを測る。96は在地系で、全周の1/8程度の破片。復元口径40.8cm。97は、1/3個体残存する。口径15.0cmに復元できる。(以下Fig.23) : 98は、高坏である。脚部の小片。99は、器台である。脚部の破片で、復元底径10.6cm。100は、高坏である。脚部を1/4程度残す破片で、底径11.2cmに復元できる。101~103は、高坏坏部である。101は全周の1/6程度の破片。復元口径19.8cm。102は1/8程度の破片で、口径16.4cmに復元できる。103は1/2程度の破片で、復元口径20.2cmを測る。104~107は脚部である。104は丹塗りの可能性があり、底部復元径11.6cmを測る。105は脚部端を欠く。106は底部の多くを欠き、復元底径12cmを測る。107は1/2程度の破片で、復元底径11.1cm。108は全体の8割を残す。口径20cm・器高12.8cm・底径10.8cmを測る。109は坏部で1/6残る。復元口径25.6cmを測る。(Fig.24) : 110~118は、小形丸底壺である。110は、1/4個体の破片で、復元胴部径6.2cmを測る。111は、1/3個体の破片で、復元胴部径7.0cmを測る。112は、口縁部を欠き、胴部径10.4cm。113は、胴部の破片。復元胴部径11.8cm。114は、1/8個体分の破片。復元口径12.6cm。115は、1/2個体の破片。復元口径8.6cmを測る。116は、1/4個体の破片。復元口径11.4cm。117は、1/6個体の破片。復元口径12.2cm。118は、口縁部の小片。復元口径12.8cm。119は、壺である。口縁部の小片で、復元口径16.6cm。120は、小形丸底壺である。1/8個体分の破片。復元口径16.4cmを測る。121~123は、壺の口縁部である。121は口径18.0cmに復元できるが、小片のため不確実。122は全周の1/6程度の破片で、復元口径18.0cmを測る。123は二重口縁壺。小片のため不確実だが口径22.0cmに復元できる。

河川081 (Fig.8)

II区の河川は上部を重機で、下部も一括して掘削を行ったため2条にまとめた。流れについては、

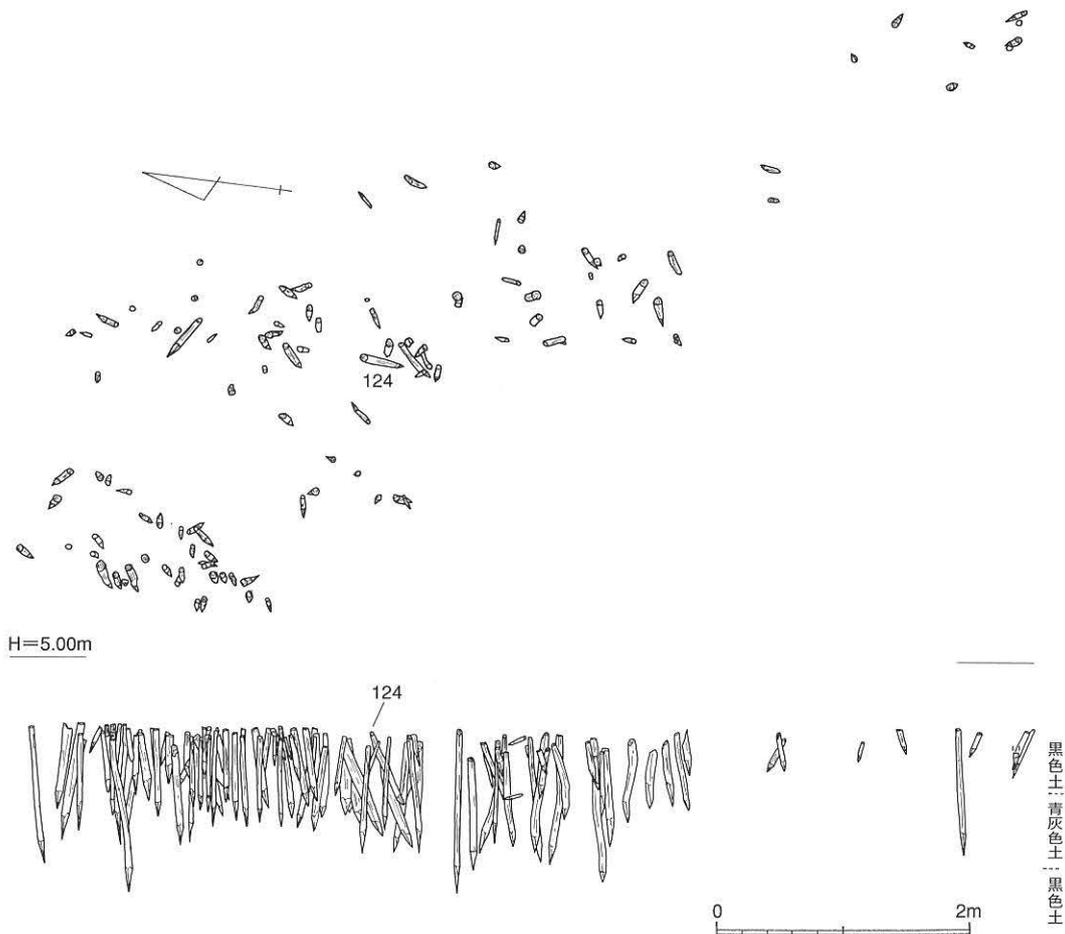


Fig.25 河川081杭列1実測図 (1/60)

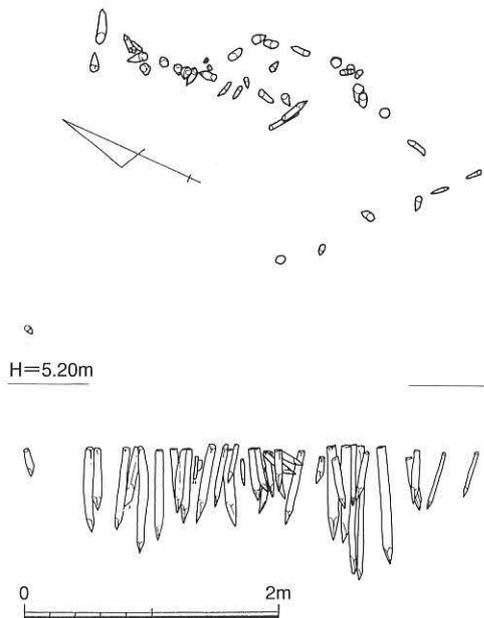


Fig.26 河川081杭列2実測図 (1/60)

平面的に追うことはできなかったが、調査区北壁土層 (Fig.28) を観察することによって複数の流れを想定した。埋土はいずれも粗砂～細砂・シルトの互層で、ある程度の水量・流速を持つ河川であったと思われる。第17層とした層群が最も古い。17層を切る形で、第13層が堆積する。13層を埋土とする河川埋没後、第12層が堆積。これと第16層を切る形で第14・15層が堆積する。14・15層は一つの流れとできる可能性があるが、現場では確認できなかった。最終的に河川は第11層を埋土とする流れになり、河川081は埋没する。削平のため正確な数値はわからないが、断面で見る限り幅3～4m・深さ60cm程度の河川が流路をずらしながら流れている状況が観察される。第11層が中世前半期の溝SD004・5・6に切られているため、河川081は、古墳時代前期末～古代にかけて、6もしくは7回河道を変えながら断続的に流れているものと思われる。また、下層に河川2出土遺物と接合する遺物がみられ、下部のいずれかの河道は河川2の延長に当たる可能性が考えられる。また、底面の暗褐色粘土上で、杭列を検出した。砂層を切っておらず、第13層・第15層もしくは第17層に伴うものと思われる。径5cm程度の樹枝を先端のみ加工して立杭とするが、

下層に河川2出土遺物と接合する遺物がみられ、下部のいずれかの河道は河川2の延長に当たる可能性が考えられる。また、底面の暗褐色粘土上で、杭列を検出した。砂層を切っておらず、第13層・第15層もしくは第17層に伴うものと思われる。径5cm程度の樹枝を先端のみ加工して立杭とするが、

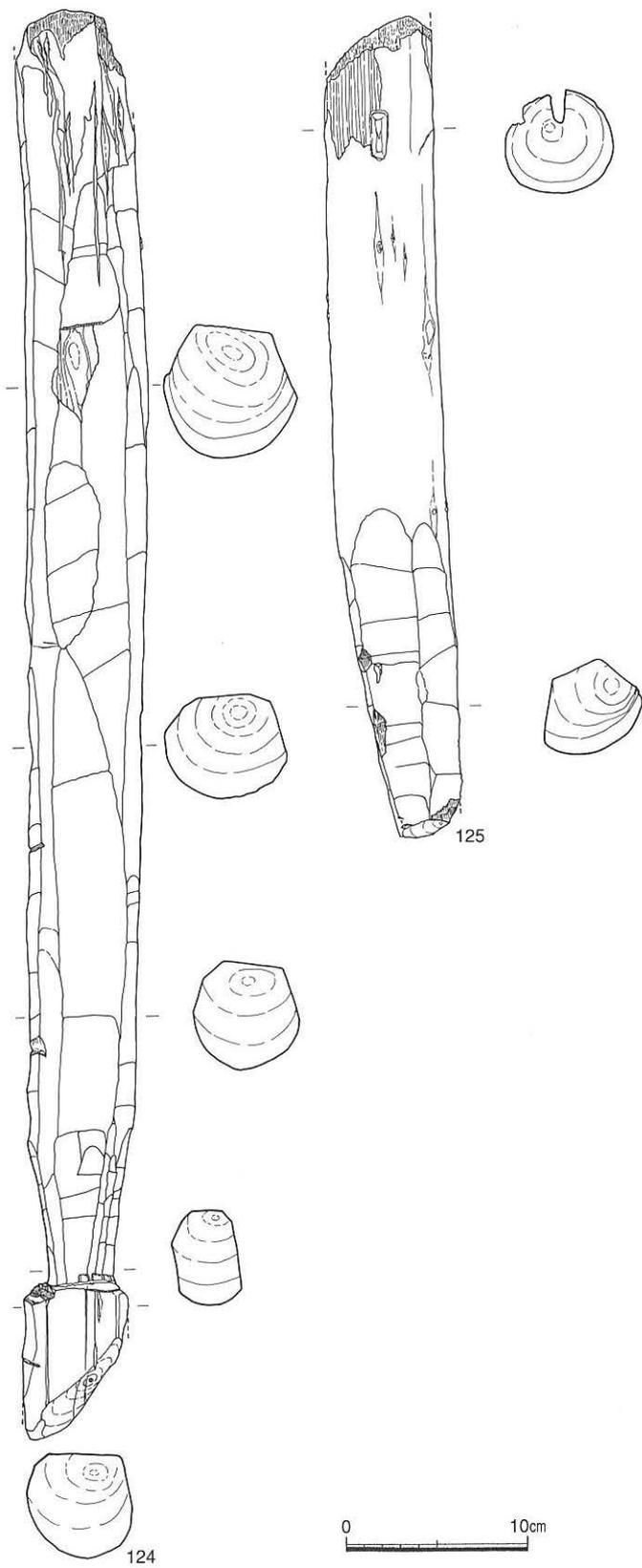


Fig.27 河川081杭列1出土杭実測図 (1/4)

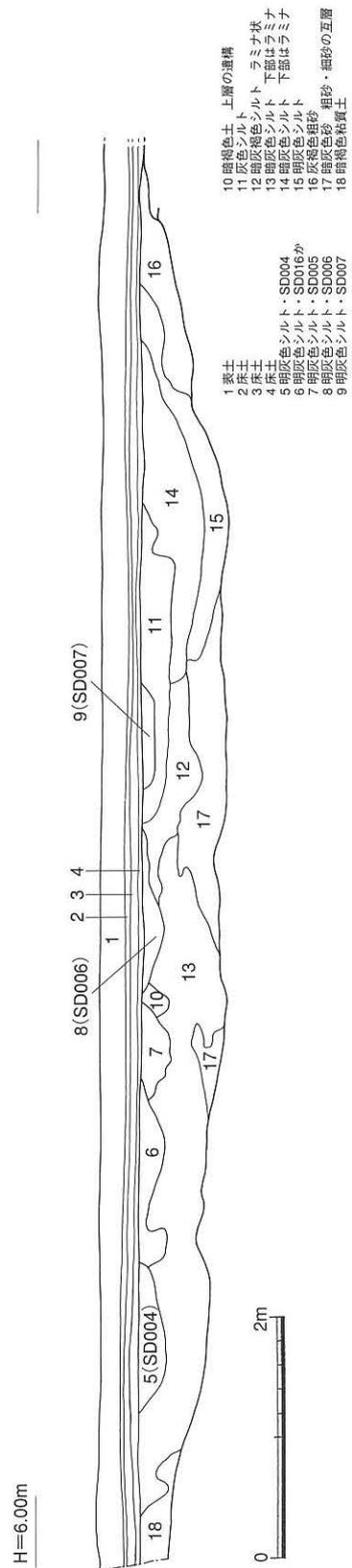


Fig.28 河川081土層断面実測図

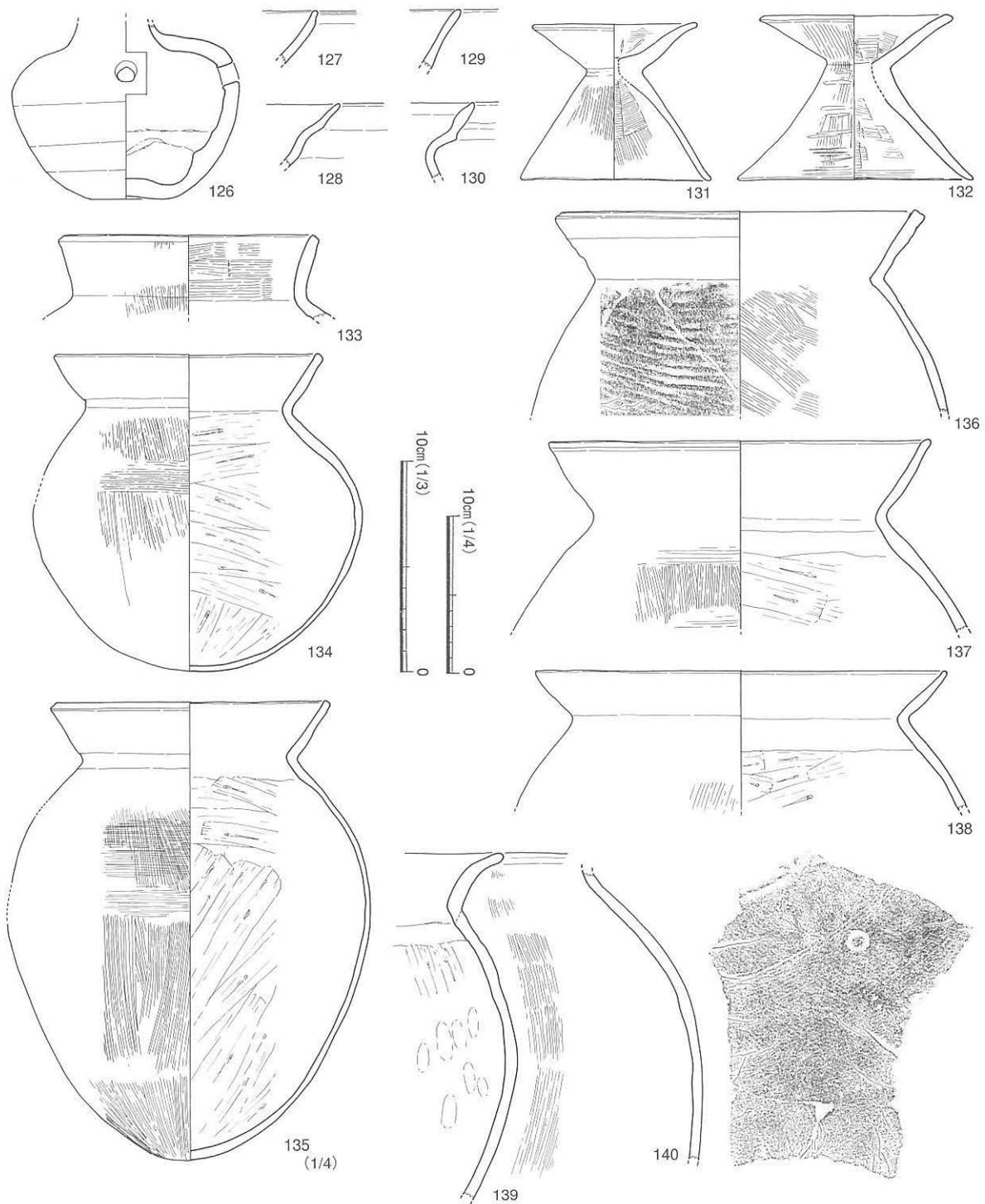


Fig.29 河川081出土須恵器・土師器実測図 (1/3・1/4)

内1本に竖杵未製品と思われる木製品を転用した杭が出土した (Fig.27)。長い杭の間に短い杭を多数打ち込む構造がみられる。河川081の護岸施設か。

出土遺物 (Fig.28・29・30) (Fig.28) : 124は、残存長78.8cm、最大径7.2cmを測る。丸太材の樹皮を除去した後、外周1/2について大略3方から削り加工を施し、下方にはくびれを持たせる。竖杵未製品を転用したものか。125は先端以外は樹皮を残す。図上方、杭側面に長辺2.8cm、短辺0.8cm、深さ2.2cmの直方体状の穿孔を持つ。杓穴か。残存長45.6cm、最大径7.0cmを測る。

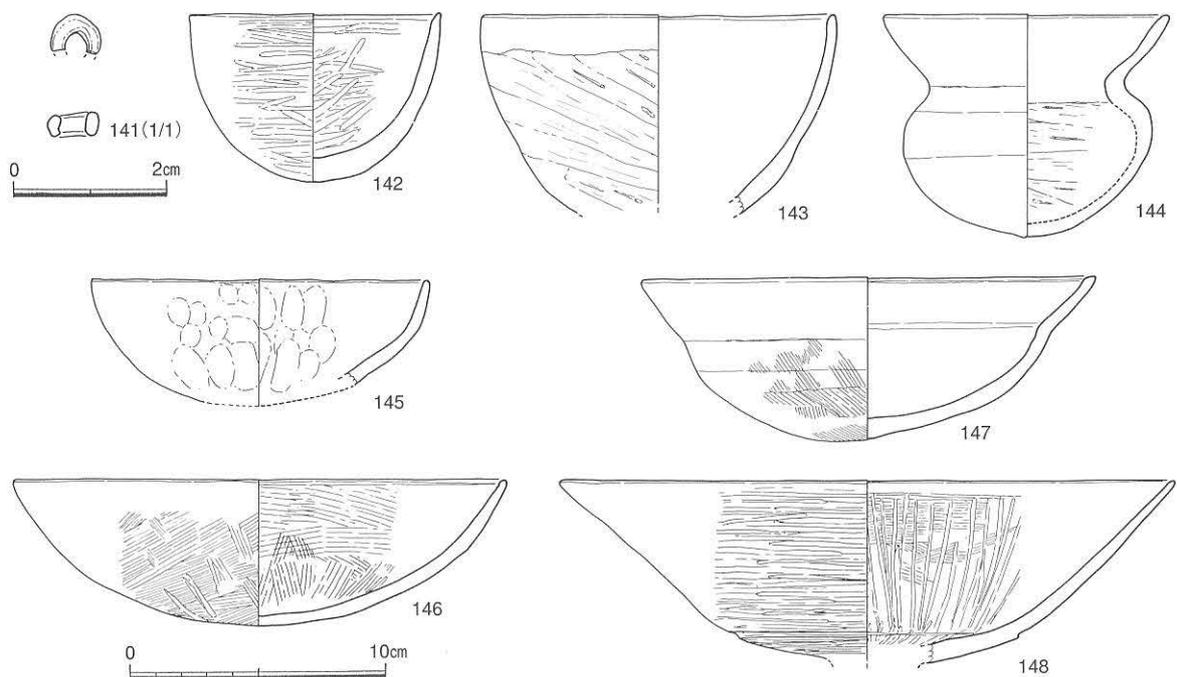


Fig.30 河川081出土土師器・玉類実測図 (1/3)

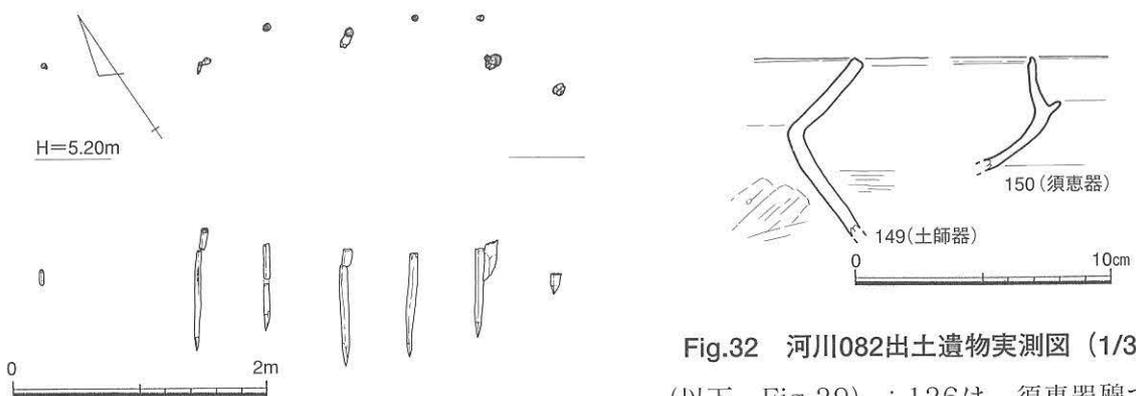


Fig.31 河川081検出杭列3実測図 (1/60)

Fig.32 河川082出土遺物実測図 (1/3)

(以下、Fig.29)：126は、須恵器甕である。頸部から上を欠く。胴部径10.8cm。127～130は、口縁部の小片である。127は甕、128は坏または小形丸底壺、129は壺か。130は二重口縁壺である。131・132は、器台である。131は、ほぼ完形で口径7.6cm、器高7.5cm、底径9.0cmを測る。132は3/4個体残り、口径9.7cm、器高6.6cm、復元底径10.6cmを測る。133は在地系の壺である。口縁部の小片。復元口径11.8cmを測る。134・135は、甕である。134はほぼ完形。口径12.8cm、器高15.1cm、胴部径15.7cmを測る。135はほぼ完形に復元。口径17.1cm、器高29.2cm、胴部復元径23.0cm。136～140は、甕である。いずれも口縁部から胴部の破片。136は、口縁部で1/2残る破片。復元口径22.4cm。137は、小片で不確実だが口径17.8cmに復元。138は復元口径19.6cmだが小片のため不確実。139は小片。5世紀に下る個体。140は胴部の小片。(以下、Fig.30) 141は、ガラス製白玉である。2/3個体分の破片。外径0.7cm、器厚0.3cm、内径0.3cmで、色調は透明感あるコバルトブルー。142・143は、鉢である。142は、4/5個体。口径9.7cm・器高6.6cm。143は、粗い作りで手捏ねに近い。復元口径13.8cm。144は小形丸底壺。完形で出土。口径11.0cm・器高8.7cm。145・146は、坏である。145は、手捏ねで口径13.2cmに復元。146は3/4個体残存し、口径19.2cm・器高5.8cmを測る。147は、鉢である。1/5程度欠損し口径

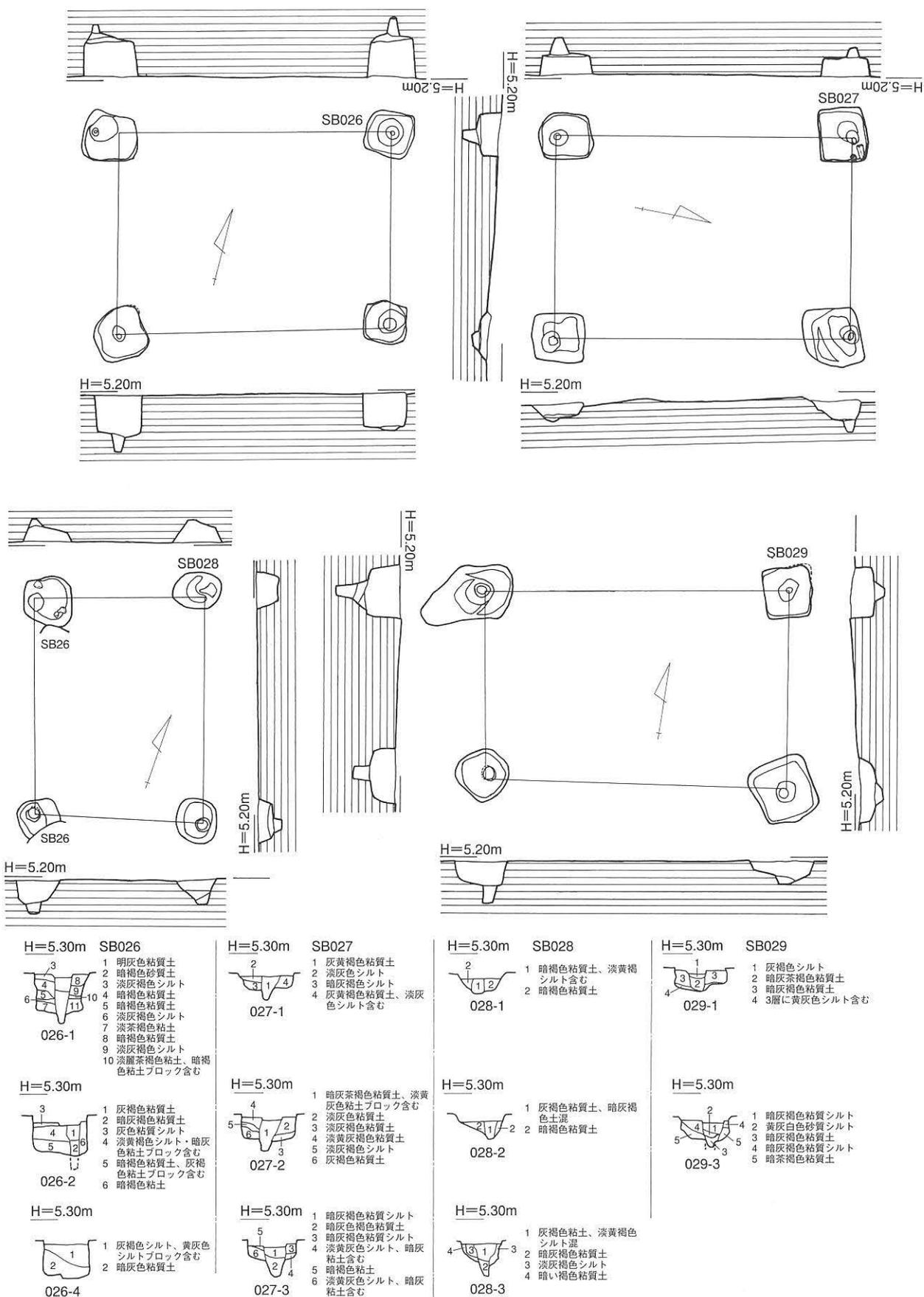


Fig.33 SB026・027・028・029実測図 (1/30)

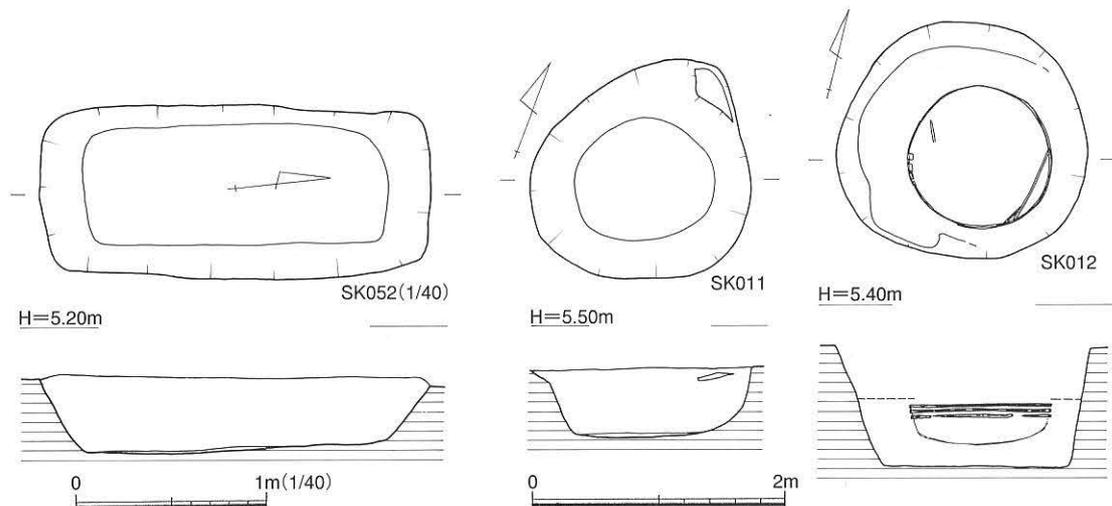


Fig.34 SK011・012・052近世土壌実測図 (1/40・1/60)

17.8cm・器高7.4cmを測る。148は、高坏である。坏部を3/4程度残す破片で、復元口径24.0cmを測る。

河川082 (Fig.8)

A4～A3にいたり、081に合流する河川である。Fig.28では第4層の堆積が082にあたり、081の流れの一部とみられる。埋土は粗砂～細砂・シルトの互層で、ある程度の水量・流速を持つ河川であったと思われる。本河川では杭列は検出されなかった。出土遺物 (Fig.33) 149は、土師器甕である。口縁部の小片。150は、須恵器坏身である。口縁部から体部にかけての小片で、かえり内面に段を有する。

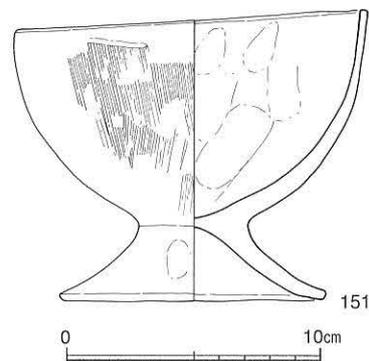


Fig.35 SK017出土遺物実測図 (1/3)

(3) 掘立柱建物

C7、8区で4棟の掘立柱建物を検出した。いずれも1間×1間でSB029の一部を除いてIV層上面で検出し、覆土は暗褐色粘質シルトおよび炭黄褐色砂質シルトである。SB027は河川1に切られる。また、SB026がSB028を切る。それぞれの柱穴は北東のものをP1とし反時計回りにP2,P3,P4とした。

SB026 (Fig.33)

東西が長い建物で、南北の方位がN-19° -Wである。SB028を切る。P1・P2の土層断面で幅15cmほどの柱痕跡を確認した。柱間隔はP1-P2が315cm、P2-P3間が215cm、P3-P4間が290cm、P4-P1間が205cmを測る。掘方は丸みをおびるが、方形を意識し一辺24から8cm、深さ35から45cmが残存する。覆土は柱部分が灰褐色粘質土、裏込が暗褐色粘質土と淡灰褐色シルトで、ブロック状に混ざったり、交互にして埋めている。

SB027 (Fig.33)

南北に長い建物で、南北の方位はN-11° -Wである。東側が河川1に切られ、残りが悪い。P1・P2・P3の土層断面で幅20cmほどの柱痕跡を確認した。また、柱を設置した部分はその部分のみに掘り込みがある。柱間隔はP1-P2が210cm、P2-P3間が315cm、P3-P4間が215cm、P4-P1間が315cmを測る。掘方は方形に近く一辺24から30cm、深さ15から25cmが残存する。覆土は柱部分が灰茶褐色粘質土(シルト)、裏込が暗褐色粘質土と淡灰褐色シルトで、ブロック状に混ざったり、交互にして埋めている。

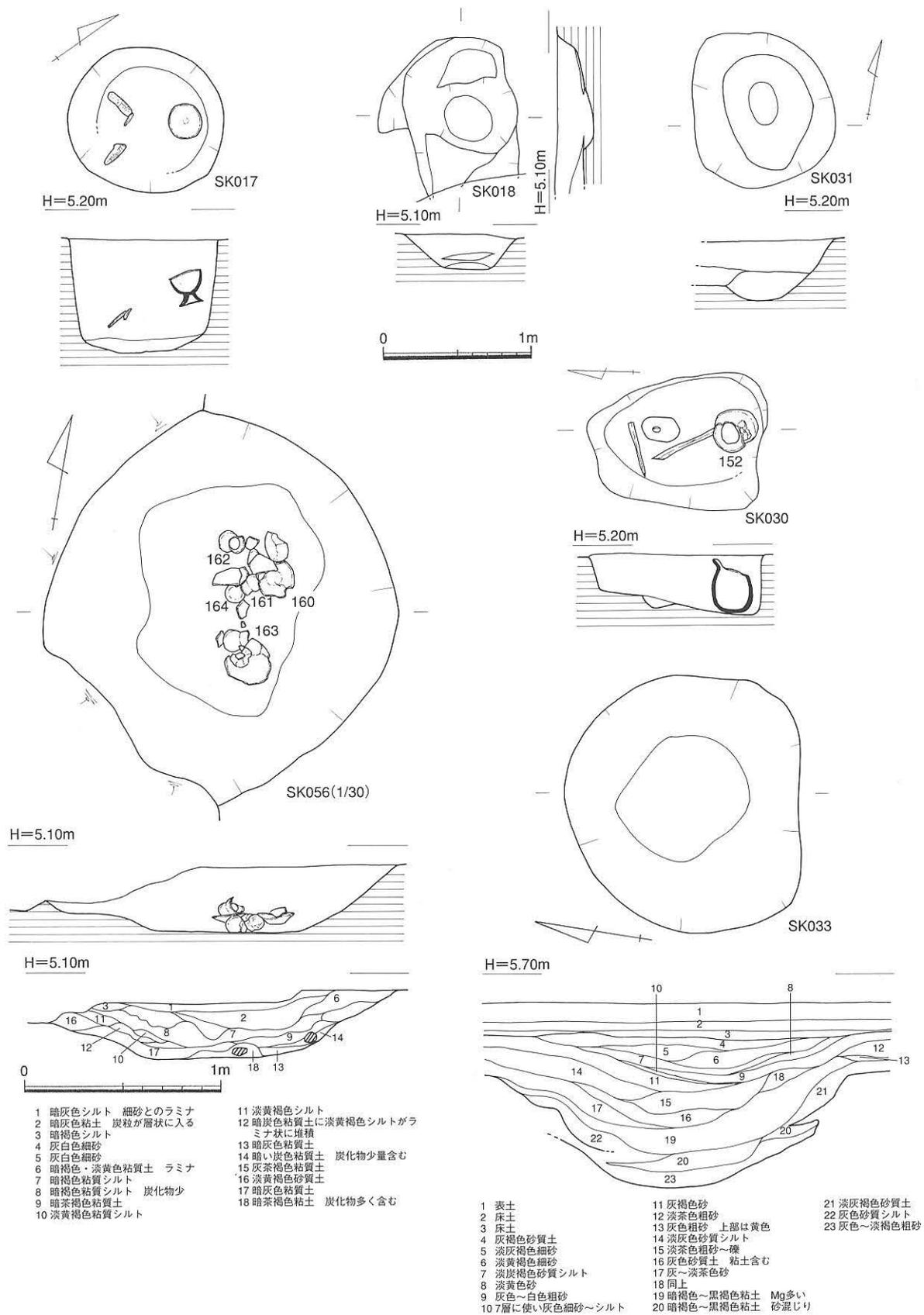


Fig.36 SK017・018・030・031・033・056実測図 (1/30・1/40)

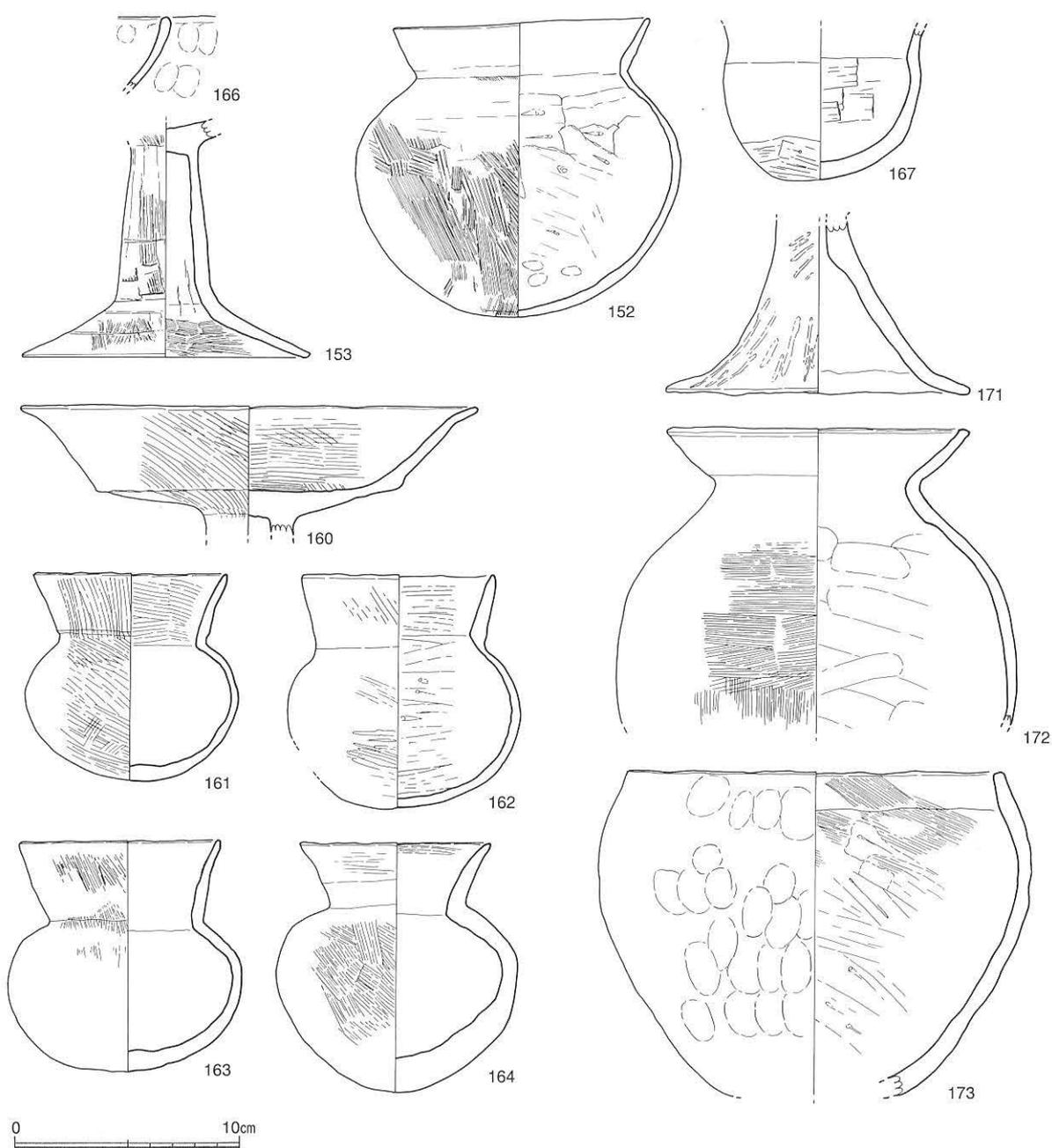


Fig.37 SK030・033・056・057・064・065出土遺物実測図 (1/3)

SB028 (Fig.33)

南北に長い建物で、南北の方位はN-19° -Wを測る。SB026に切られる。P1、P3の土層断面で幅12~15cmほどの柱痕跡を確認した。柱間隔はP1-P2が175cm、P2-P3間が230cm、P3-P4間が180cm、P4-P1間が245cmを測る。堀方は円形に近く径45から50cmほどで他の3棟と異なる。深さ16~24cm程度残存する。覆土は他と同様である。P4から土師器・黒曜石が出土したが、細片のため図示し得なかった。

SB029 (Fig.33)

東西に長い建物で、一棟のみ4mほど南に位置する。南北の方位がN-7° -Wである。P1、P3の土層断面で幅20cmほどの柱痕跡を確認した。柱間隔はP1-P2が325cm、P2-P3間が200cm、P3-P4間が315cm、P4-P1間が215cmを測る。堀方は方形に近く一辺50から60cm、深さ20から35cmが残存する。

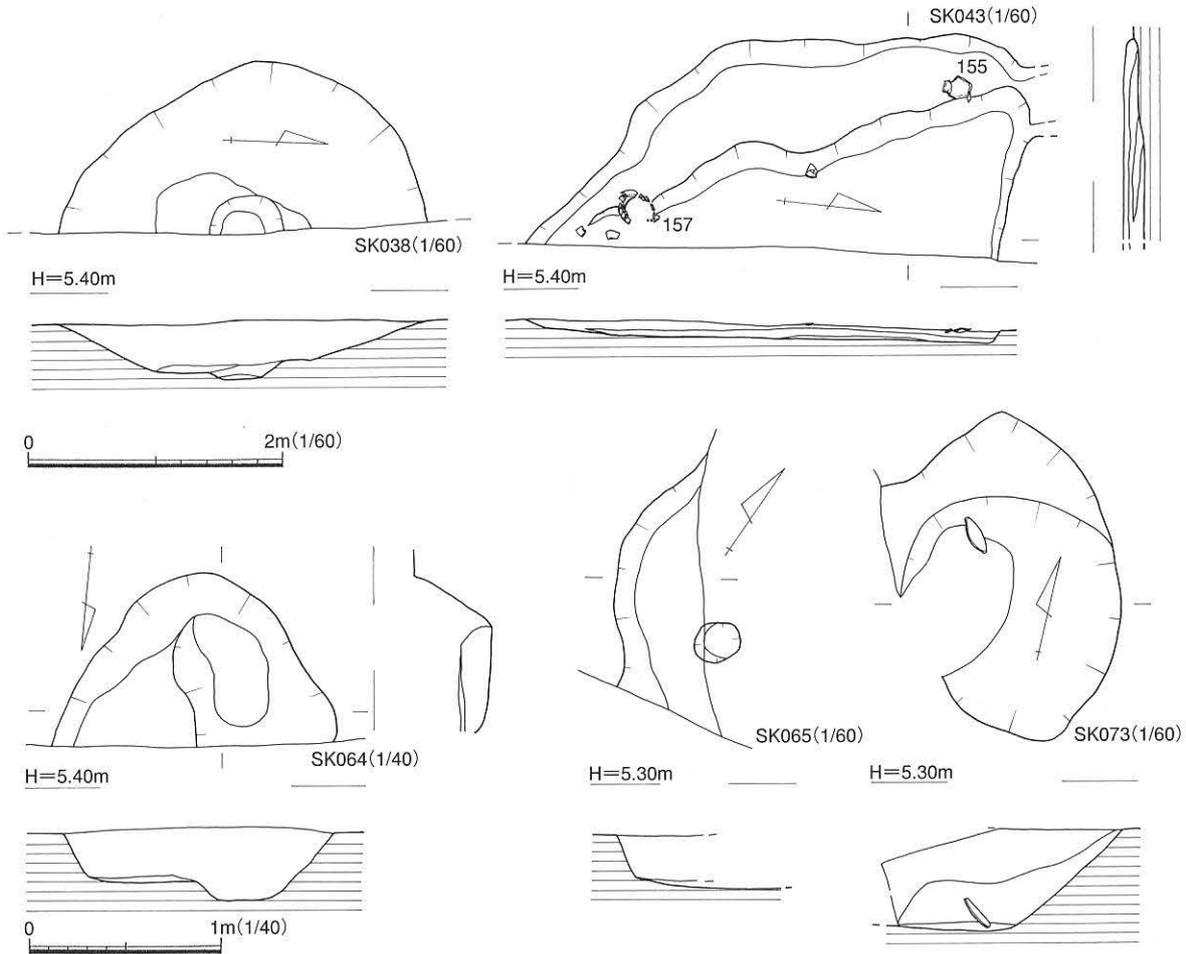


Fig.38 SK038・043・064・065・073実測図 (1/40)

(4) 土坑

SK011 (Fig.34)

B6で検出。径170cmほどの略円形の土坑で、SD005を切る。断面は丸みをおびた逆台形を呈し、深さ55cmを測る。覆土は緑色をおびた灰色粘質シルトである。近世以降のものと考えられる。

SK012 (Fig.34)

B5にて検出。径190cmほどの円形の土坑でSD006、7を切る。地表下40cmほどで、幅2cmほどの竹のタガ3条、縦板3枚が出土し、桶積みの井戸か。タガ巻きの径は115cmを測り、縦板は12cmが残存する。上層の土層はタガの内側と外で異なり、さらに上まで桶状の構造があったと考えられる。近世以降のものと考えられる。

SK052 (Fig.34)

B6で検出。長方形の土坑で200cm×90cm、深さ35cmを測る。遺物は須恵器・土師皿が出土したが、細片のため図示し得なかった。近世か。

SK017 (Fig.36)

B6で検出。南東に位置するピット状の土坑で、径50cmの円形を呈し、深さ40cmを測る。茶褐色シルト上面から掘り込み、覆土は暗褐色粘質シルトで炭粒が混じる。床よりやや浮いた状態で炭化木、土師器の脚付き杯が出土した。

出土遺物 (Fig.35) 151として図示する。ほぼ完形で出土した。丹塗りの痕跡が観察され、口径14.0cm、器高11.5cm、底径10.2cmを測る。

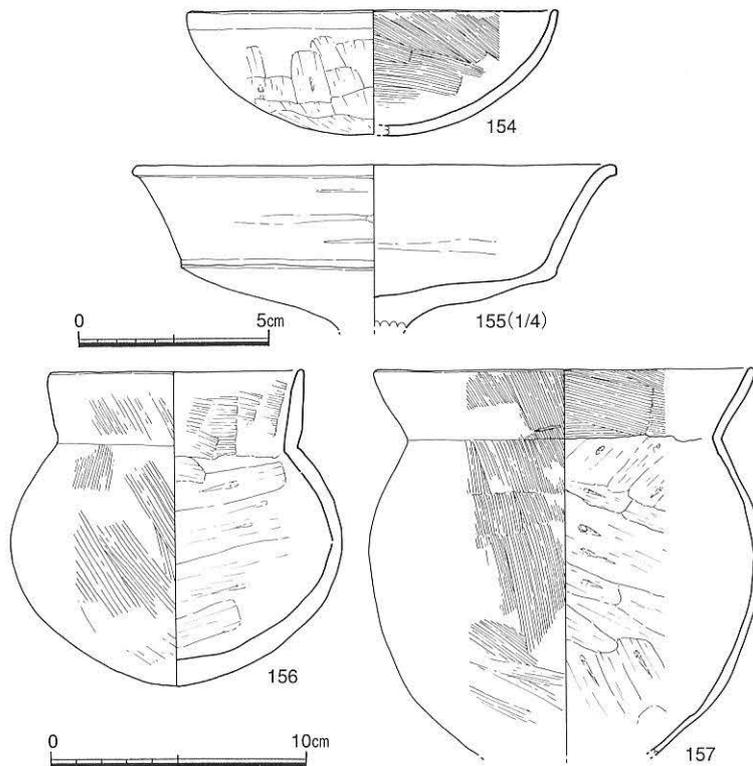


Fig.39 SK043出土遺物実測図 (1/3・1/4)

小型の土師器短頸壺が床に正置した状態で出土した。

出土遺物 (Fig.37) 短頸壺を152に図示する。3/4个体接合する破片で、復元口径11.6cm、器高13.4cmを測る。胴部外面に黒斑を有し、焼成は良好である。

SK031 (Fig.36)

B6でSB026に切られるピット状の遺構である。径55cmほどの円形になると考えられる。深さ20cmを測り、下部10cmの床、壁に薄く炭が溜まる。遺物は、青磁および土師器細片が出土した。

SK032 (Fig.8)

B6で検出。不整形の土坑で68×58cmを測る。土師器細片が出土した。

SK033 (Fig.36)

E8で河川3の底の灰褐色粗砂上面で検出した土坑で暗褐色粘質土を覆土とする。一部調査区を拡張して調査した。径160cmの略円形を確認したが、土層断面で示したように幅230cmを測り、中央部は河川による削平を受ける。断面すり鉢状を呈し、床は粗砂層と互層になり、河川堆積の一部の可能性もある。

出土遺物 (Fig.37) 153は、高坏の脚部である。底径12.9cm。その他、土師器甕・壺が出土。

SK038 (Fig.38)

E6の調査区東隅で検出した土坑で調査区外に拡がる。確認したのは半円形プランで、径3m弱の円形と考えられる。深さ45cmを測り、断面すり鉢状を呈す。覆土は暗灰褐色砂質土で均一である。

土師器が出土したが、細片のため図示し得なかった。

SK043 (Fig.38)

E7で東側の調査区にかかる土坑である。確認できた範囲では不整形プラン。370×160cm以上の規模で深さ10cmを測る。覆土は淡黄茶色粘質シルトである。土器がややまとまって出土した。157は甕で倒置した状態で出土した。また、同様の覆土のSD044がSK043から北に延びており、そ

SK018 (Fig.36)

D9で検出。調査区南端で河川1を切る。調査区外に拡がるため全形は不明だが、楕円形を呈すると考えられる。長軸120cm以上、幅74cm、深さ25cmを測る。覆土は均質な茶色粗砂である。遺物は、土師器甕・黒曜石が出土したが、細片のため図示し得なかった。

SK030 (Fig.36)

C7で検出。SB028の北に隣接する。不整形の土坑で60cm×45cm、深さ20cmを測る。暗褐色粘質土を覆土とし、下部に炭粒を含み、炭化した木片が出土した。また、

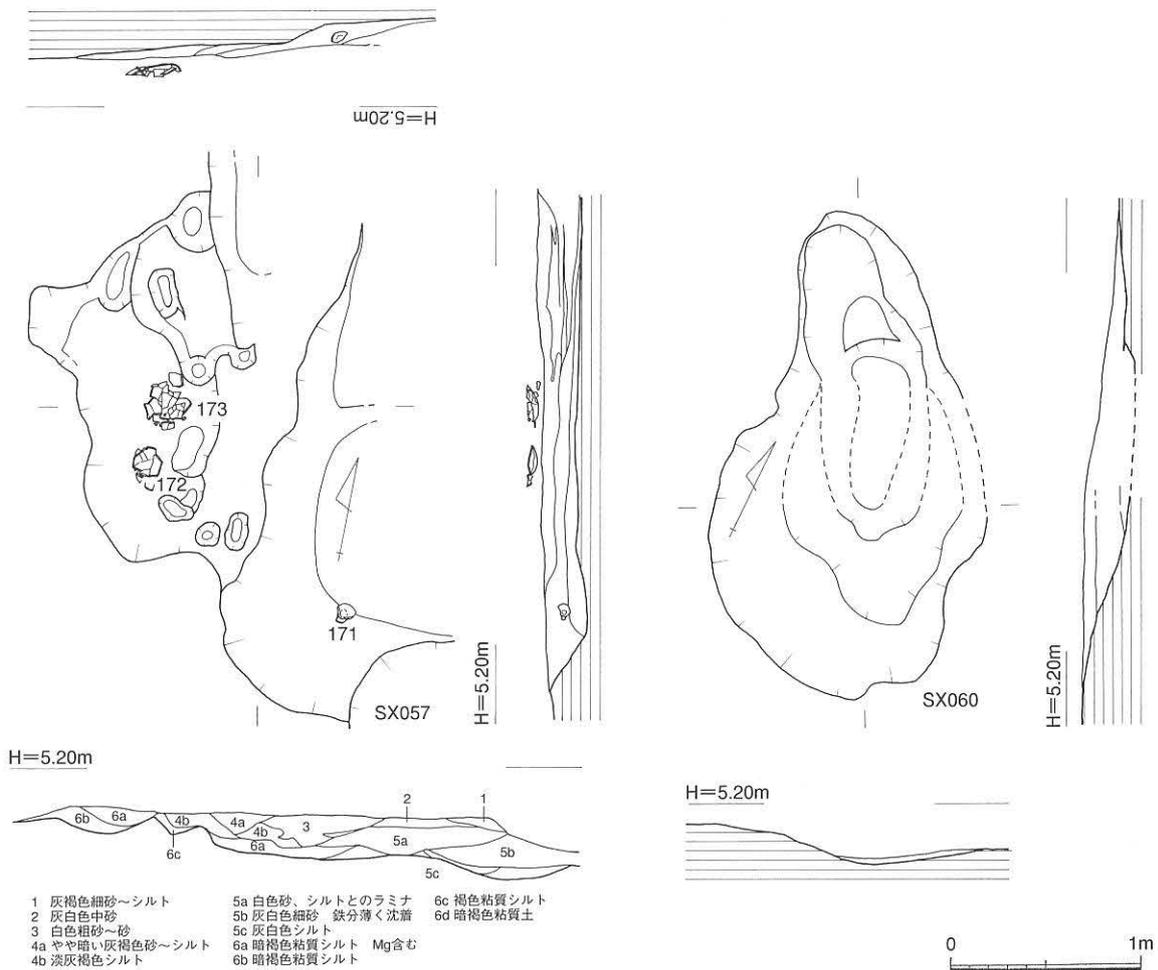


Fig.40 SX057・060実測図 (1/40)

の境は確認できなかった。

出土遺物 (Fig.39) 154は、坏である。1/2個体分の破片で、復元口径14.6cm、器高4.8cmを測る。155は、高坏である。口縁部の一部・脚部を欠く。口径25.4cmを測る。156は、壺である。ほぼ完形に復元。口径10.1cm、器高12.3cmを測る。157は、甕である。1/3個体分の破片。復元口径20cmを測る。いずれも焼成は良好である。その他、黒曜石が出土した。

SK056 (Fig.36)

D7で河川1に切られる土坑で径200cmの円形プランを呈す。断面はすり鉢状で33cmを測る。覆土は暗褐色粘質土、淡黄灰色砂質シルト・細砂が互層、ヲナ状に堆積する。また、覆土は全体に炭粒を含み、底に多く含み炭層に近い。床直上の炭の上に小型丸底壺を主体とした土器がまとまった状態で出土した。

出土遺物 (Fig.37) 160は、高坏である。坏部を8割残す破片。口径20.2cmを測る。161～164は、小形丸底壺である。161は完形で出土。口径8.4cm・器高9.3cm・胴部径9.5cm。162は2/3個体の破片。復元口径8.4cm・器高10.5cm・復元胴部径10.4cm。163は口縁部を2/3欠く個体。復元口径8.8cm・器高10.4cm・胴部径10.5cm。164は完形で出土。口径8.4cm・器高11.2cm・胴部径10.8cmを測る。その他土師器坏・甕、突帯文土器が出土したが、細片のため図示し得なかった。

SX060 (Fig.40)

D7で検出した。不整な溝状を呈し、川の底に暗褐色粘質土が溜まる。河川3の一部か。

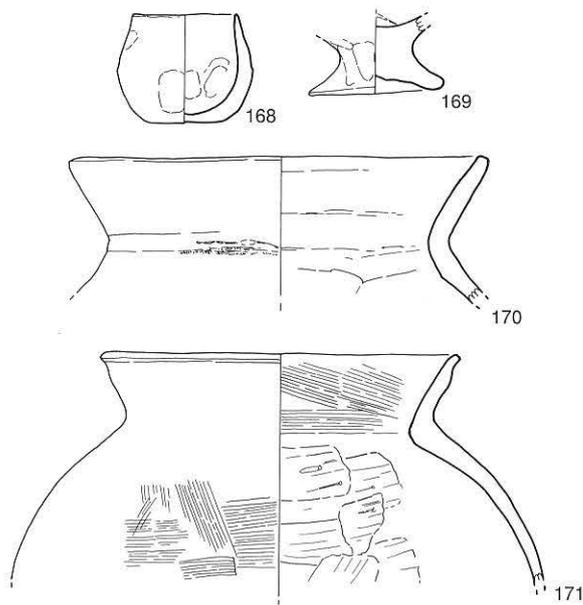


Fig.41 SX037・060出土遺物実測図 (1/3)

出土遺物 (Fig.41) 165は、土師器甕の小片。復元口径13.8cmを測る。

SK064 (Fig.38)

D8で河川1に切られる。不整半円形プランを確認した。径140cmほどが推定され、深さ40cmを測る。覆土は暗褐色粘質土である。

出土遺物 (Fig.37) 166は、手捏ね土器である。坏形の小片。

SK065 (Fig.38)

D8で河川1に切られる土坑で暗褐色粘質土を覆土とする。プランは弧を描くが全形は不明である。80cm×40cm以上の規模で深さ30cmを測る。

出土遺物 (Fig.37) 167は、鉢または小形丸底壺である。口縁部を欠き、胴部径8.8cmを測る。

SK068 (Fig.8)

D8で河川に切られる土坑でSK065、064に類似する。これらは河川の覆土中に同様の覆土があり、川の堆積の一部の可能性もある。SK033もこれに近い。SK068は長軸130cm、幅75cm以上、深さ45cmを測る。土師器・黒曜石が出土したが、細片のため図示し得なかった。

SK073 (Fig.38)

C5で検出。河川2の東岸で確認したすり鉢状の土坑で、河川2で切られる。平面プランは楕円形で長軸250cm、幅170cm以上、深さ80cmを測る。覆土は淡灰色砂質シルトで、河川中にも一部同様の堆積があり、土坑自体が河川の一部の可能性もある。底はこの部分の河川の底と同レベルである。ただし、この部分の河川の堆積は淡茶色粗砂である。土坑の底からは木器・土師器細片が出土した。

SX051 (Fig.8)

D5で古式土師器が一行にまとまって出土した。検出時は堀方が確認できなかったが、河川2の覆土にあたり、その西岸落ち際に沿って出土している。

出土遺物 (Fig.42) 158・159は、甕である。158は口縁部から肩部にかけての小片。復元口径14.6cmを測る。159は1/5個体ほどの破片。復元口径15.4cm、復元胴部径22.5cmを測る。

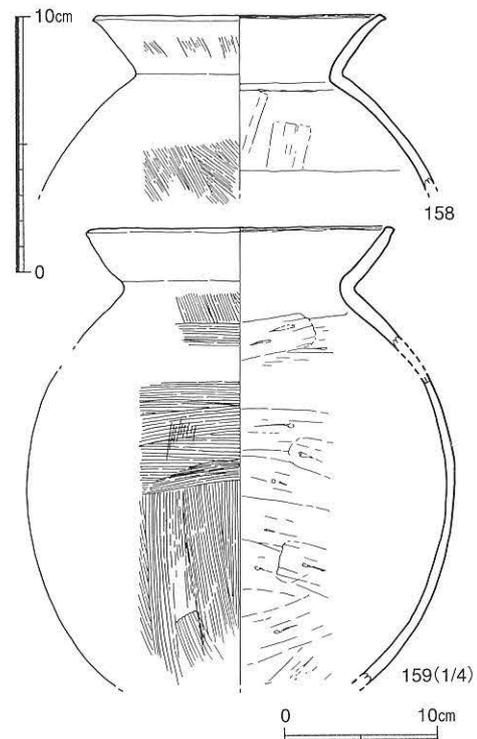


Fig.42 SX051出土遺物実測図 (1/3)

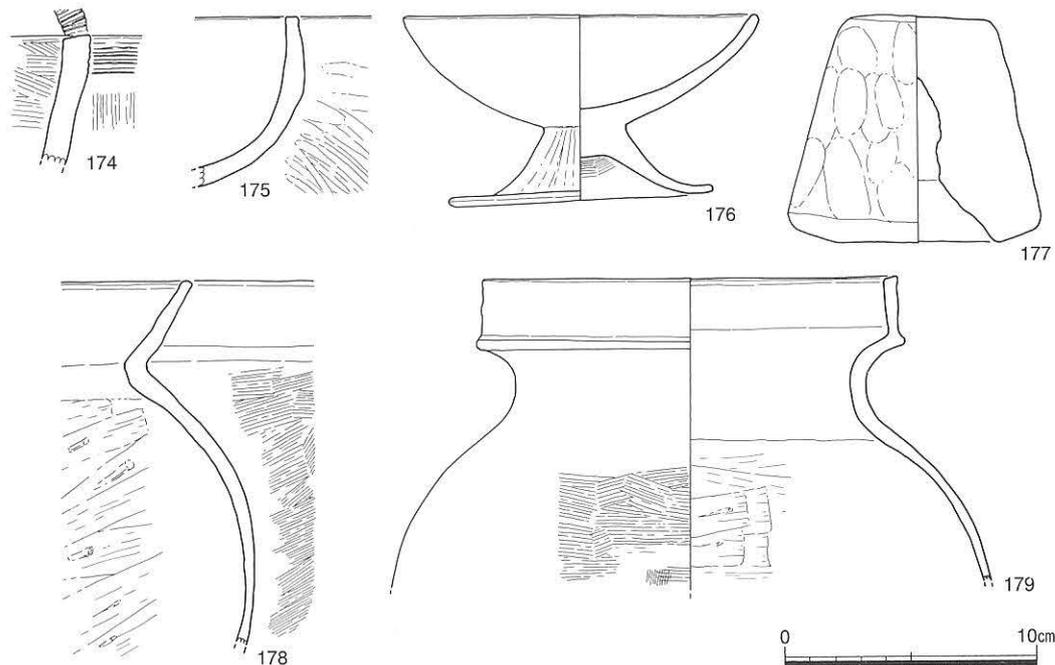


Fig.43 その他の遺物実測図 (1/3)

SX037 (Fig.8)

D7に位置し河川1に切られる。不整形の窪み状に暗褐色粘質土が溜まる。250×135cmの規模で、深さ25cmを測る。窪み自体は人為的なものかは不明である。

出土遺物 (Fig.41) 168・169は、手捏ね土器である。168は1/2個体の破片、169は底径5.4cm。170は、甕である。口縁を1/6残す破片。復元口径16.6cmを測る。

SX057 (Fig.40)

C6・7で河川1に切られる窪み状の遺構である。180×140の窪みに暗褐色粘質土が溜まる。土層のように河川の堆積は砂および淡灰色の砂質シルトで窪みの堆積とは異なるが、河川堆積の一部の可能性もある。土器が床より6, 7cm浮いた状態で出土した。

出土遺物 (Fig.37) 171は、高坏の脚部。2/3程度の破片で、復元底径13.4cm。172は、甕の小片。復元口径13.0cm。173は鉢。底部を欠き復元口径16.8cmを測る。

(5) その他の遺物 (Fig.43)

いずれも土師器で出土位置不明。174は口縁部の小片。175は坏の小片。176は脚付坏。脚部を一部欠く。177は暫定的に器台とするが、天地逆で埴塙の可能性も考えられる。器9.1cmを測る。178は甕の小片。179は壺。口縁を1/2残す。復元口径21.6cm。

(6) 小結

今回の調査で検出した古墳時代以降の遺構は、溝11条・河川7条・掘立柱建物4棟・土坑16基・性格不明の土坑状遺構 (SX) 4基である。溝は主に古代末～中世前半期の遺物を出土し、土層は流水の痕跡を示すため、水路としての機能が推定される。河川からは主に古墳時代前期後半～中期初頭頃の遺物が出土し、この時期に先述の河川 (おそらく室見川の支流) が形成されたと思われる。これ以前の遺物は弥生土器、突帯文土器がみられるが少量で混入とみられる。それ以外にはTK209併行期を主体とする須恵器が一定量出土し、一旦河川が調査区外に流路を変えた後、再び元の地点に流れを移したことを示すと思われる。土壙には、SK056など河川の際にまとまった遺物を出土するものがみられ、「水辺の祭祀」に関連する遺構の可能性が考えられる。

4. 弥生時代以前（下面）の遺構と遺物

下面はⅣ層を除去したおおよそⅤ層上面（淡黄灰色砂～砂質シルト）で遺構を検出した。Ⅰ区についてはⅣ層上面からの掘り込みを検出しきれなかった可能性がある。検出した遺構はⅠ区とⅢ区に分かれ、おおよそⅠ区が弥生前期、Ⅲ区が刻目突帯文期である。Ⅰ区、Ⅲ区の順で報告する。遺物は、剥片石器を図化できなかったため一部を写真で示し、組成について後述する。また礫石器で編集の都合で巻末に図示したものがある。

1) Ⅰ区

Ⅰ区では溝、土坑、ピットを検出した。土坑、ピットは南東側のC8周辺に集まる。ピットからの遺物はほとんどないが、覆土である茶褐色シルトは、前期の遺物が出土する土坑と類似し、近い時期のものではないかと考えている。

(1) 溝

SD055 (Fig.44、45、47、49) A4・5・6 幅130cm、深さ20cmほどの溝状遺構で弧を描く。土層b部分で西側に浅く拡がる。また、そのすぐ北で西に分岐し、幅1m、深さ12cmを測る。覆土は暗茶褐色粘質土、灰茶褐色粘質シルトで、溝として常に流れがあったような堆積ではない。覆土から弥



Fig.44 Ⅰ区下面全体図 (1/400)

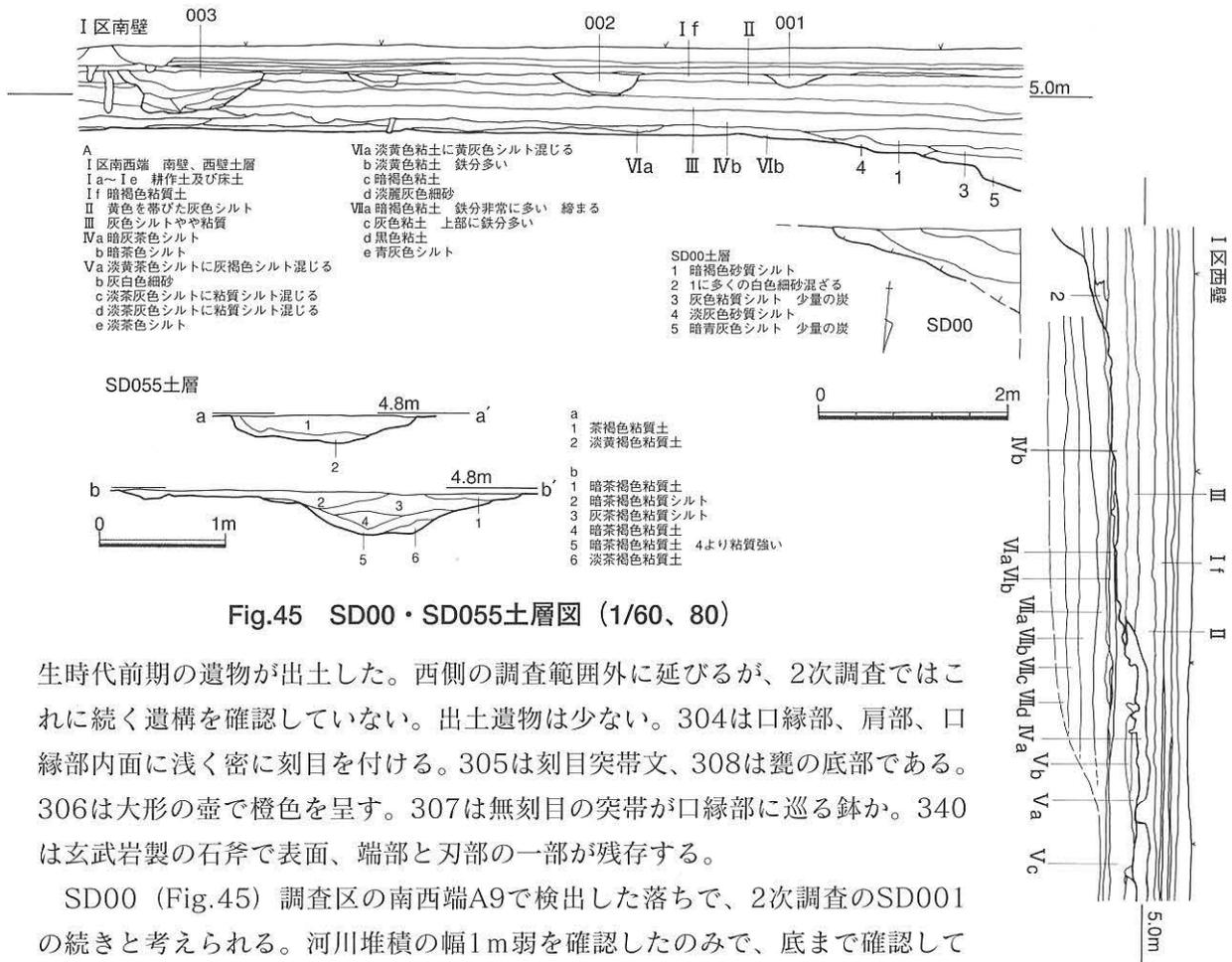


Fig.45 SD00・SD055土層図 (1/60、80)

生時代前期の遺物が出土した。西側の調査範囲外に延びるが、2次調査ではこれに続く遺構を確認していない。出土遺物は少ない。304は口縁部、肩部、口縁部内面に浅く密に刻目を付ける。305は刻目突帯文、308は甕の底部である。306は大形の壺で橙色を呈す。307は無刻目の突帯が口縁部に巡る鉢か。340は玄武岩製の石斧で表面、端部と刃部の一部が残存する。

SD00 (Fig.45) 調査区の南西端A9で検出した落ちで、2次調査のSD001の続きと考えられる。河川堆積の幅1m弱を確認したのみで、底まで確認していない。上端は調査区をかすめるように南東に走る。2次調査部分では東に向かっていたので、やや南に弧を描いているのであろう。刻目突帯文期の河川だが、遺物は小片が数点出土したのみである。ここで確認した土層 (Fig.45) を元にFig.7を作成した。2次調査のものとはほぼ一致する。

(2) 土坑

土坑4基と溝状遺構1基を検出した。遺物はIV層中に浮いているものがあり、IV層上面からの掘り込みの可能性がある。I区の遺構出土の突帯文は、突帯が丸みを帯び、刻目は幅狭で前期併行のもののみである。以下にあげる以外にも土坑状のものはあるが、掘方がはっきりせずくぼみ状で遺物がほとんど入っていない。

SK050 (Fig.46、47) A7中央の茶褐色土 (IV層) で刻目突帯文土器303がまとまって出土した。堀方は確認できず、V層上面からは10cmほどの位置である。303は小振りの甕で1/4が復元できた。

SK053 (Fig.46、47) C6茶褐色シルト掘削時に土器のまとまりを確認し、その下に径90cmほどのピット状の掘り込みを確認した。上面で遺構プランを確認しきれなかったものと考えられる。土器は径約70cm、深さ10cmの範囲に拡がる。わずかながら骨片が出土した。獣骨と考えられる。散らばる土器は壺302で肩部に貝殻で羽状文を施す。骨はこの土器に入っていたと考えられる。

SK054 (Fig.46、47) C8中央に位置する。IV層茶褐色シルト層を下げる段階で刻目突帯文土器301が横たわった状態で出土し、その下に浅い不整楕円形の掘り込みを確認した。IV層からの掘り込みを確認できなかったものとする。遺構の規模は、確認できた範囲で160×60cm、深さ15cmを測る。301は1/2弱が接合した。外面が荒れ、下部は赤変する。

SK062 (Fig.47、49) C7南端でSB027に切られる。平面略方形を呈し80×68cm、深さ30cmを測る。底近くから309から312、339が出土した。309は浅く密な刻目の甕、311、312は甕の底

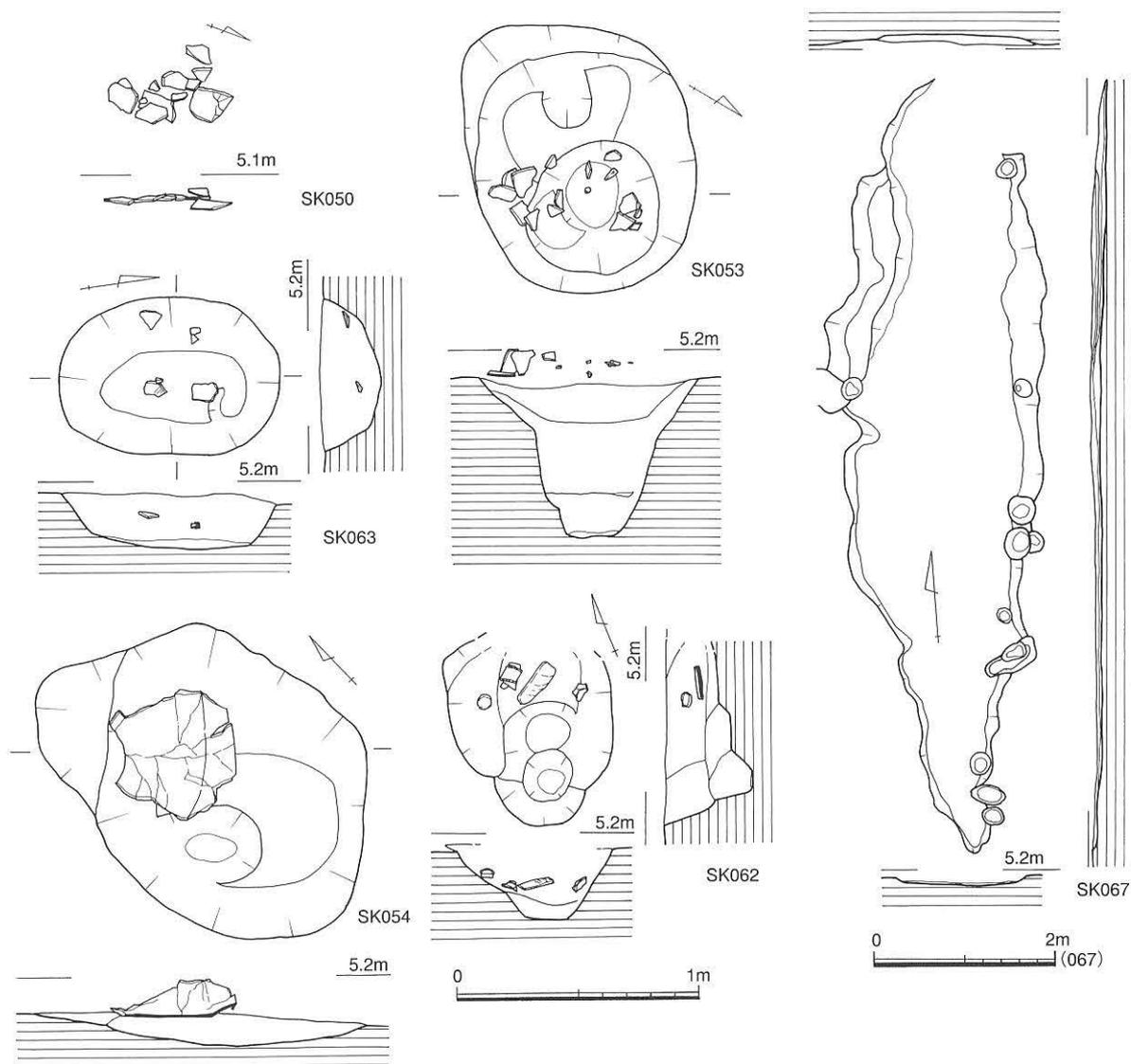


Fig.46 SK050・053・054・062・063・067実測図 (1/40、80)

部、310は鉢で外面は荒れる。339は玄武岩製の打製石斧で628gを量る。

SK063 (Fig.46) C8で検出した平面楕円形の土坑で93×66cm、深さ22cmを測る。出土した遺物は壺の胴部、突帯文の胴部、底部片である。

SK067 (Fig.46、47) D7.8 溝状の浅い窪みにマンガン分を多く含む暗茶褐色粘質シルトが溜まる。その範囲は長さ8.5m、最大幅2.2m、深さ10から5cmである。人為的な掘削によるものではないと考えられる。少量の遺物が出土した。313から316は突帯文の甕で、313は内外面に橙色の赤色顔料を施す。315、316は薄く高い突帯に大振りの刻目を施し、同一個体と考えられる。317、318は直口する鉢、319、320は屈曲する鉢と浅鉢で器面が荒れる。321、323は甕、322は壺の丸平底である。

ピット (Fig.44、48) 多くのピットを検出した。C8に径15cm大のものが集中する。広い範囲に分布するが、北ほど散漫で堀方がはっきりしない。遺物はほとんど出土しない。全て人為的な遺構であるか疑問が持たれる。326は大形の壺で赤色顔料を施す。

その他の遺物 (Fig.48) 古墳時代以降の河川出土の遺物をいくつか取り上げる。327は分厚い器壁

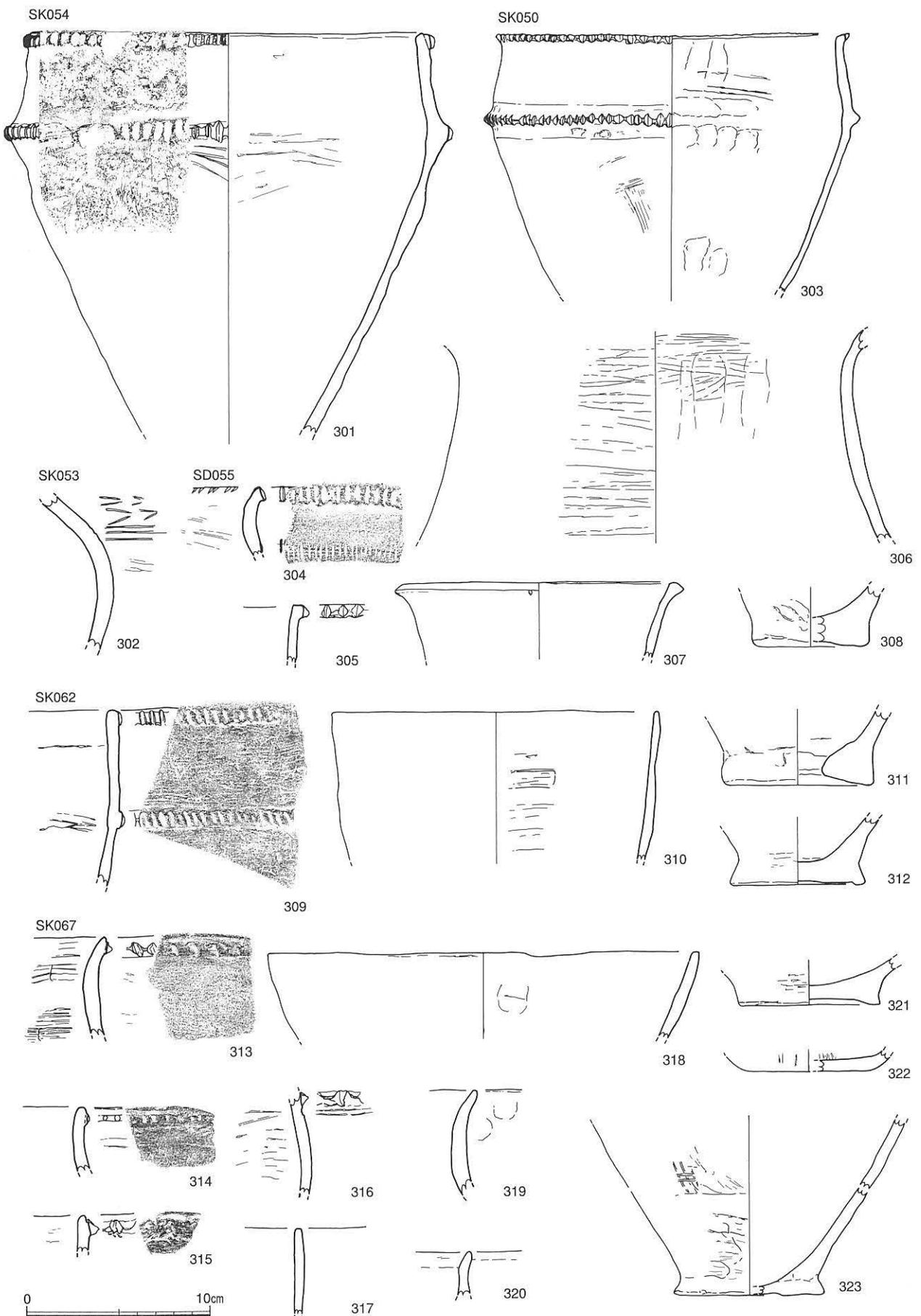


Fig.47 SK050・053・054・055・062・063・067出土土器実測図 (1/3)

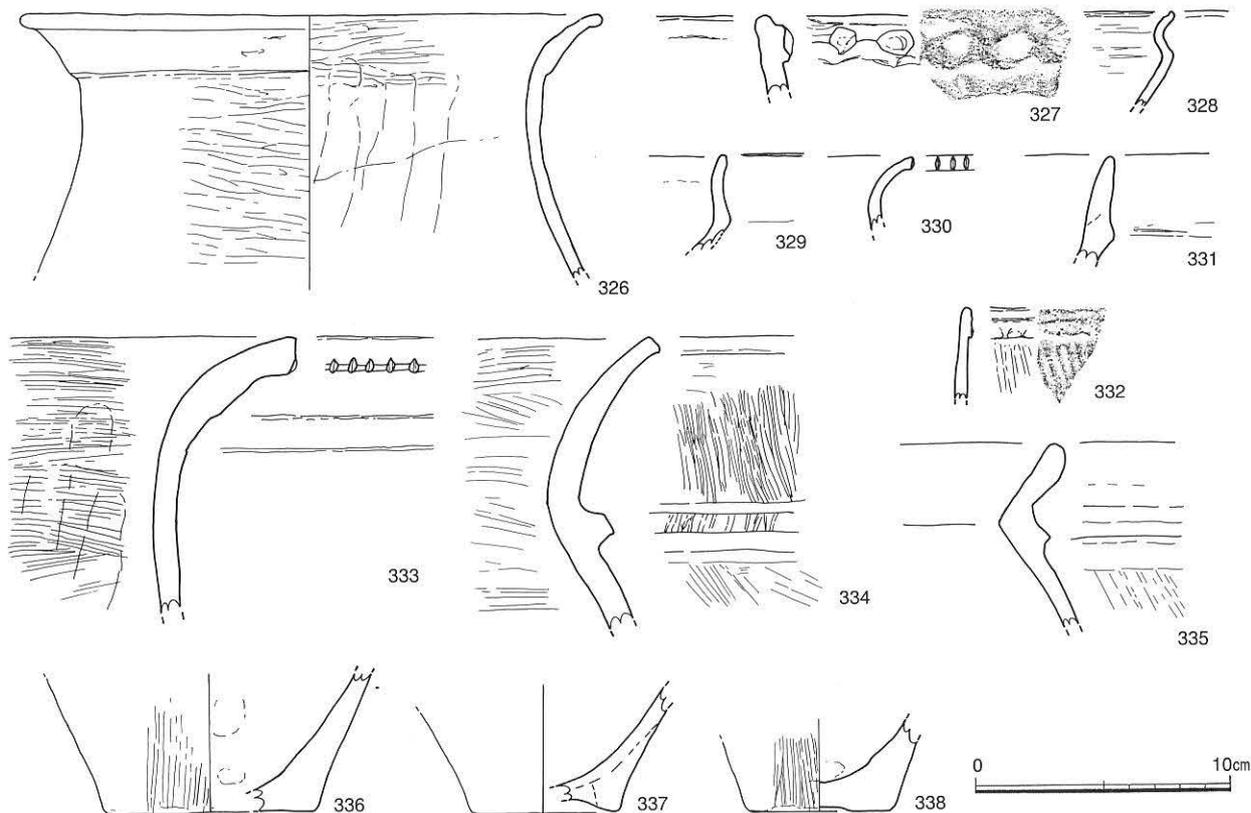


Fig.48 ピット、河川出土土器実測図 (1/3)

と突帯に大きな刻みを刺突する。328、329は器壁が荒れた浅鉢で328は口縁部内面に沈線を施す古手のもの。330は外反口縁の甕、331は特異な形態で疑似口縁か。333は外面肥厚した前期の壺で内面の刷毛目が明瞭。334は弥生時代後期末の甕、335は中期末の甕、336から338は中期の甕の底部である。中期から後期の遺構は検出していない。

2) III区

調査中の試掘で遺構の広がりを確認し、急遽拡張した調査区である。そのため十分な調査期間を得られなかった。EFG-1・2・3・4にくぼみ状、溝状の遺構を確認し、刻目突帯文単純期の遺物がまとまって出土した。その周りを河川状の落ちSD125が弧を描いて巡る。(Fig.50)

遺構面はFig.51の土層a10層上面の一面のみで行った。IV層の広がりはない。3層上面でも南北方向の溝状の遺構が見えたが期間の都合で調査していない。遺構面とした層はFig.7のVIII層上にあたる。河川堆積で、全体に砂質シルトが広がる。また、VII層の暗褐色粘土の広がりを確認したのはB1、HI-1・2付近のみである。以下、溝状、くぼみ状、SD125の順で報告する。遺物で土器は遺構毎に掲載したが、石器は編集の都合上最後にまと

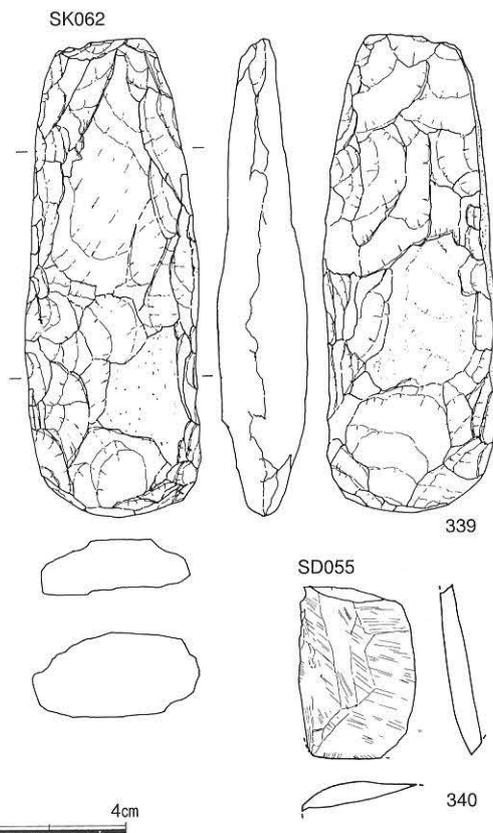


Fig.49 SD055・SK062出土石器実測図 (1/3)

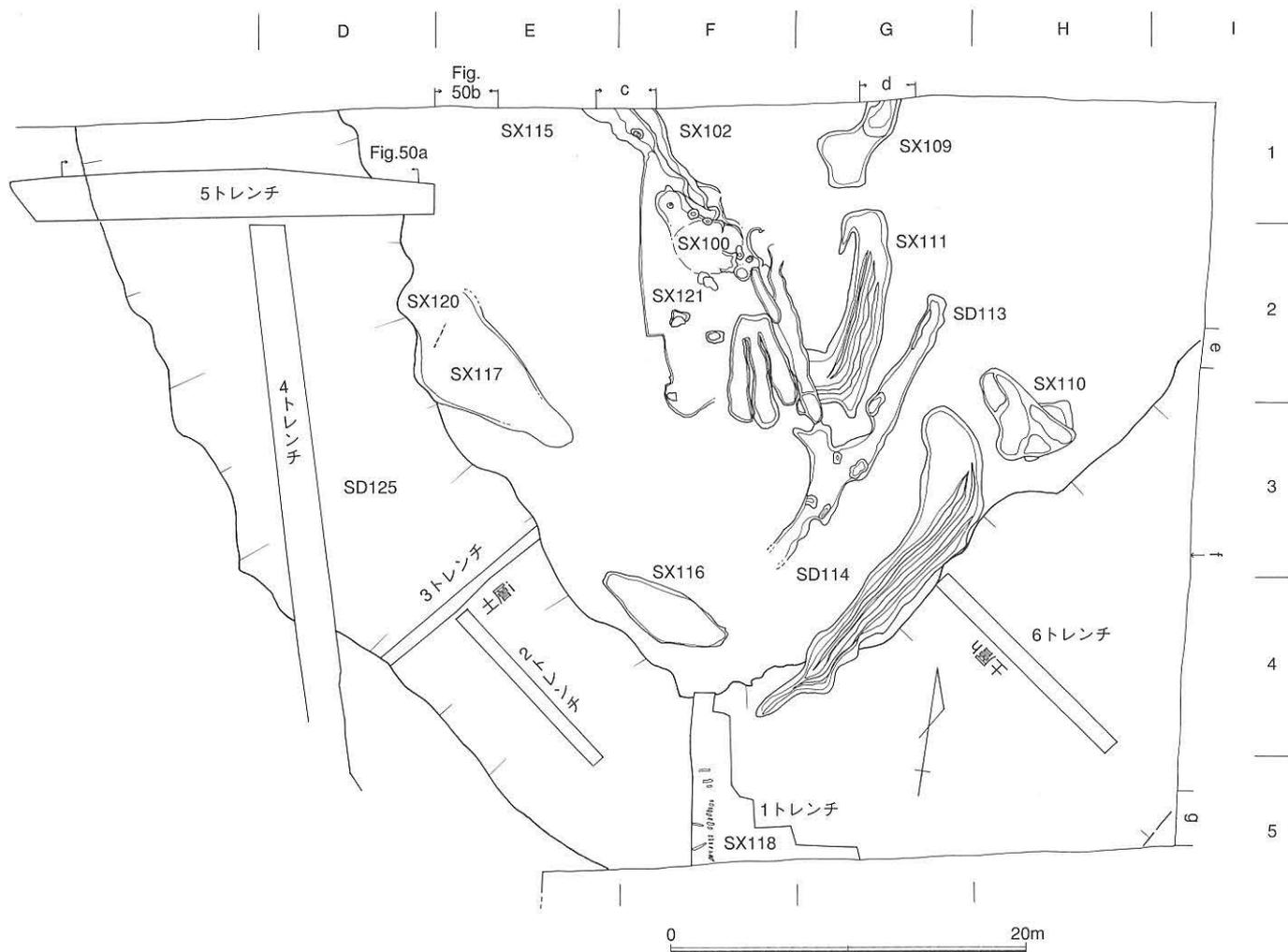


Fig.50 Ⅲ区全体図 (1/200)

めた。

(1) 溝状遺構

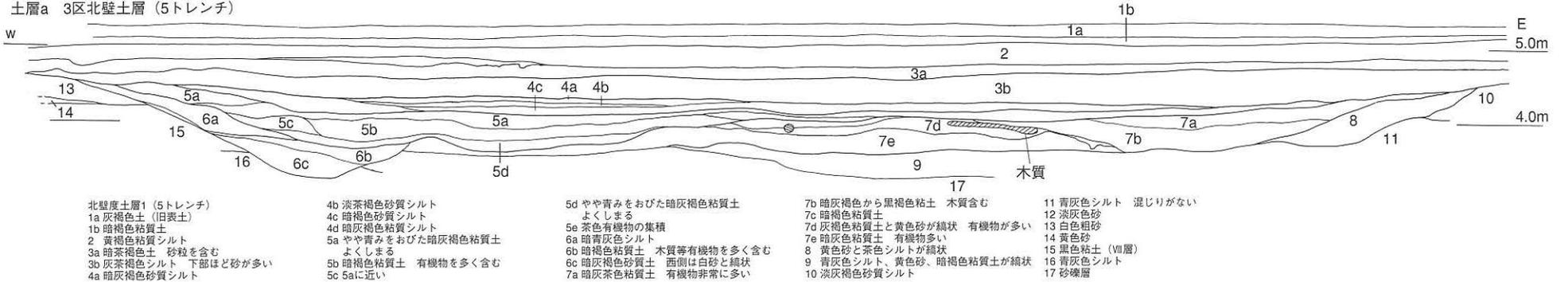
茶色粘質土を覆土とするSD103、105～108と白色細砂を覆土とするSD111、113、114の2種の遺構がある。

SD111 (Fig.50、52) 幅220cm、深さ7cmの溝でその中は幅20cmほどの細い併行する溝に分かれる。底は鉄分が沈着する。若干弧を描く延長12mを検出した。白色砂を覆土とし下部は粗砂になる。遺物は細片ばかりで時期が決めがたい。1点古式土師器の胴部かと思われる小片がある。SD103を切る。341は土製円盤で甕の転用品である。345は甕で刻目は浅い。

SD113 (Fig.50、52) SD111の南に一部併行して走る溝で、幅180から100cm、深さ10cmほどを測る。わずかに弧を描く延長17mを確認した。底には鉄分が沈着し、10cm大の小さなくぼみが多数見られる。そのくぼみは所々で50cm大になる。覆土は白色細砂である。遺物は突帯文期の小片が多いが、342、347のように弥生中期の土器があり、それ以降の時期である。342は中期の壺、344は深鉢である。346は土製円盤で甕の転用品である。細かな刻目があり、甕の屈曲部である。

SD114 (Fig.50、52) SD112の南東にほぼ並行する弧状の溝で幅330cm、深さ25cmほどを測り、20mの延長を確認した。床には鉄分が沈着する。中は細い併行する幅40cmほどの溝4条に分かれる。遺物は小片ばかりである。348から352は突帯文の甕、353は外反が弱く短い外反口縁の甕で祖型甕か。355は壺、354、356から358は浅鉢の口縁で354の外面、355の内外面に赤色顔料が見られる。359は甕、360は壺または鉢の底部である。SD111から114はその形状から大きな時期差はないと考

土層a 3区北壁土層 (5トレンチ)



北壁土層1 (5トレンチ)
 1a 灰褐色土 (旧表土)
 1b 暗褐色粘質土
 2 黄褐色粘質シルト
 3a 暗茶褐色土 砂粒を含む
 3b 灰茶褐色シルト 下部ほど砂が多い
 4a 暗灰褐色砂質シルト

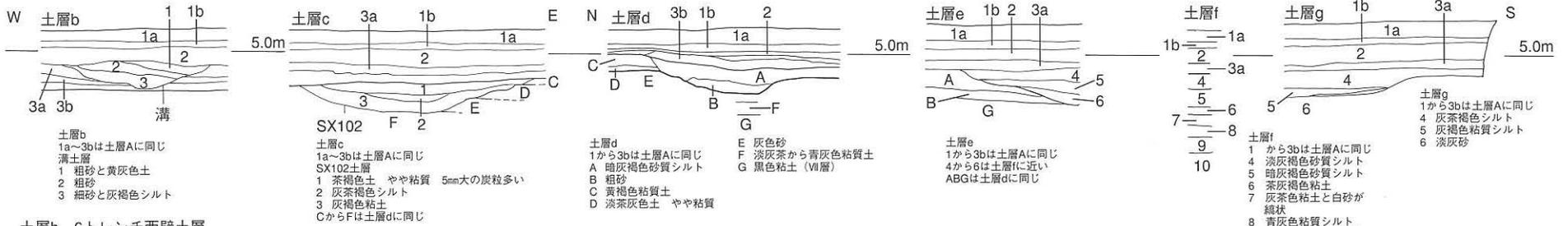
4b 淡茶褐色砂質シルト
 4c 暗褐色砂質シルト
 4d 暗灰褐色粘質シルト
 5a やや青みをおびた暗灰褐色粘質土 よくしまる
 5b 暗褐色粘質土 有機物を多く含む
 5c 5aに近い

5d やや青みをおびた暗灰褐色粘質土 よくしまる
 5e 茶色有機物の集積
 6a 暗茶褐色シルト
 6b 暗褐色粘質土 木質等有機物を多く含む
 6c 暗灰褐色砂質土 西側は白砂と縞状
 7a 暗灰茶色粘質土 有機物非常に多い

7b 暗灰褐色から黒褐色粘土 木質含む
 7c 暗褐色粘質土
 7d 暗褐色粘質土と黄色砂が縞状 有機物が多い
 7e 暗灰褐色粘質土 有機物多い
 8 黄色砂と茶色シルトが縞状
 9 青灰色シルト、黄色砂、暗褐色粘質土が縞状
 10 淡灰褐色砂質シルト

11 青灰色シルト 混じりがない
 12 淡灰色砂
 13 白色粗砂
 14 黄色砂
 15 黒色粘土 (VII層)
 16 青灰色シルト
 17 砂礫層

Fig.51 Ⅲ区北陸、SD125-3・5・6トレンチ土層実測図 (1/80)



土層b
 1a~3bは土層Aに同じ
 溝土層
 1 粗砂と黄灰色土
 2 粗砂
 3 細砂と灰褐色シルト

土層c
 1a~3bは土層Aに同じ
 SX102土層
 1 茶褐色土 やや粘質 5mm大の炭粒多い
 2 灰茶褐色シルト
 3 灰褐色粘質土
 CからFは土層dに同じ

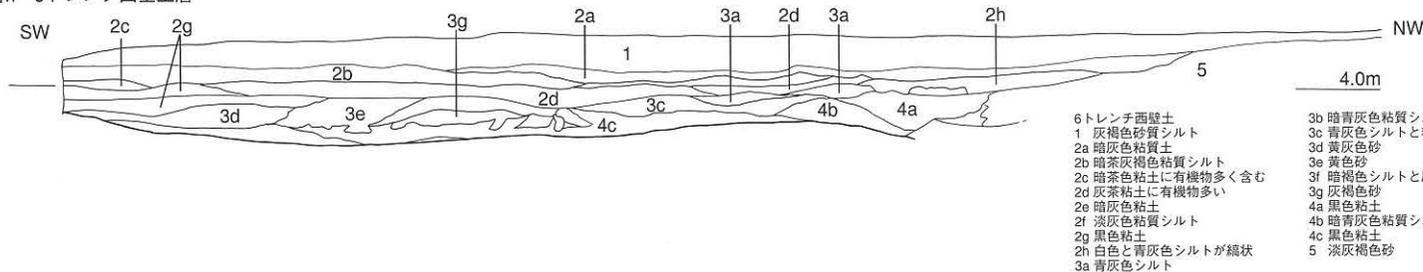
土層d
 1から3bは土層Aに同じ
 A 暗灰褐色砂質シルト
 B 粗砂
 C 黄褐色粘質土
 D 淡茶灰色土 やや粘質

土層e
 1から3bは土層Aに同じ
 4から6は土層fに近い
 ABGは土層dに同じ

土層f
 1から3bは土層Aに同じ
 4から6は土層fに近い
 7 灰褐色粘質土
 8 灰褐色粘質土と白砂が縞状
 9 青灰色粘質シルト
 10 砂礫

土層g
 1から3bは土層Aに同じ
 4 灰茶褐色シルト
 5 灰褐色粘質シルト
 6 淡灰色砂

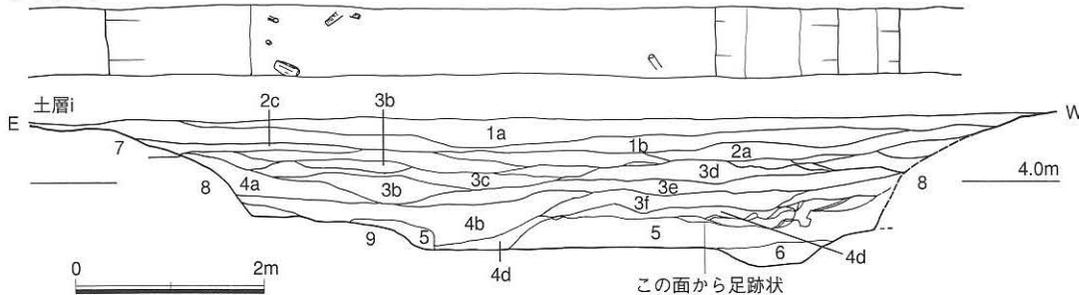
土層h 6トレンチ西壁土層



6トレンチ西壁土
 1 灰褐色砂質シルト
 2a 暗灰褐色粘質土
 2b 暗灰褐色粘質シルト
 2c 暗茶褐色粘土に有機物多く含む
 2d 灰茶粘土に有機物多い
 2e 暗灰褐色粘質土
 2f 淡灰褐色粘質シルト
 2g 黒色粘土
 2h 白色と青灰色シルトが縞状
 3a 青灰色シルト

3b 暗青灰色粘質シルト
 3c 青灰色シルトと粗砂が縞状
 3d 黄灰色砂
 3e 黄色砂
 3f 暗褐色シルトと灰色砂が縞状
 3g 灰褐色砂
 3h 黒色粘土
 4a 暗青灰色粘質シルト 粗砂混じる
 4c 黒色粘土
 5 淡灰褐色砂

3トレンチ



3トレンチ南壁土層
 1a 淡灰茶色シルト やや砂質
 1b 灰茶色粘質シルト 粘縮かくよくしまる
 2a 暗灰褐色粘質土 やや淡い色調
 2b 暗褐色粘質土よくしまる
 2c 灰褐色粘質シルト
 2d 暗灰褐色粘質シルト 粘質強い
 3a 暗灰褐色粘質土 有機物多い
 3b 白色砂、淡茶色砂、暗灰褐色粘土が縞状
 3c 暗灰褐色粘質シルト 砂を多く含む
 3bと同時異相?
 3d 青みをおびた暗灰褐色粘質土
 3e 暗褐色粘質シルト 有機物多い
 3f 暗褐色粘質シルト
 4a 青みをおびた暗灰褐色砂質シルト
 4b 白色粗砂と暗茶色シルトが縞状
 4d 淡青灰色砂と白色砂が縞状

5a 暗灰色~暗褐色砂質土 粘土に砂多く含む
 6 暗灰色~暗褐色粘質土 砂多く含む
 7 黄灰褐色砂質シルト
 8 青灰色シルト 下部SD125側は細砂と灰色シルトが縞状
 9 砂礫

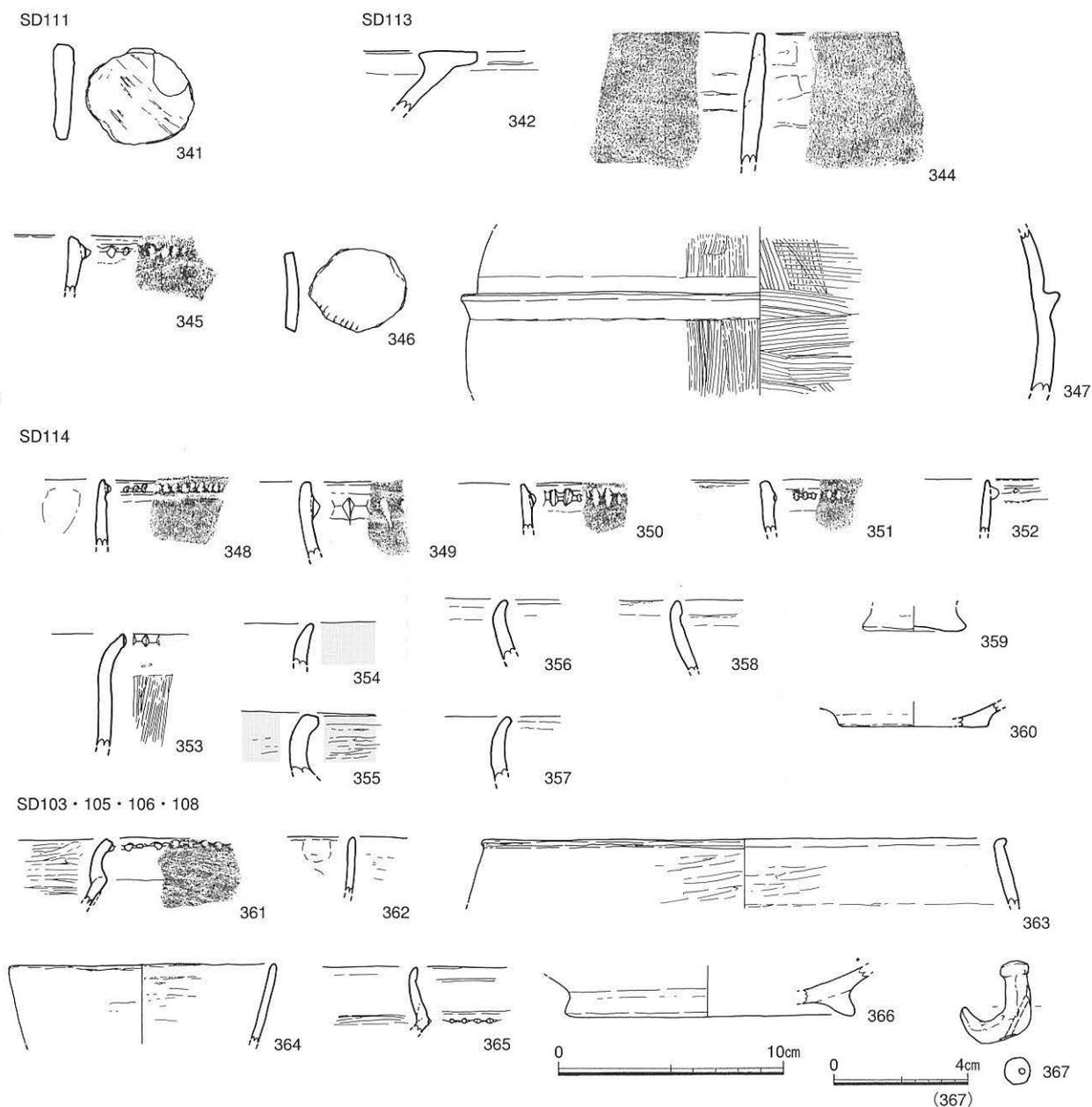


Fig.52 Ⅲ区溝状遺構出土遺物実測図 (1/3、2)

えられる。時期はSD111の土師器の小片が最も新しいが、さらに新しいのではないかと考えている。SD103、105、106、107、108 (Fig.53、52) 幅60から120cmを測り、深さ12cmを測る浅い溝状の遺構である。103がやや幅狭で北側にある以外は並ぶ。SX100にかぶる淡灰褐色シルト上で確認した。覆土は暗褐色の粘質シルトである。出土した遺物は少なく、小片で時期が判るものは361から365の様な突帯文土器、黒曜石の剥片、碎片である。367はSD103出土の土製の勾玉でタテに径1.8mmほどの孔がある。遺物は突帯文期に収まるが、以下にふれる突帯文期の遺構とは覆土が異なり、新しくなる可能性がある。

(2) くぼみ状遺構

くぼみ状の堆積に遺物を含む遺構を7箇所検出した。どれも浅く、はっきりとした掘り込みではない。覆土は淡茶色粘質シルトで突帯文土器、石器が出土した。その中でもSX100とその周辺のSX121には遺物が集中する。

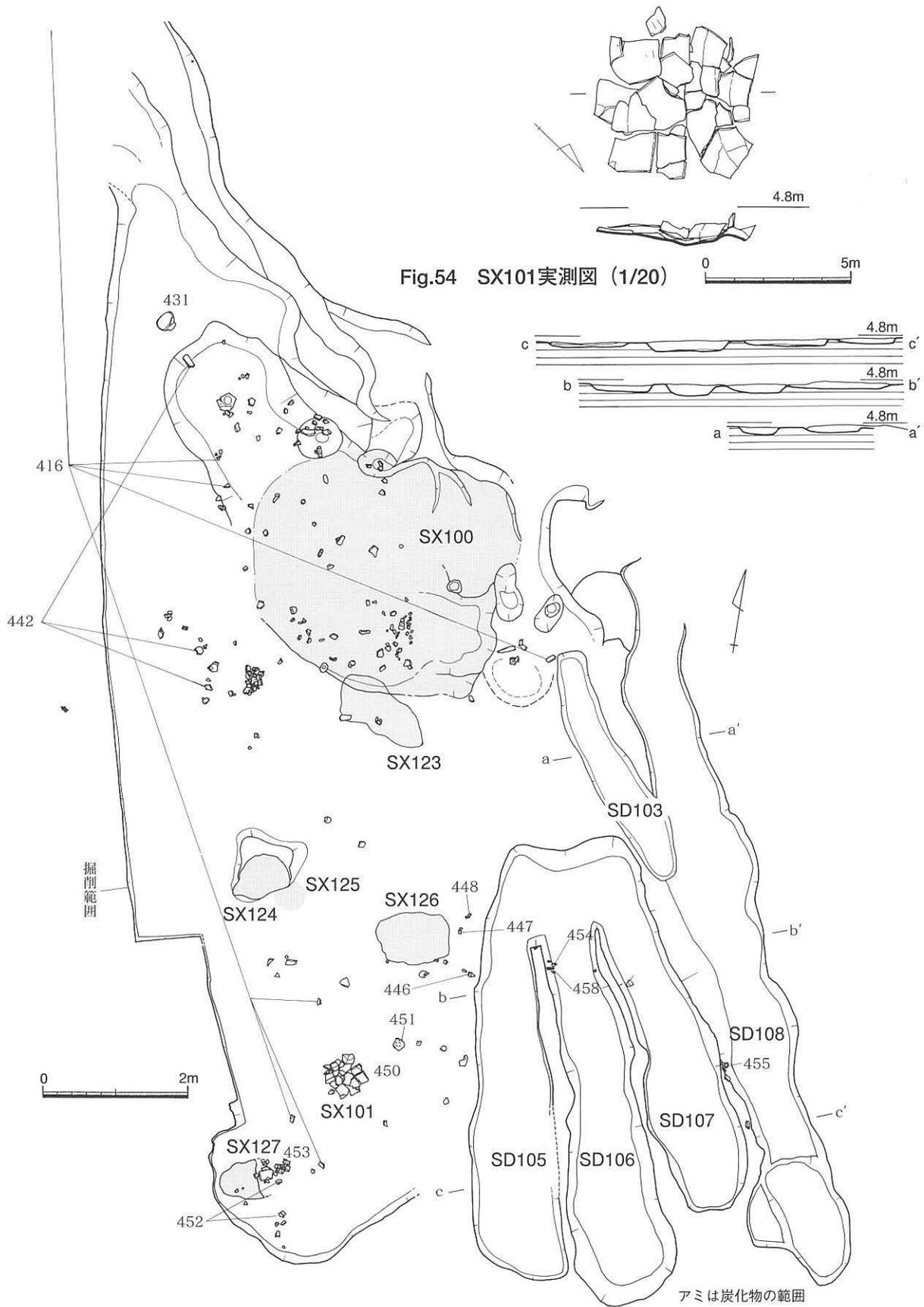


Fig.53 SX100・121遺構群実測図 (1/80)

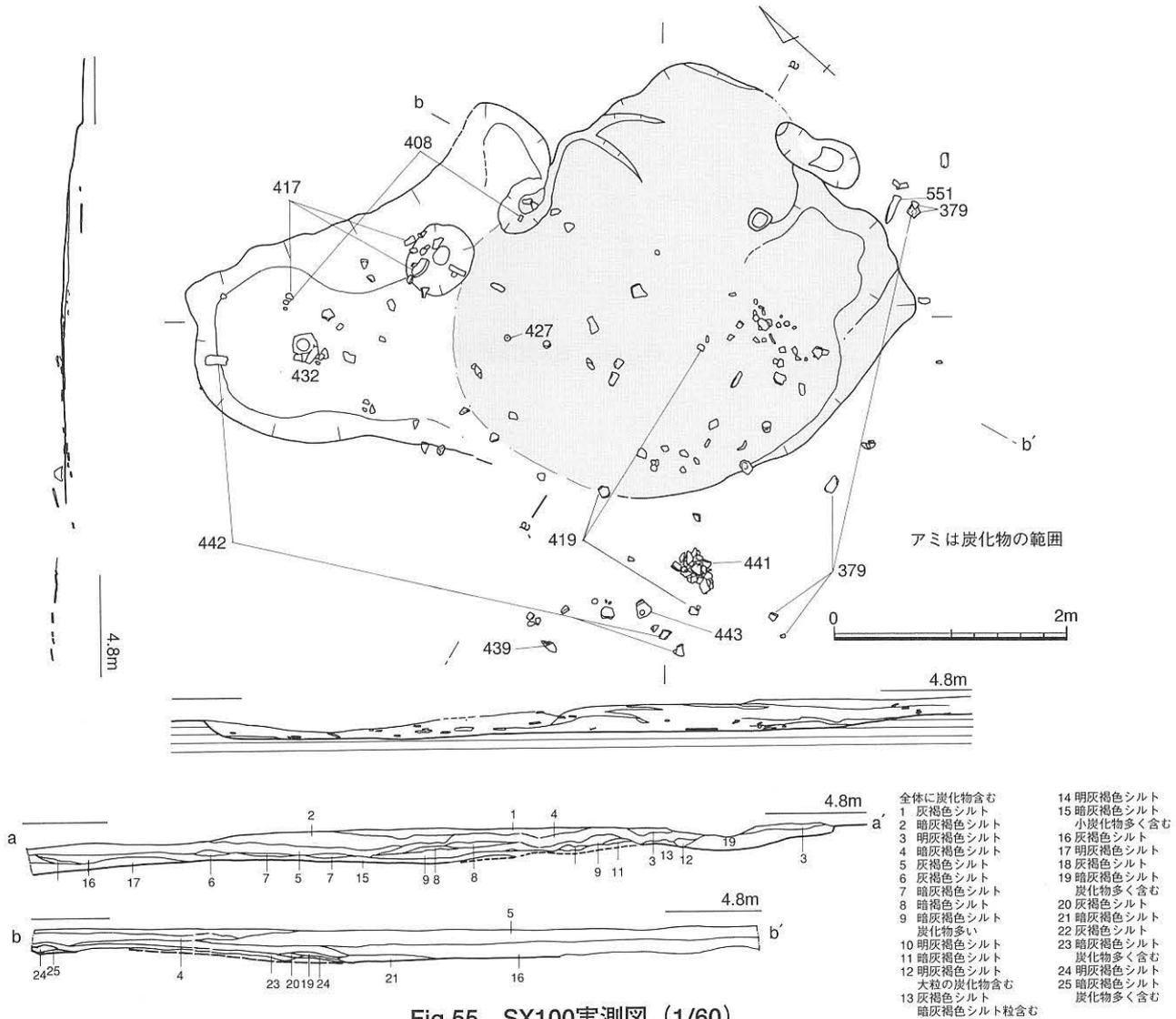


Fig.55 SX100実測図 (1/60)

SX100、121遺構群 (Fig.53、55) F2で検出したくぼみ状の遺構である。F2では淡黄灰色砂質シルトの面が南へ向かってわずかに下がり、そこに溜まった灰褐色粘質シルトから突帯文期の遺物が多く出土した。その中でも北東側のSX100は炭を多く含む遺物も多い。SX100の周辺、特に南西側全体をSX121として掘削した。その範囲はFig.53に示した通りで、炭化物は集中部以外は特に含まない。遺物包含層はさらに南西に延びそうだが、遺物の出土がやや散漫になり、調査期間の制約からこの範囲で掘削を終了した。その範囲には炭化物の集中箇所SX123から126を確認した。遺物は若干の集中部が見られ、その他では少なく、ほとんど出土しない部分もある。Fig.53、55には遺物の出土状況を全てではないが図示している。遺物は、出土位置の周辺で接合するものが多いが、中には10m以上離れて接合するものもある。以下、遺構の説明の後、まとめごとに遺物の説明を加える。

SX100 (Fig.55) 不整長楕円形のくぼみで東側は略円形の落ちのプランを検出したが西側は確認できなかった。落ちの比高差は最大で30cmを測る。床面には落ちのプランと重なる径約4mの範囲に厚さ1cmほどの炭層が広がる。覆土は灰褐色シルト、暗褐色粘質シルト、砂質シルトで炭粒を多く含む。覆土には土器、黒曜石片を中心とした遺物を多く含む。SX100の遺物は、出土状況を図化したのは一部のみである。住居跡の可能性を考えたが、床面にピット等を検出できなかった。また東側の堀方の横には石剣551が出土したことを加えておく。

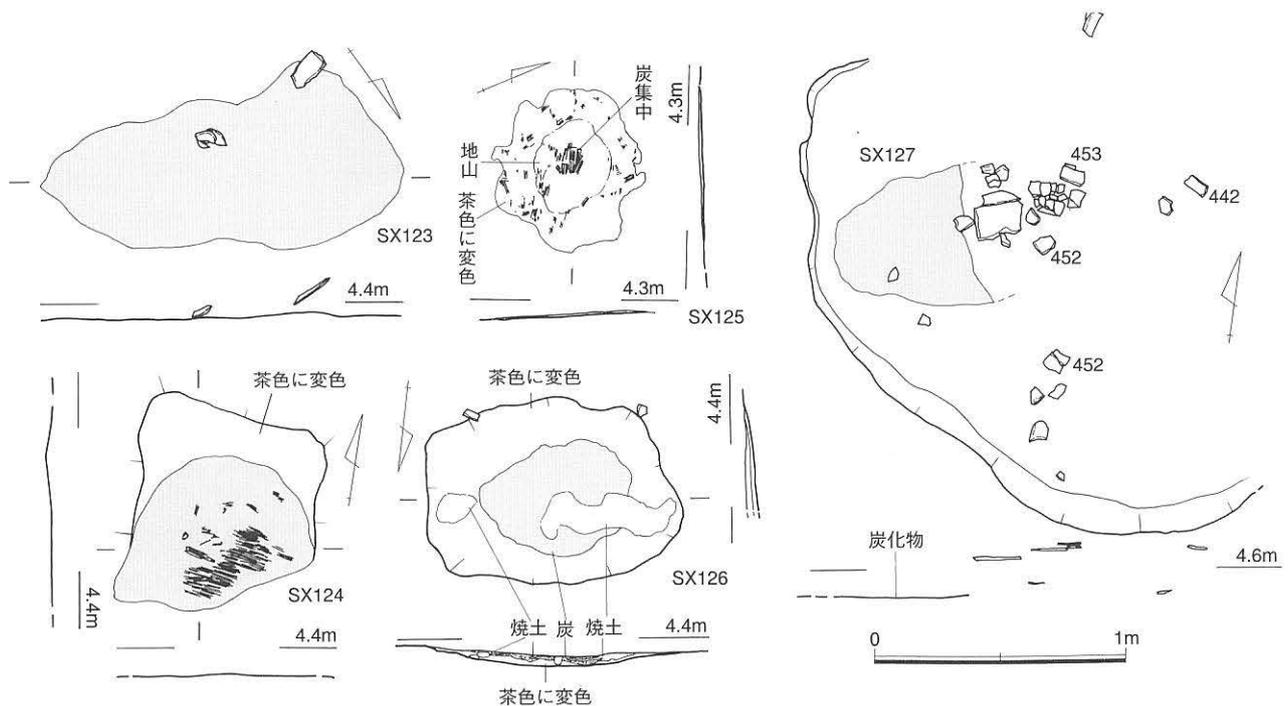


Fig.56 SX123・124・125・126・127実測図 (1/30)

SX101 (Fig.54, 62) SX100の南5.5mで壺450がつぶれた状況で出土した。掘り方は見られなかった。口縁部を北西に向ける。

SX123 (Fig.56) SX001の南に接して炭化物が平面不整楕円形、約140×60cmの範囲に薄く広がる。掘り込み、周囲の赤変等の焼けた状況、遺物の集中はない。

SX124 (Fig.56) SX001の南西2.5mで検出した炭化物の集中部で60×65cm程の不整円形の範囲に炭化物が薄く広がる。炭化物の下はやや広い範囲が熱の為に暗灰色に変色し硬化している。炭化物の中には幅1、2cm、長さ5から10cmほどの単位が残る。掘り込みはない。

SX125 (Fig.56) SX124の下に2から7cmの間層を挟んで径60cmほどの範囲に炭化物粒が広がる。炭化物は中央部の径10cmに集中する他は、幅1cm弱、長くとも5cmまでの小さなものである。炭化物の下は熱の為に青灰色粘質土が茶褐色に変色している。掘り込みはない。

SX126 (Fig.56) SX123の南2mに位置する炭化物の広がりである。平面楕円形、100×70cmほどの範囲に粒状の炭化物が集中し、厚い所で3cmを測る。この炭化物層に挟まれるように、焼土と考えられる赤茶色の粘質土が厚さ1cmから3cmで所々に広がる。これらの下は、熱のためか茶色に変色する。SX126は他と異なり若干のくぼみ状をなす。

SX127 (Fig.56) 掘削範囲の南西端で検出した炭化物で、東半は記録前に除去した。平面は楕円形と考えられ、55×55cmの範囲に1cm弱の薄い炭化物が広がる。掘り込み、変色等は見られない。周囲、上下に遺物がやや集まるが、レベル差があり炭化物と関係はなさそうに思える。

出土土器、土製品 (Fig.57~63) 371~440はSX100の炭化物周囲から出土した。371~377は直口の深鉢、鉢である。内外面を条痕、削り調整を残すものがほとんどである。371がやや大形の深鉢になる以外は372、274がボウル状、他は小形の鉢になろう。379から381、383から387は屈曲部を持たず、口縁部に1条の突帯を施す。条痕、削り調整を施し、379から380は幅太の突帯に大振りの刻目を施す。383から389は突帯、刻目ともに小振り。384、387、389が橙色から橙白色を呈す以外は暗褐色を呈す。382、388、390から405は胴部に屈曲を持つタイプである。382、401から405は屈曲部に刻目を持ち、391、392、400は持たない。他は不明である。395、394は口縁部

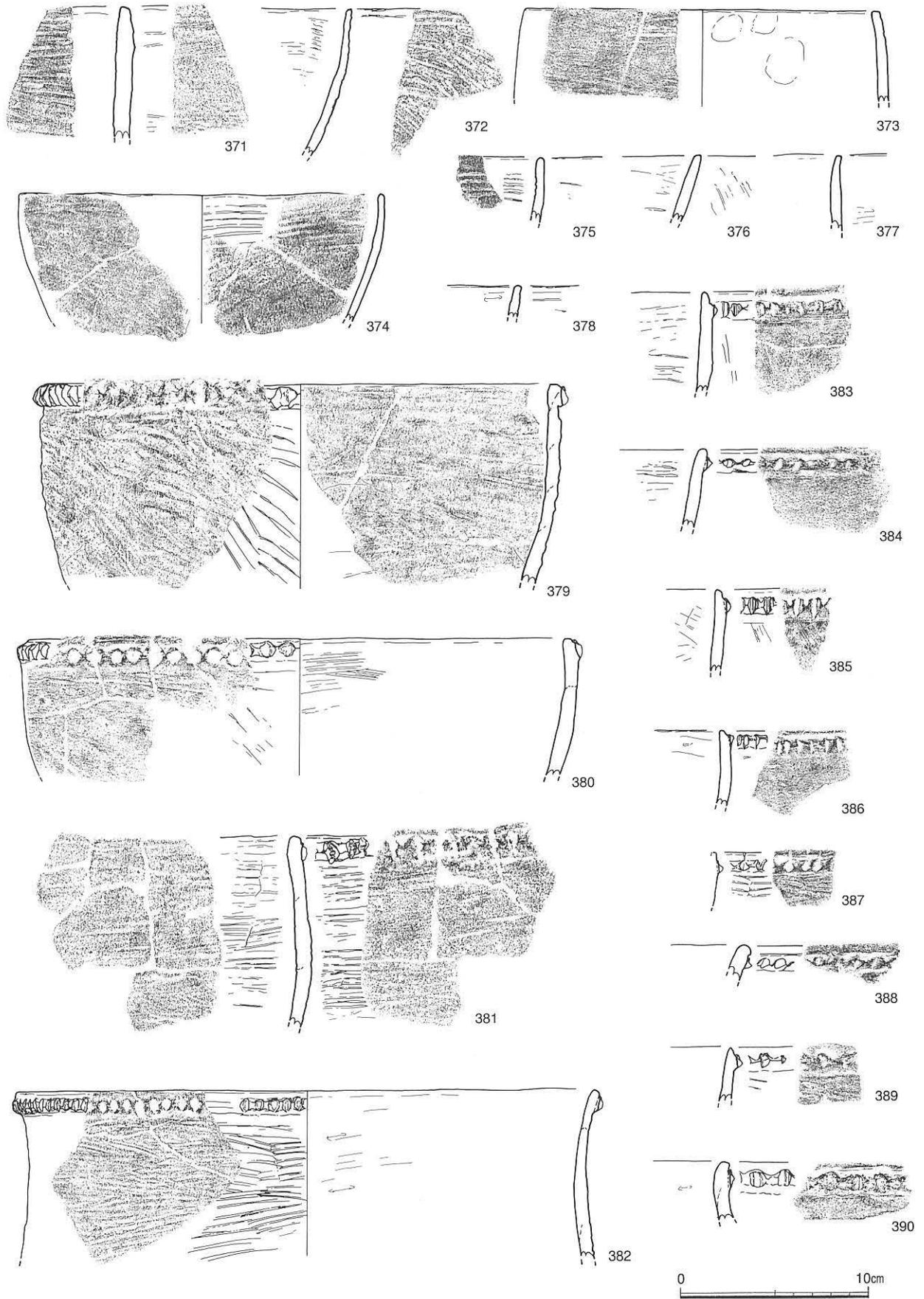


Fig.57 SX100出土土器实测图1 (1/3)

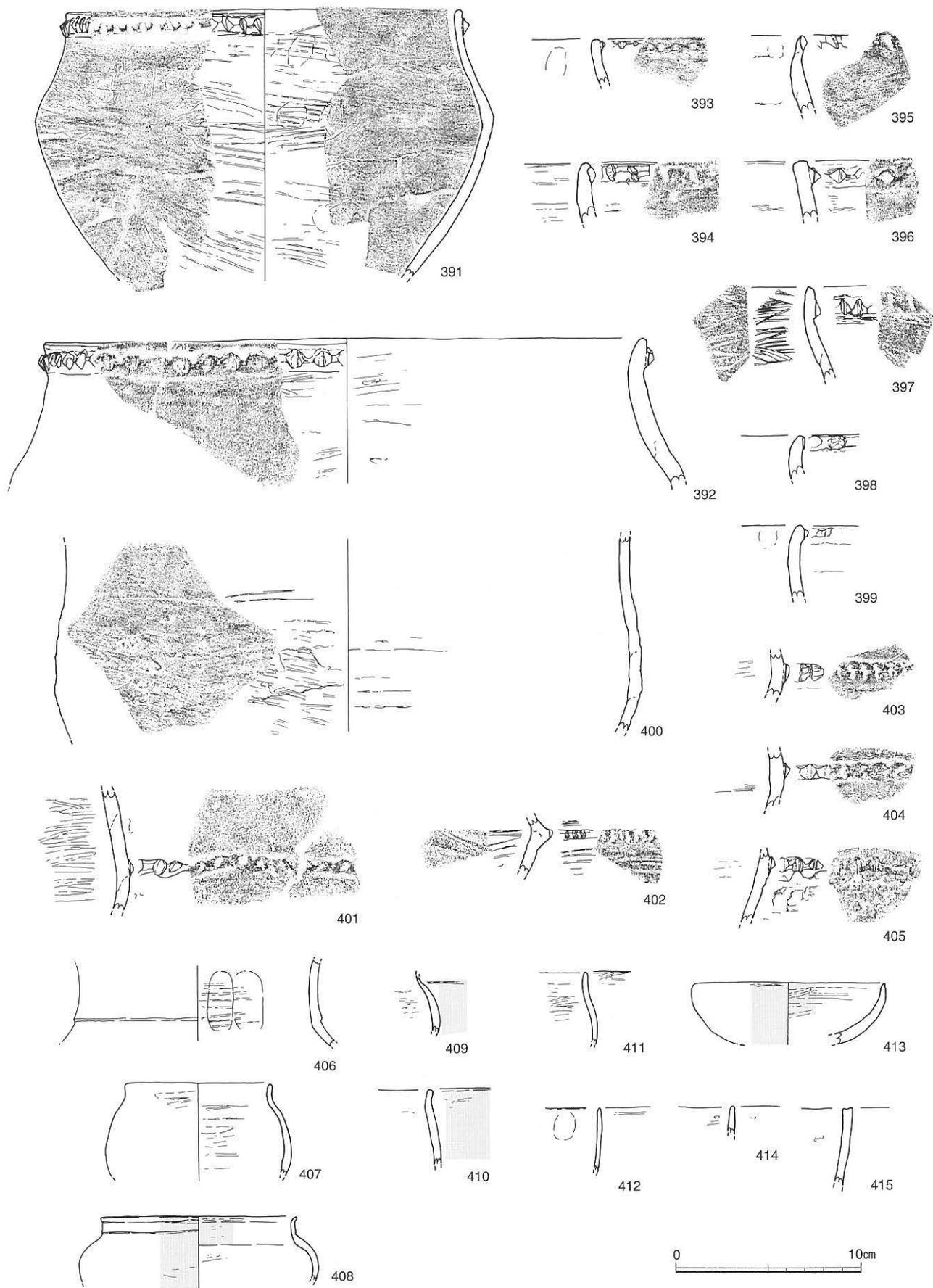


Fig.58 SX100出土土器実測図2 (1/3、2)

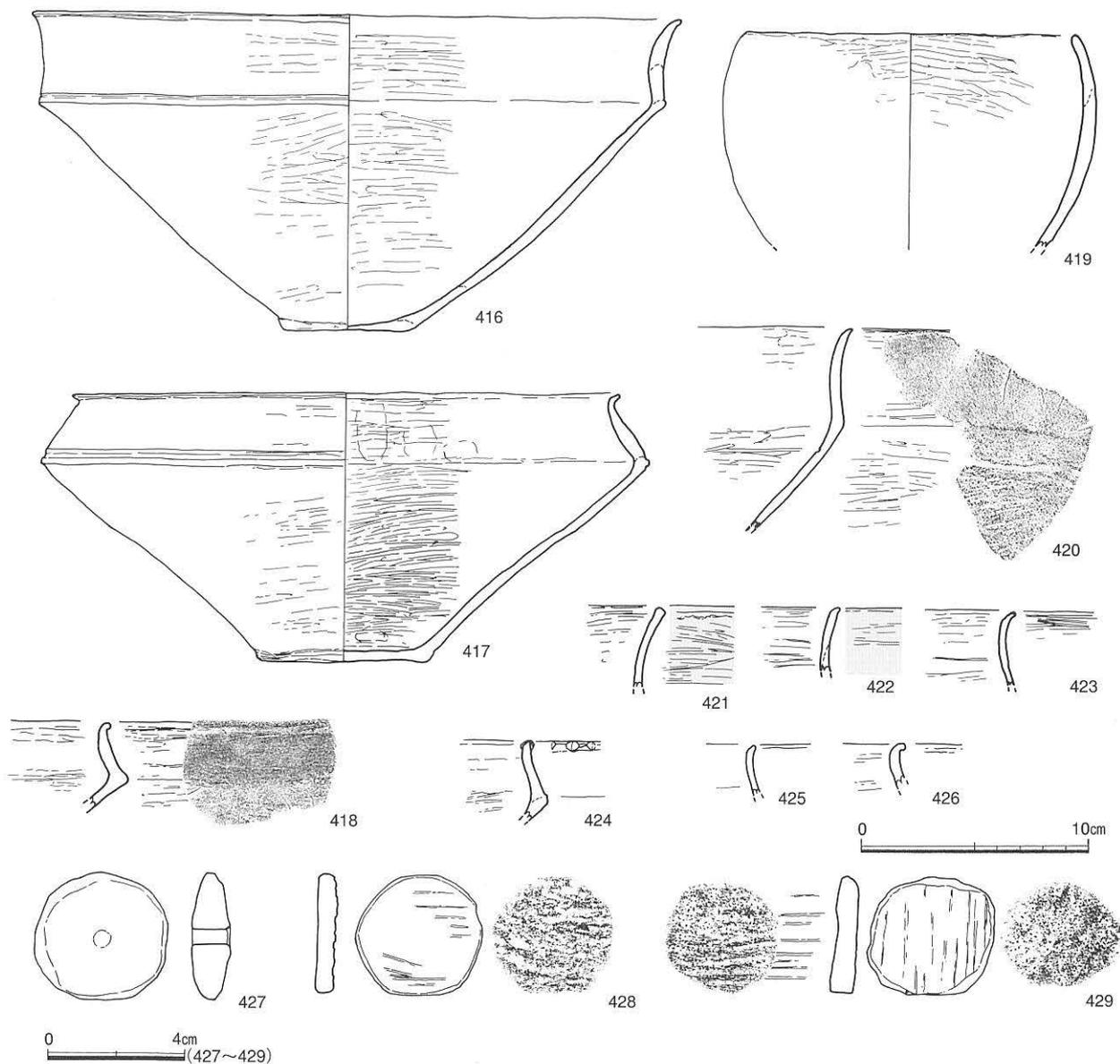


Fig.59 SX100出土土器実測図3 (1/3、2)

に突帯はなく直接刻み、394は刺突による。389、400は灰白色、391から395、401、403、404は橙色から淡橙色、他は暗褐色を呈す。382はSX102の遺物と接合した。406は胴部片で段状の沈線を施し外反する。径は14cmほどで小さく、特異な器形だが精製の深鉢と考えている。407から411は短い頸部を持つ壺で407、411以外は赤色顔料を施す。器壁が薄く、胎土は細かい。412は直口だが、411と似る。413は小形の碗状を呈し、外面に赤色顔料を施す。414、415は直口の鉢で378等に近い。416から418、420から426は浅鉢である。416は褐色から暗褐色を呈しSX127付近、SX102等広範囲の破片が接合し、1/4強を復元した。417は内面は黒色で研磨を施すが条痕を消しきれない。外面は荒れて下部ほど橙色を呈す。全体に器形に鋭さがない。破片は北側に集まり1/4を復元した。420は内面は研磨だが外面は削り調整で粗い。421、422は丁寧な研磨で外面に赤色顔料を施す。428、429は土製円盤で削り調整の甕の転用である。419は外面削り、内面粗いヘラナデ調整で内面に炭化物が付着する。西側の破片と接合し、1/2周する。430から440は底部で、430から432は外面は条痕の後削り、内面には条痕を残す。器形、器壁の厚さ等から大形の深鉢になると思われる。433は器壁が薄く上げ底で浅鉢か。434は外面の底にも赤色顔料を施す壺または浅鉢である。436から439は甕であろう。439は外面に赤みがあり、他は灰色系を呈し暗い色調のものはない。440は鉢

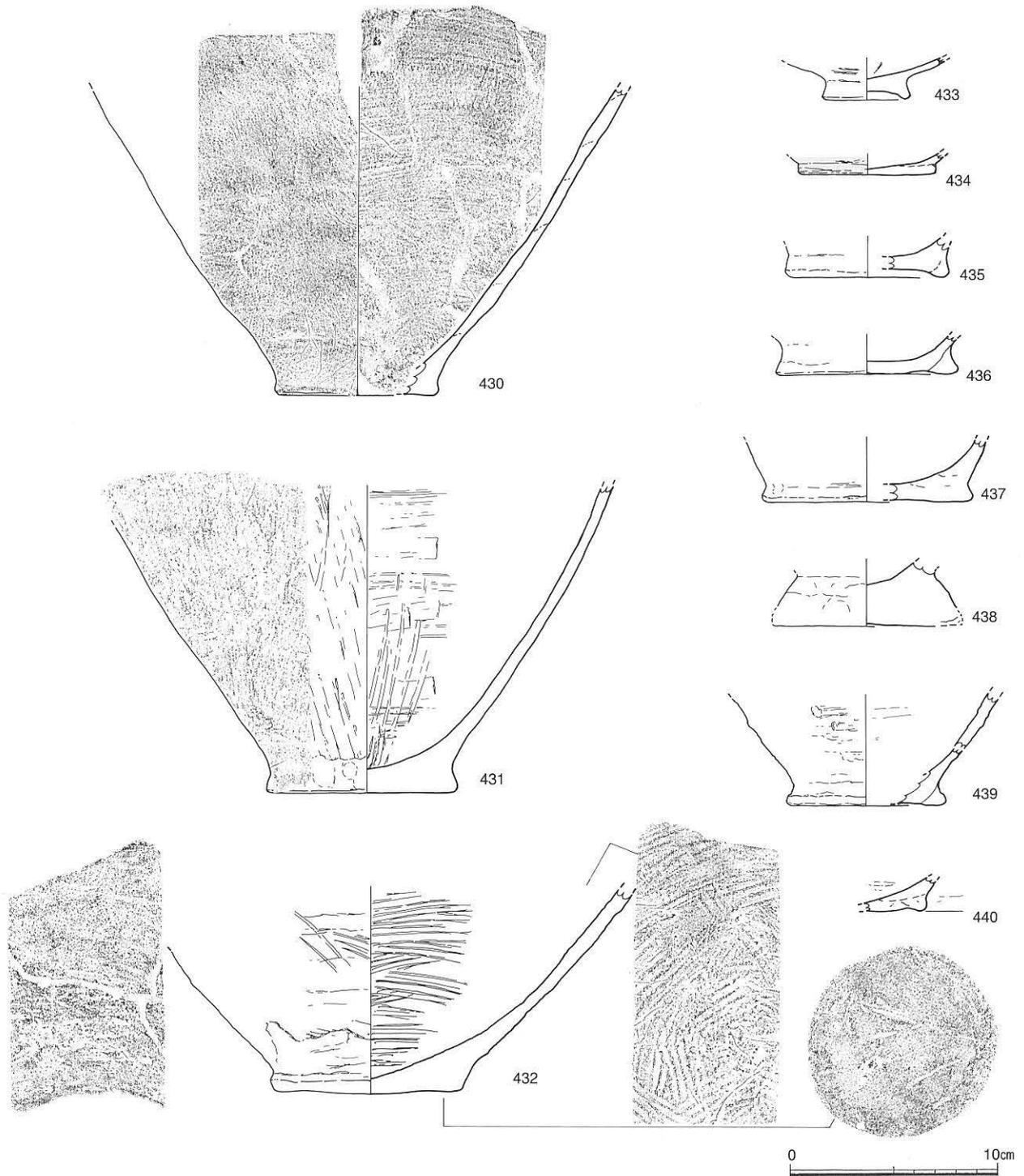


Fig.60 SX100出土土器実測図4 (1/3)

か。

441から443はSX100の西側でまとまって出土した。441は甕で細い突帯に鋭く細い刻目を施す。屈曲部は無文で外面削り、内面条痕調整を施し、外面は淡茶か橙色、内面暗灰から黒色を呈す。442は屈曲部が緩やかで外面は研磨で黄茶色を呈し、内面は条痕で灰色を呈し荒れる。443は4隅が突出する波状の口縁部をもち、平面は方形に近い。口縁部には体部には条痕調整を明瞭に残す。内面は研磨調整である。444は極薄手の浅鉢の底部で外面は粗い削り調整である。445はナデ調整の小形の鉢か。446から449はSX126周辺から出土した。446は波状口縁の方形浅鉢で焼きが固く暗灰褐色

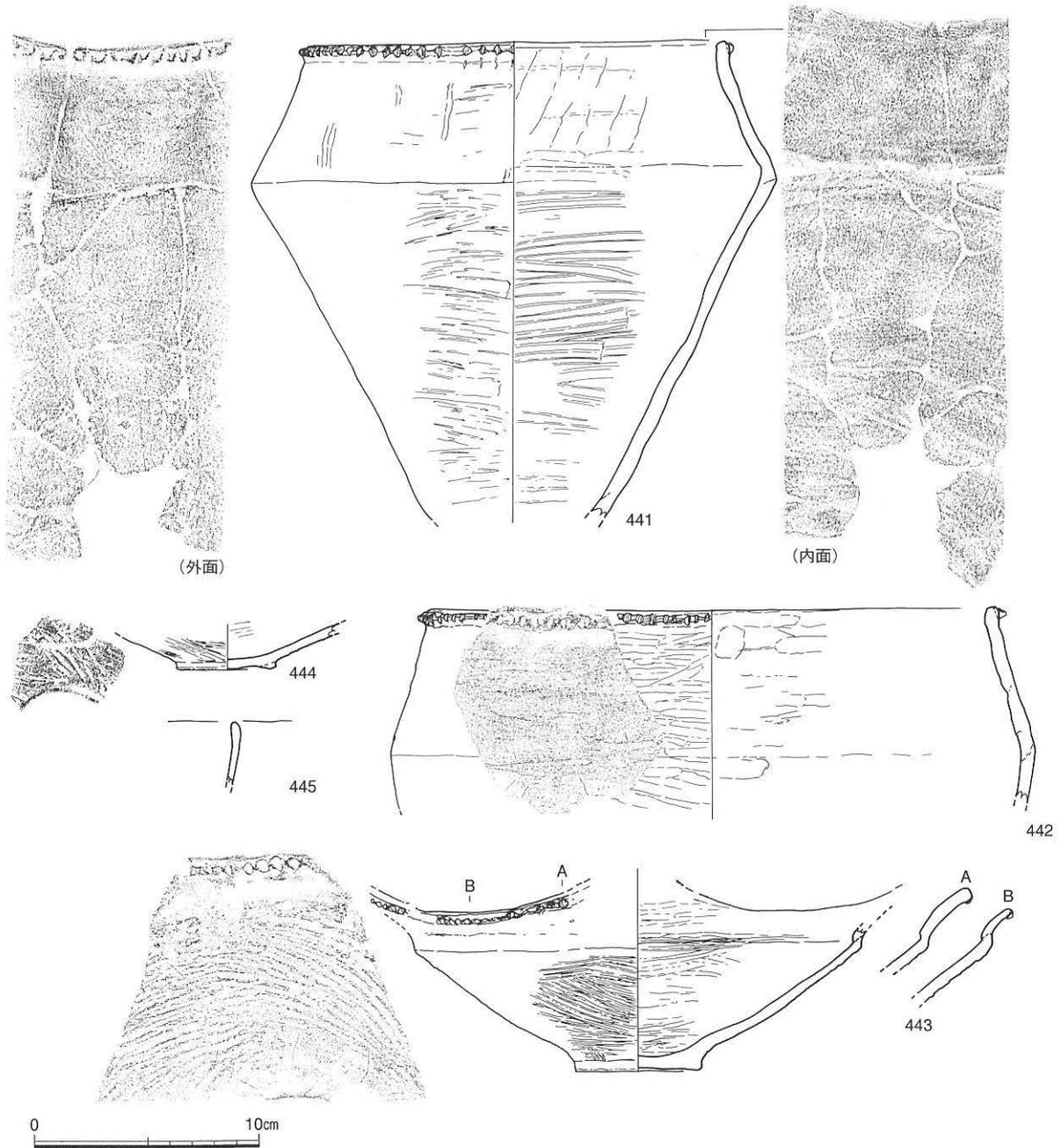


Fig.61 SX121出土土器実測図1 (1/3)

を呈す黒色磨研土器である。外面体部は条痕が明瞭に残る。同一個体と考えられる破片がSX100、102にもある。448は短頸小形壺で407と同一個体の可能性がある。447、449は甕である。450はSX102として紹介した壺である。2/3が接合した。内外面に横方向の条痕調整を施しなでる。頸部には条痕を明瞭に残す。口縁部が黒色を呈す以外は淡灰色から灰白色を呈す。器壁は厚手で胎土には砂粒を多く含む。451は450の東から出土した深鉢で横方向の粗い削り調整を施す。452、453はSX127周辺からの出土で肩部無文の甕である。452は外面ヨコ方向の削り状の条痕、内面条痕を施しなでる。453は外面胴部は縦方向の削り、頸部は横方向の条痕調整、内面は条痕を施し、明るい茶褐色を呈す。454から458はSX126の東で少し離れて出土した。454、455は甕で454は極薄く外面削り小さな突帯に小振りの刻目を施す。455は口縁部を肥厚気味に仕上げている。456、457は浅鉢の底部と考えられる。458は研磨調整の浅鉢で外面荒れ、胎土に砂粒が多く器壁が厚い。

SX102 (Fig.64、66、67) SX100の北側の溝状のくぼみで北側が幅広く2.5m以上を測る。断面レンズ状から2段掘り状を呈し深さ30cmを測る。Fig.51-cの北壁に土層を示した。茶褐色粘質シル

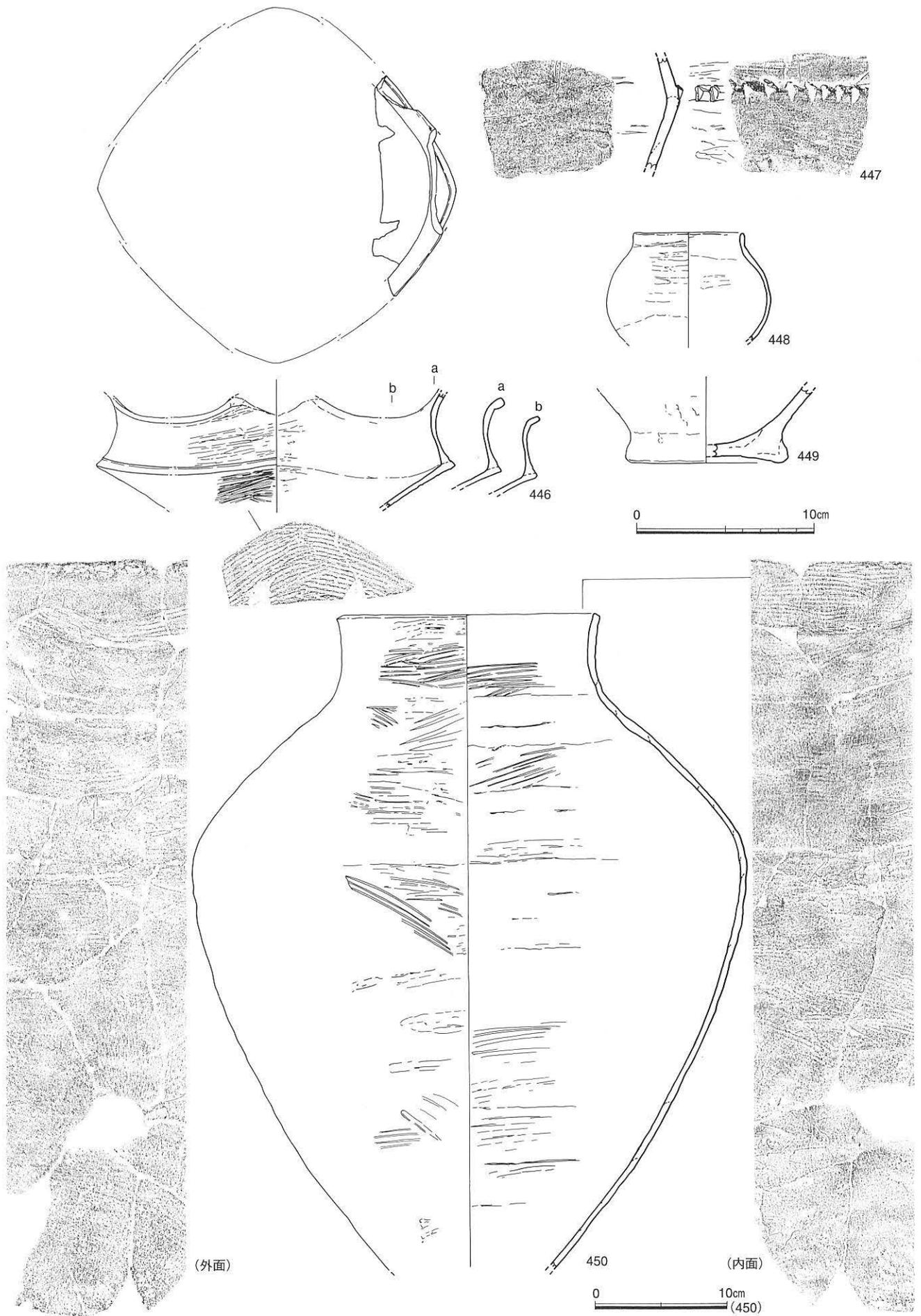


Fig.62 SX121出土土器実測図2 (1/3、4)

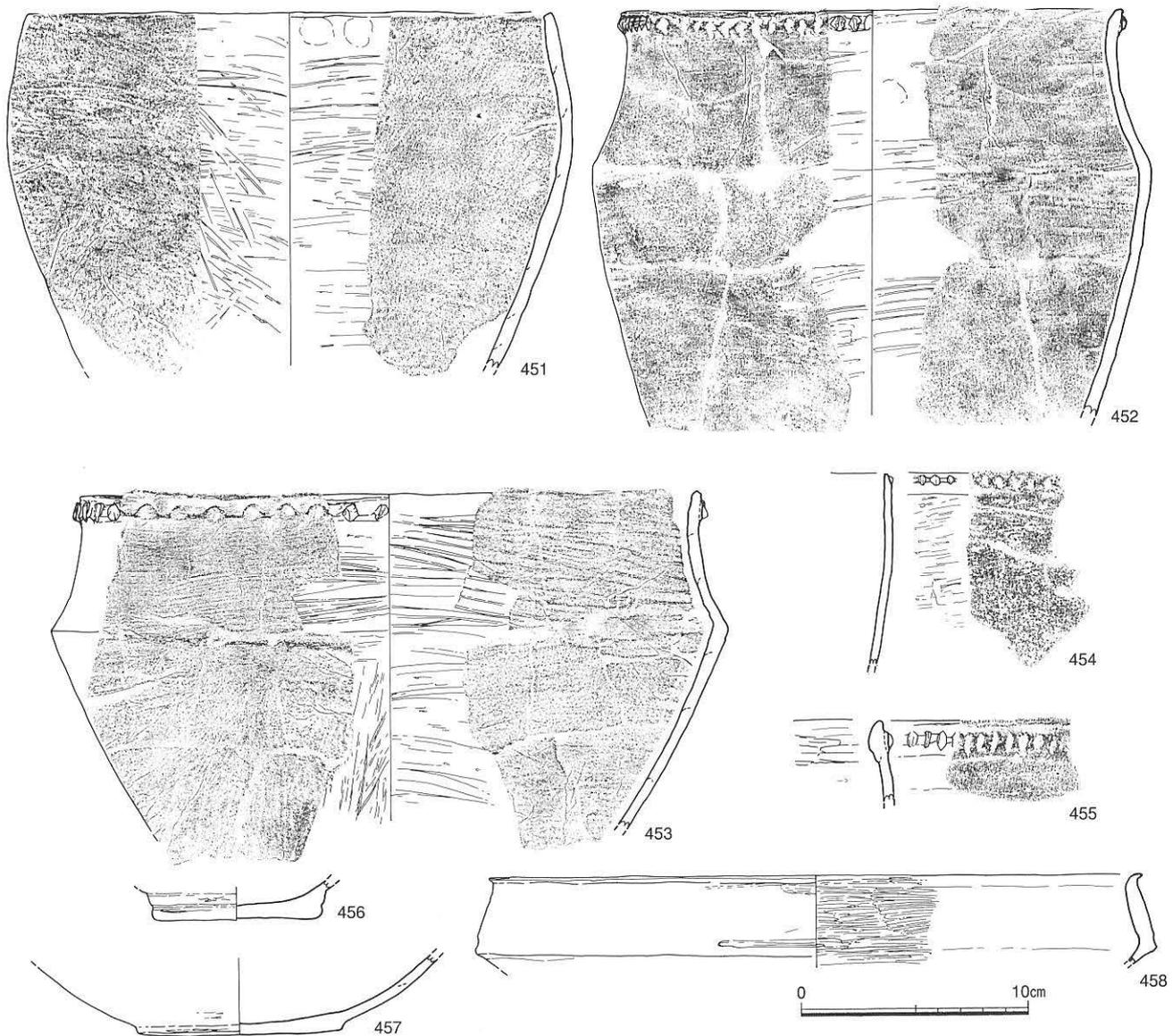


Fig.63 SX121出土土器実測図3 (1/3)

ト、灰茶褐色シルトを覆土とし、炭化物を多く含む。遺物は床から浮いて出土した。461から463は屈曲する突帯文の甕で、462の口縁部は素口縁に細い刻目を密に入れる。464は粗製の深鉢で外面削り状の条痕、内面はナデでわずかに条痕が残る。口縁部内面1cmほどに粘土を足して肥厚する。465は丸底の浅鉢で3/4を接合した。外面は条痕、削りの後軽くナデ、内面は同様にナデが少し丁寧だが条痕が残る。内面黒褐色、外面淡茶褐色をていし、底部は明橙色に呈す。2次焼成によるものか。466から473は突帯文の甕で466、471、477は橙色に近い。471は粗い胎土で口縁部に刻目を入れる。474は浅鉢の体部で外面は縦方向の研磨。475は碗状を呈し丸底になると思われる。外面は煤ける。481は土製円盤で削り調整の甕の転用品である。476は壺か鉢、476は鉢の底部で胎土は精良。477、478、479、480は深鉢または甕の底部でいずれも淡橙色を呈す。

SX109 (Fig.65) SX100の北東の調査区際で検出した溝状のくぼみで調査区外に広がる。幅2mを測り4m程を検出した。Fig.51-Dに土層図がある。淡茶褐色シルトと砂質土が縞状に堆積する。突帯

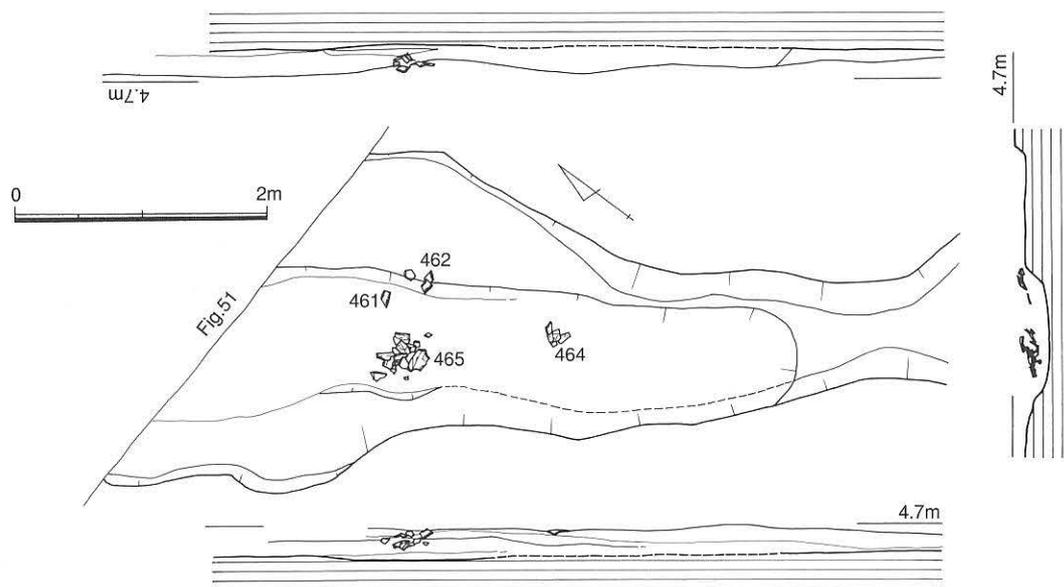


Fig.64 SX102実測図 (1/60)

文を中心に遺物が出土したが小片のみで、覆土からもその時期かは不確定。482から485は突帯文の甕で482は灰白色、483から485は淡橙色から橙色でどれも明るい色調である。486は屈曲部の小片で外面に低く丸みのある突帯を付け、細い刻目を描く。487は黒褐色を呈す鉢、488から492は浅鉢で491は内外面に赤色顔料を施す。493、494は壺と考えられ、493は外面、494は内外面に赤色顔料を施す。495は土製紡錘車で径5.4cm、厚さ1cmを測る。

SX110 (Fig. 65, 67) SX100の東で検出したくぼみで長さ4.5m、最大幅2.8mで深さ15cmを測る。覆土は淡茶褐色粘質シルトで炭化物を若干含む。遺物は突帯文期の土器、石器が出土したが小片がほとんどで少ない。496から499は突帯文の甕である。500は浅鉢の口縁部におそらく指で刻目を入れる。501は壺かと思われる。内外面に赤色顔料を施す。

SX115 (Fig. 65, 67) SX102の西側で淡茶褐色粘質シルトがごく浅いくぼみに残っていた。プランは確認できず、図化していない。少量だが突帯文土器が出土した。502は甕で刺突による刻目、503、504は浅鉢か。504の内外面は赤色顔料を塗る。

SX116 (Fig. 65, 67) F4の北西で検出した浅いくぼみで長さ5.75m、幅2.3m、深さ11cmを測る。茶褐色粘質シルトを覆土とし少量の炭化物の粒が入る。図のように突帯文の甕507がつぶれた状態でまとまって出土した。それ以外の遺物は少ない。505は壺の頸部で外面に赤色顔料を施す。506は甕の底部と考えられる。507は口縁部と底部付近の一部を欠くが、ほぼ関係に接合できた。外面は横方向の条痕の後に横、斜方向に削り、内面は横方向の削りが顕著。外面淡茶褐色、内面黒色を呈す。

SX117 (Fig. 65, 68) E2のSD125際で検出したくぼみ状で長さ7.9m、幅4m、深さ40cmを測る。を覆土とし暗褐色、淡灰褐色粘質シルト、粘質土を覆土とし床の一部に炭化物を多く含む。土器等の遺物が出土したが小破片が多い。508から513は刻目突帯文の甕である。器面が荒れるものが多い。509は条痕がはっきり残る。514は口唇部を平たく仕上げた薄手の鉢で、外面黒褐色、内面灰褐色を呈し、内外面をなでる。515、516も直口の鉢である。517は直線的に外反する口縁が頸部で屈曲する。521の様な胴部につくのだろうか。器面を見る限り同一個体の可能性がある。518、519は壺で同一個体の可能性がある。518は小破片だが519に合わせて復元した。口縁内面から外面全体に赤色顔料を施す。520は浅鉢、522は直口の鉢である。523は甕、524は深鉢の底部と考えられる。

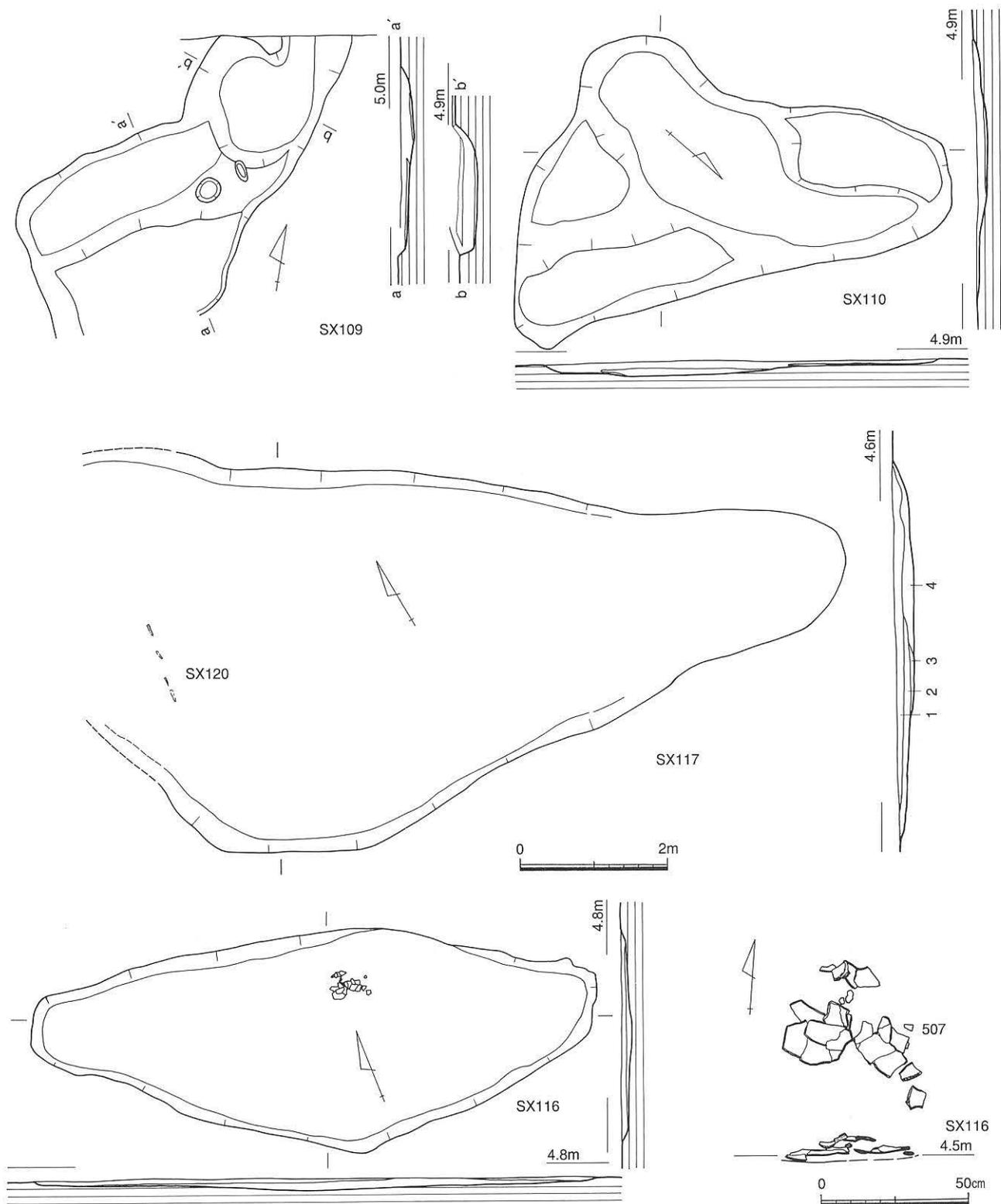
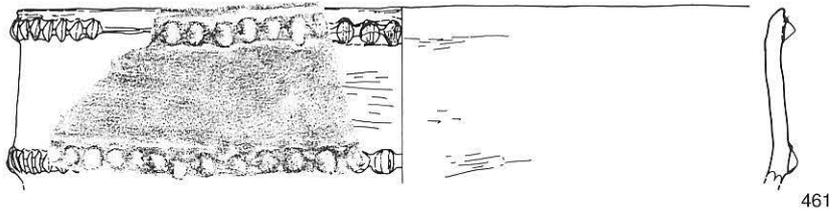
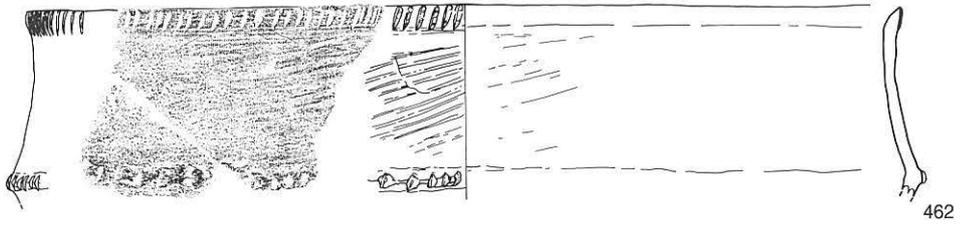


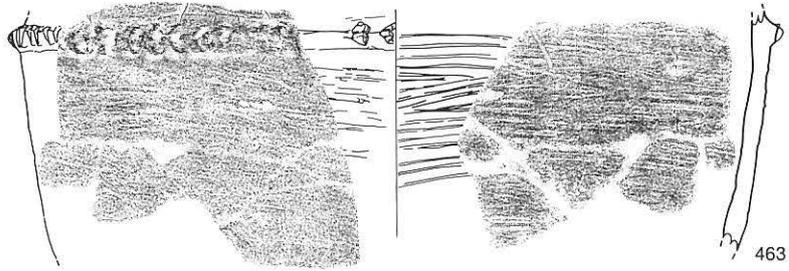
Fig.65 SX109・110・116・117実測図 (1/60、20)



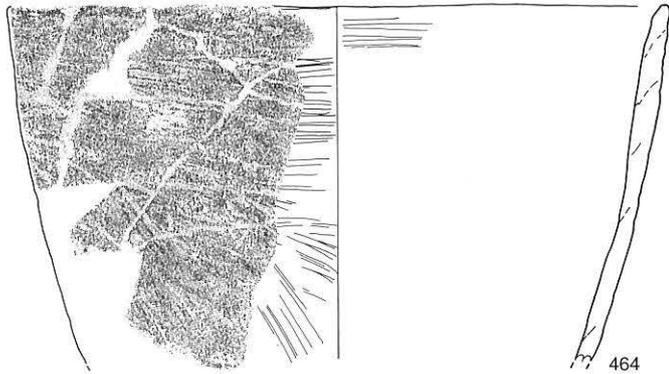
461



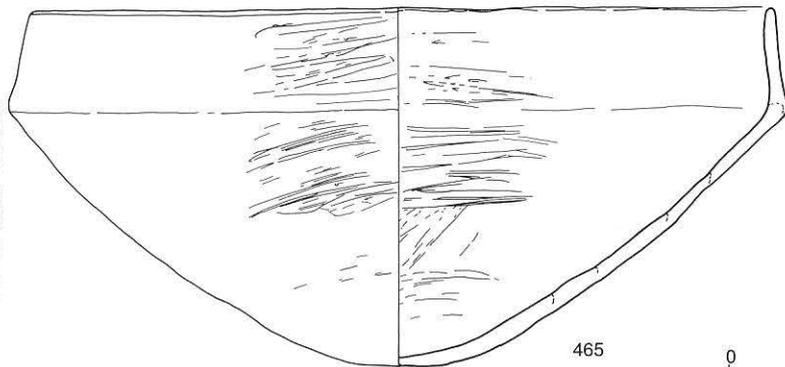
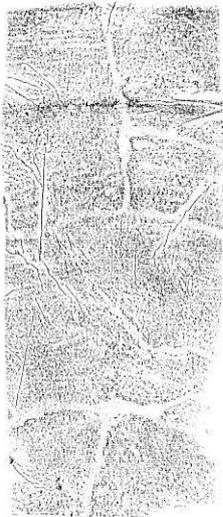
462



463



464



465



Fig.66 SX102出土土器実測図 (1/3)

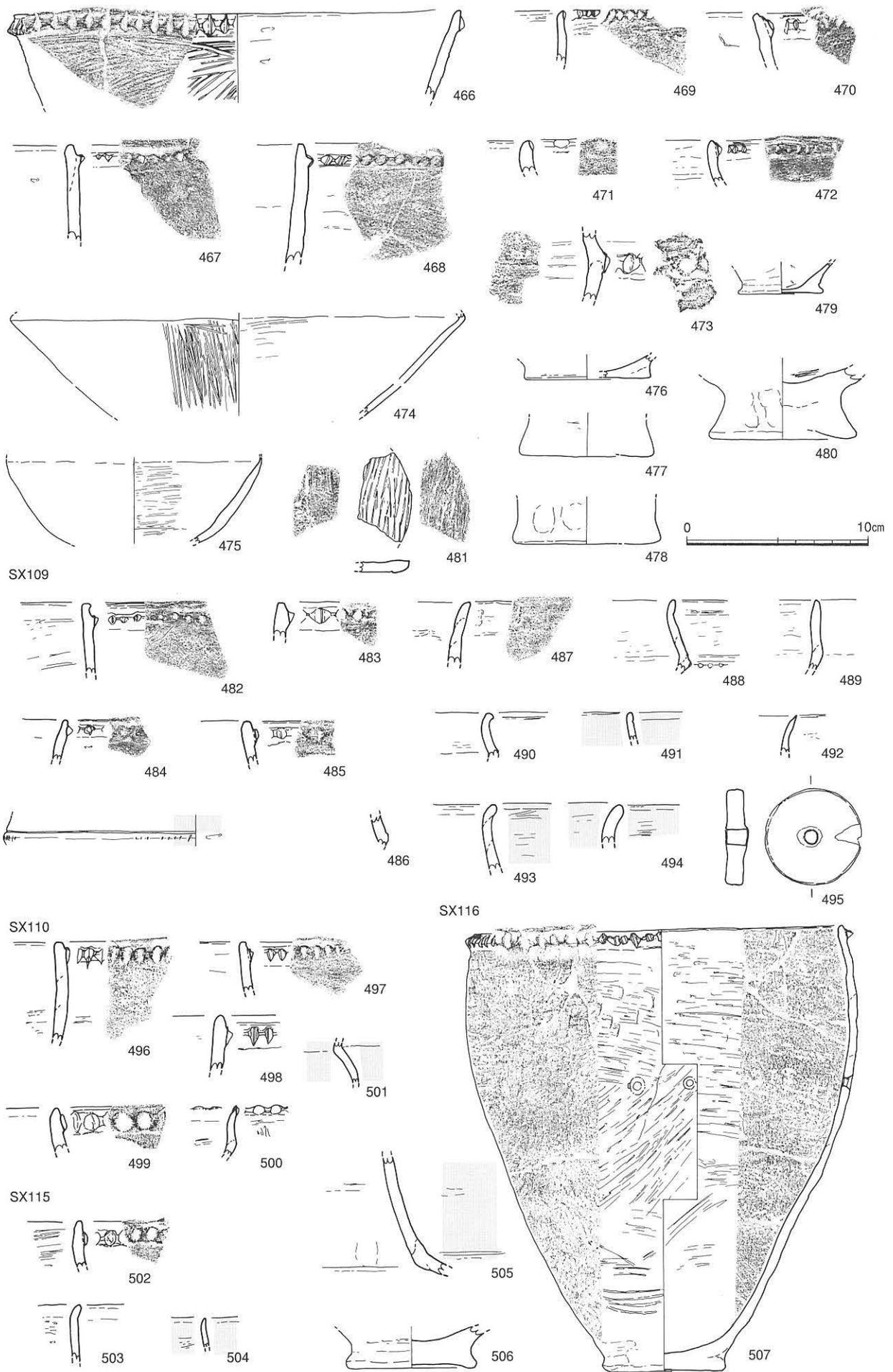


Fig.67 SX102 · 109 · 110 · 115 · 116出土土器実測図 (1/3)

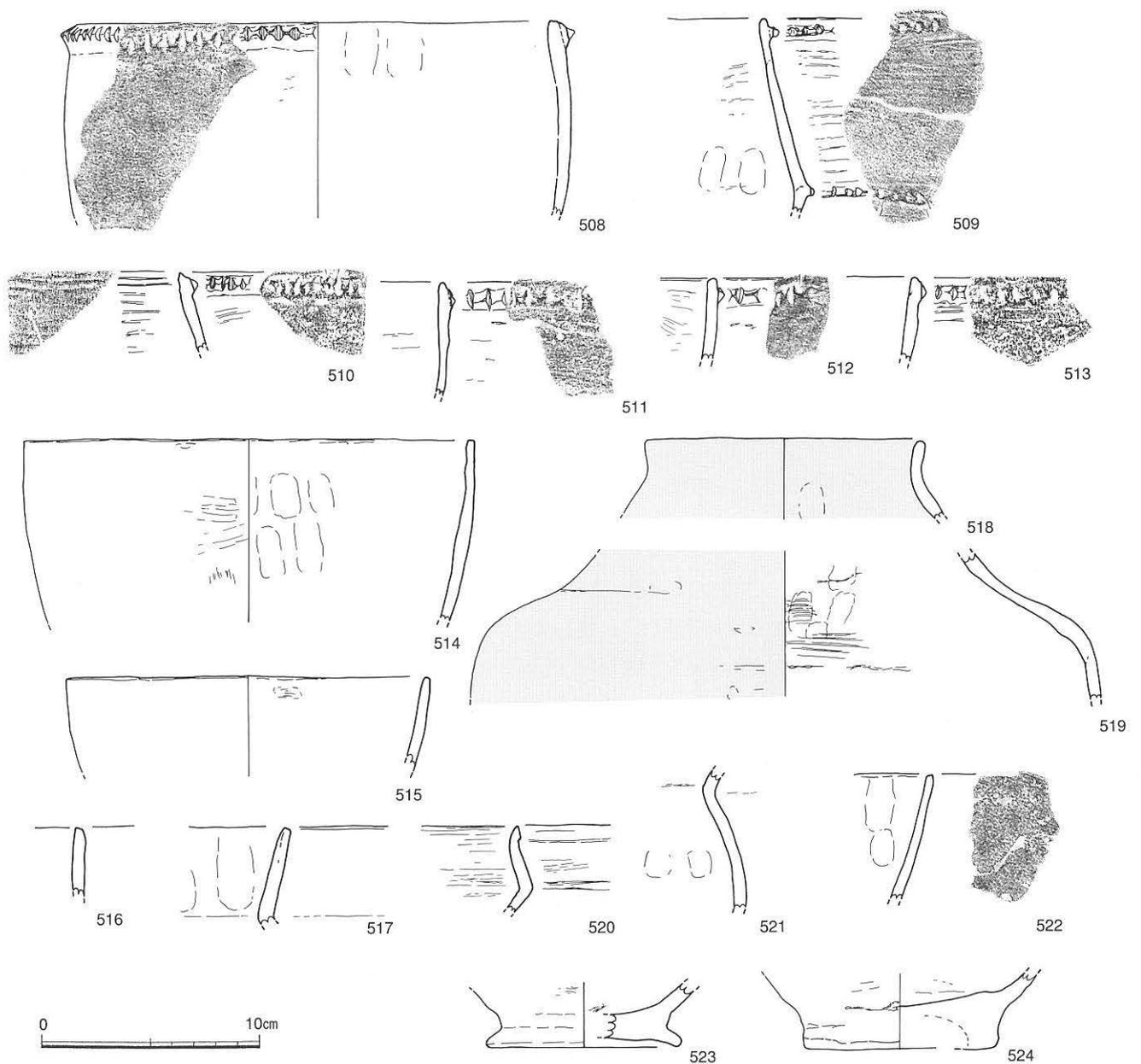


Fig.68 SX117出土土器実測図 (1/3)

(3) 河川

SD125 (Fig.50、51) Fig.50に示すⅢ区を囲む弧状の範囲に河川堆積を確認した。検出面では淡灰褐色粘質シルト質土でⅢ区の遺構がのる砂質層とは異なる。調査期間の都合で全てを掘削する事ができず、6本のトレンチ調査を行った。想定したプランはCDE区では、流れの方向は別として、CD1からE4・5へ西側に弧を描いて広がり、Fでは南端は調査区外に出、北岸は急に曲がって南東側へ弧を描いて北東のI2の落ち (Fig.51土層e)に達すると考えられる。南端は後述する1トレンチで立ち上がりを確認しているの、F5の調査区外に上端がある。次にI5ではFig.51の土層gに立ち上がりがあり、これに続くと考えられる。以上の想定は、特にGから東側がはっきりしていない。別の河川が南側からくる可能性もあり、現段階での想定である。次に各トレンチ毎に堆積等と検出遺構を見ていきたい。

1 トレンチ (Fig.50、69、71) F4・5の南北方向に設定し、矢板列SX118を確認したため拡張した。トレンチの西壁の土層と矢板列の平面、見通しをFig.69に示した。矢板は幅24cmから5cmを測り10cmくらいが平均である。長いもので85cmで中央部分の6から16が長く、端は短い。深く入ったものでも河川底の礫層で止まる。上部の失われた部分を考えると1m以上はあったのだろうか。先端の両側または片側を落として矢部分を作る。板はミカン割りで全て杉と考えられ同一の木から取られた可能性がある。8から10、13、16、17から19には標高3.6m付近にスサが見られる。矢板は西側から東側に60°前後の傾きで打たれる。列としてみるとほぼ南北に直線的に並び、SX125の屈曲部を想定している部分で河川と直交する。打ち込み方向からすると東から西への流れがあったことになる。また、矢板の背後には22、23、25の丸杭が45°前後の角度で西へ打たれる。以上の状況は2次調査のSD001に打たれた矢板列SX004に類似する。

西壁土層では河川の幅10m弱の断面が表れている。その中でもやや南よりの深い部分に流れが集まり、矢板列のプランと一致する。4、5層が砂質シルトと粗砂の互層、6層が粘質土でよく締まる。7、8層は再び粗砂が多く、9層は粘質で有機物を含む。9層上面には5から10数cm大のくぼみがあり杭、足跡等の痕跡の可能性があるが確認できていない。基盤は南岸から底は礫層、北岸はFig.7Ⅷ層の河川堆積である。先の矢板に絡んだスサは6層上面にあたり、6層を底として5または4層部分に流れがあった時期に矢板が設けられたのではないかと考える。遺物は少なく、1トレンチからは525から533を図示した。533の3層出土以外はいずれも上部層からである。528は大振りの刻目を深く施す。526は大形の壺で刷毛目を若干残す。527は橙白色を呈し形態は浅鉢の底部である。他の底部は甕である。530は外面肥厚した壺の口縁部で研磨調整を施し淡橙色を呈す。528は突帯と口唇部で平坦面を作り、刻目は棒状工具で押さえる前期のものであろう。そう考えると矢板の時期も前期初頭あたりに想定できよう。

2 トレンチ (Fig.50) 河川の流れの方向に設定し、水平堆積が見られたが図示していない。土堆積は1トレンチのと変わらず、床の深さもほぼ同じである。遺物は少なく図示できるものはない。

3 トレンチ (Fig.50、51) ED3・4で河川に直交して設け手掘りした。幅9m程の河川堆積を観察した。堆積の状況は1トレンチと同様である。西側は礫層、東岸は砂、砂質シルトを基盤とする。3層上部で4本の杭を検出した。西端では幅1.3mの溝状を確認し、そこから最下層の土器534、546が出土した。534は突帯文の甕の口縁部で突帯が下がった位置に付く単純期のものである。546は一部に組織痕文がみられ、淡橙色を呈す。他に突帯文期の小片があるが少ない。

4 トレンチ (Fig.50) 調査前に重機でDに入れたトレンチで2トレンチ同様水平堆積を確認した。

5 トレンチ (Fig.50、51) 調査前に重機でBCD1に入れたトレンチで、下部を手掘りし、幅18mの河川堆積を確認した。ここではいくつかの流れの重なりがみられる。東側の7層を中心とした堆積と西側の7b層を中心にする粘質土のくぼみ、東側には5b層の粘質土のくぼみとさらに6層の粘質土のくぼみがあり、7bと5bの新旧ははっきりしない。中央には7dからeの高まりがみられる。底は一部しか確認できていないが、礫層に標高3.3mで達し、他のトレンチと同様である。粘質土には流木等の有機質を多く含む。遺物は少ない。535、536は4トレンチ出土の甕の底部。537から541は甕、深鉢の底部。539は研磨調整を施し、浅鉢または壺の底部であろう。

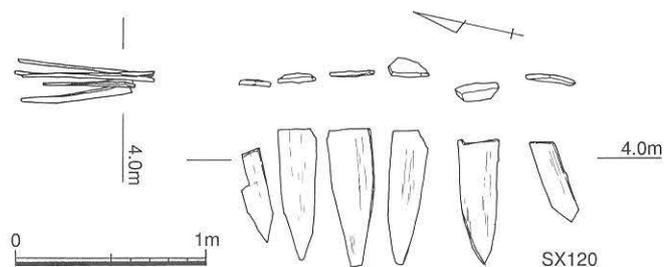


Fig.70 SX120実測図 (1/40)

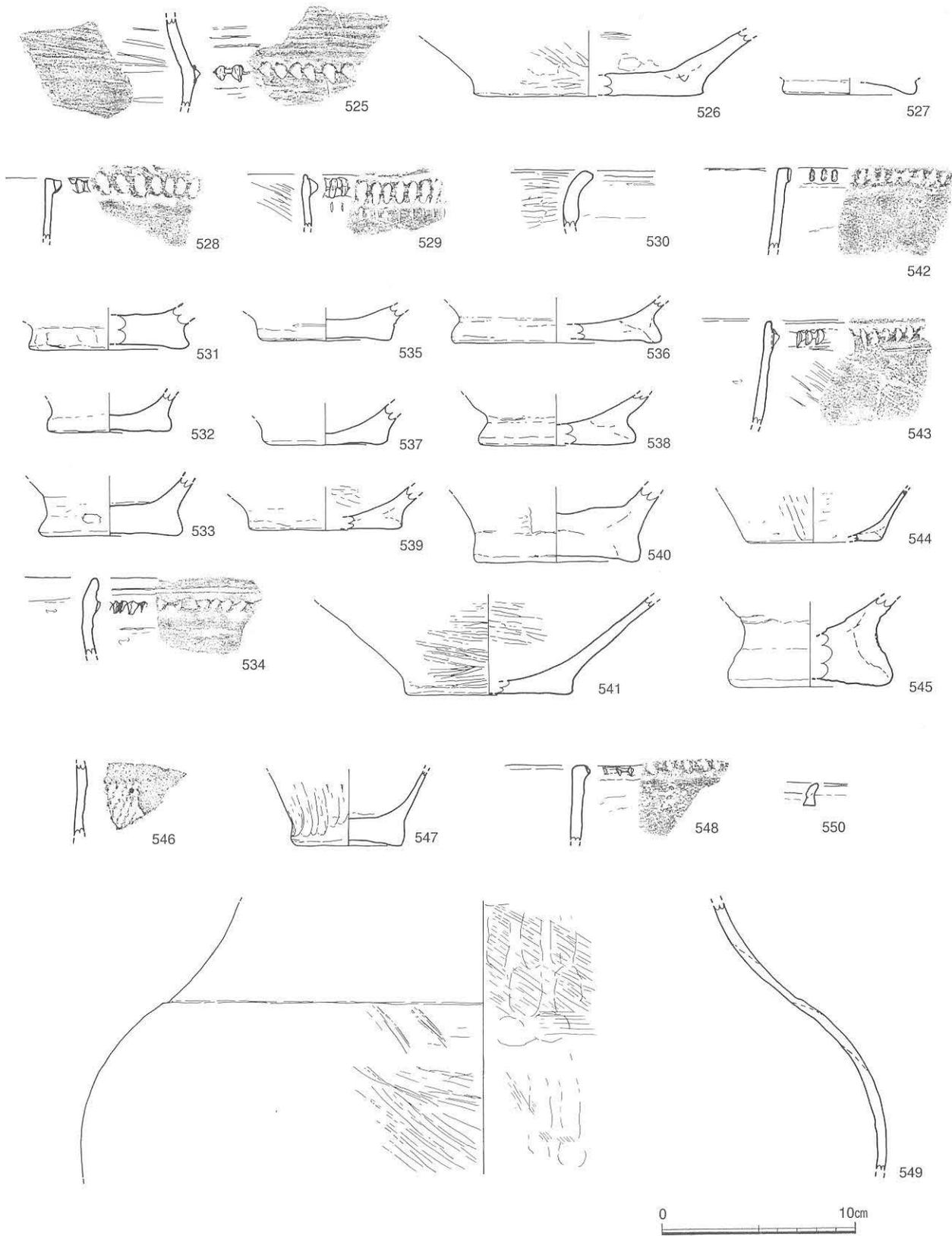


Fig.71 SX125トレンチ出土土器、試掘出土土器実測図 (1/3)

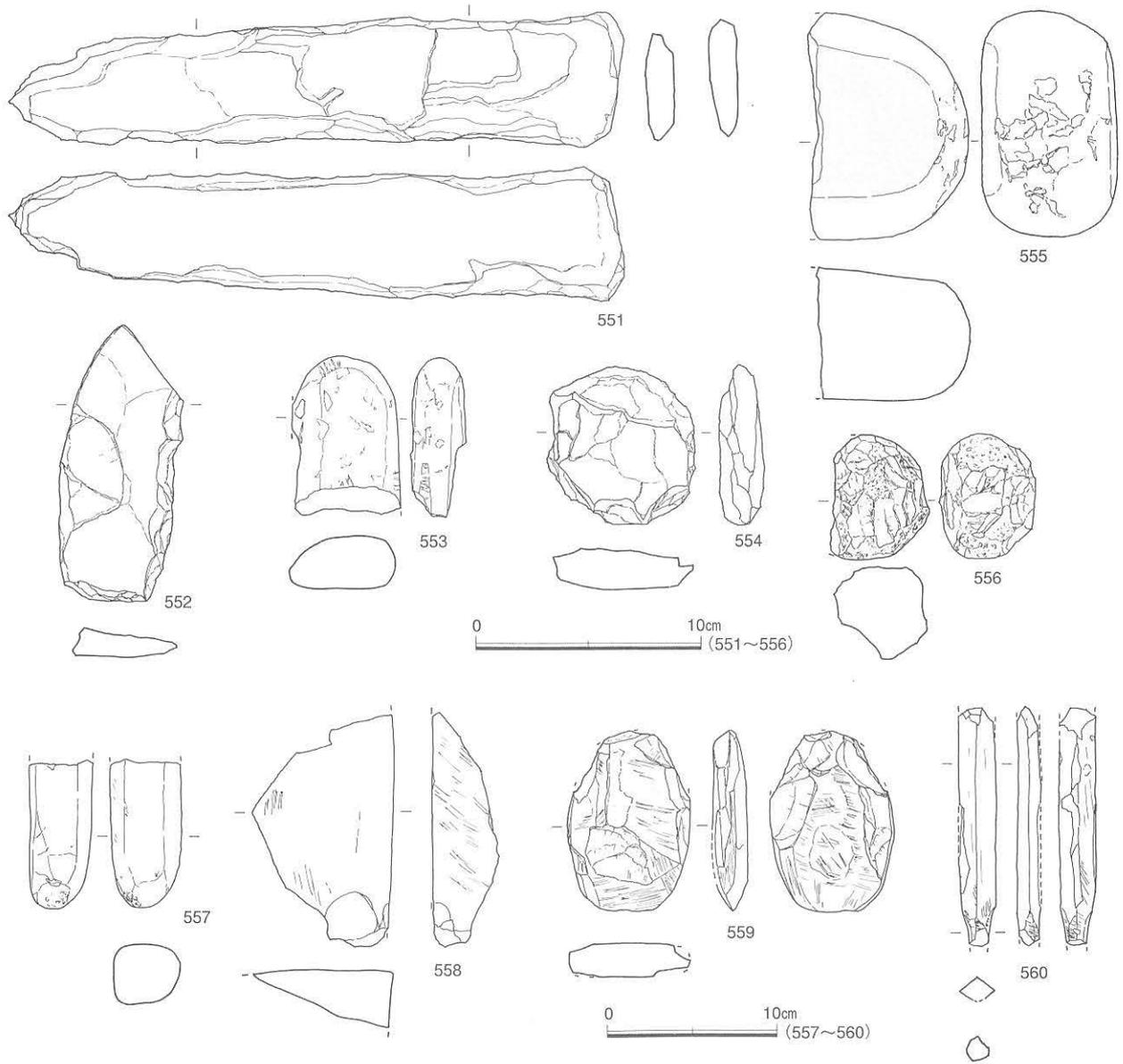


Fig.72 SX100・115・SD125出土石器実測図 (1/3、2)

6トレンチ (Fig.50、51) H4に入れたが底、川の端部を確認するに至っていない。中央部分は掘り足りない。粘質土上面からは5から10cm大のくぼみがある。遺物は少ない。542から545は6トレンチ出土で、542、543は突帯文の甕で542は口唇部端に接する突帯に浅い刻みを入れる。544は上げ底気味で研磨調整を施す浅鉢と考えられる。

以上のトレンチの観察からは、SD125を先に想定したものを否定する材料はない。GH区とその調査区外の状況が明確ではなく上記の疑問は残る。河川は、遺物が少なく時期は想定しづらいが、矢板が設けられた上部は前期初頭で良いと考える。底の部分の粘質土は突帯文単純期に遡る可能性はある。

SX120 (Fig.50、70) DE2で検出した矢板列でSX117のプラン内だが、SD125の上端に近く、併行する。6枚のミカン割りの矢板をほぼ垂直に打ち込む。幅14から22、長いもので74cmが残る。淡灰色粘質シルトから青灰色粘質シルトに達する。時期等を判断する材料がない。位置からしてSD125に関係あるのかもしれない。

(3) 試掘トレンチ出土遺物 (Fig.71)

Ⅲ区調査前に行ったトレンチ出土の土器で、位置はSD125の1トレンチの南の調査区外である。

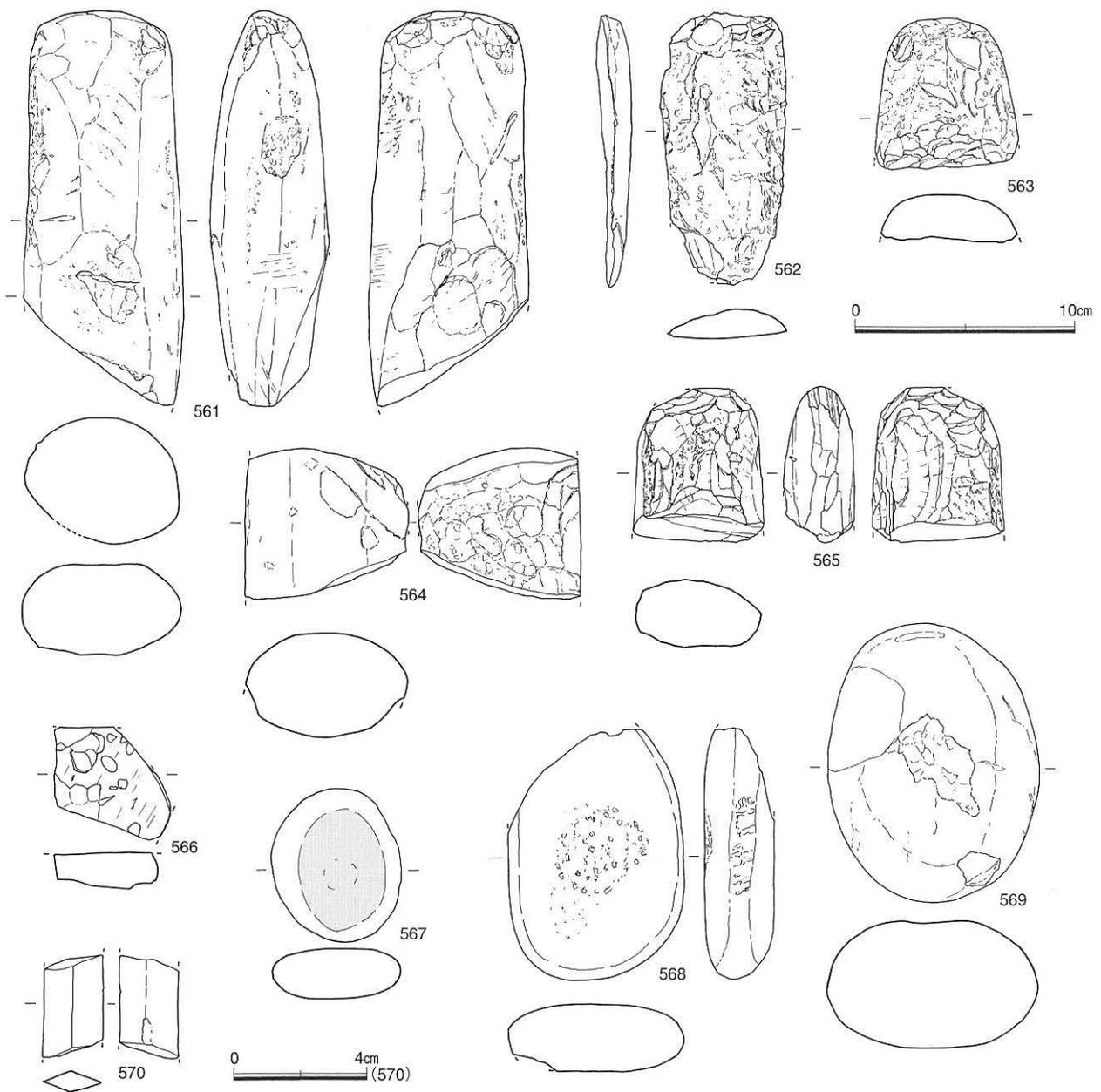


Fig.73 出土石器実測図 (1/3)

547は甕の底部で外面削り調整。548は突帯文の甕で口唇部が橙色を呈す。549は外面は研磨し赤色顔料を塗る。内面頸部は刷毛目調整と指圧痕が残る。前期の壺である。トレンチ下部で出土した。

(4) 出土石器 (Fig.72、73)

551から557はSX100出土である。551は変成岩系の石材で石剣と考えている。基部に自然面が残る他は風化により生きた面を止めていない。現存長27cmを測る。552から554は玄武岩で552は側片が刃部状になるが意図したものか不確定。553は石斧の基部で敲打痕がある。554は薄く円形に打ち欠く。555は花崗岩の磨石で敲石でもある。556は敲打具、557の先端には小さな敲き痕がある。他にSX100からは磨石、敲石が出土しているが多くはない。558、559はSD125出土。558は泥岩製の片刃石斧と考えている。559は頁岩で全面を磨き刃部を作る。560はSX115出土の磨製石鏃。

561から569は河川等からの出土である。561から565は石斧でいずれも欠損している。564以外

は敲打までで磨きを受けていない。561、564は玄武岩、562、565は頁岩、563は細粒砂岩であろう。566は泥岩質で片刃石斧と考えられる。567は玄武岩の磨り石。568、569は玄武岩、花崗岩の磨石・敲石で表面中央に敲打痕があり569はややくぼむ。570は磨製石鏃で裏面の鏃ははっきりしない。

剥片石器はPh.29の一部を、下の表には出土石器の組成を示した。剥片石器は石鏃、削器、使用痕のある剥片がほとんどを占める。石材は、石鏃で9割弱、削器で65%、UFはほとんど全てが黒曜石である。剥片・碎片では97%を黒曜石が占めている。黒曜石は漆黒、灰黒色、半透明などの色調のものが見られ、不純物が入ったものもあるが少ない。原石はPh.29に見るような表面に細かな気泡状の穴があく角礫で、腰岳産と言われているものである。石核や、自然面が残っている石器も同様の特徵で肉眼観察からではほとんどが腰岳周辺から搬入されたものと考えられる。また、剥片・碎片、石核の量に比べて、作り出された石器は少ない。剥片・碎片は不定形のものが多く、使用できそうなものでも痕跡が見られないものが多い。表にはⅢ区は遺構毎に数を示した。そのなかではSX100が量が多い。石鏃21個は57%を占め、各種石器が揃う。剥片・碎片も多く石器製作を伺わせる。また、SD111から114は剥片・碎片の数が異様に多い。このことは試掘時から判っていたが、時期が異なると考えられる。後世の溝になぜこれほどの黒曜石が入ったのか不明である。Ⅰ区出土は古墳時代以降の河川出土のものを含めた。ここでも同様の組成を示す。石鏃はPh.29のように整った二等辺三角形、三角形で基部が浅い弧を描くもの、やや大きめのものがある。その中に右下のように長身のものや、深い抉りが入るものがあり、前者は安山岩（古銅輝石安山岩以下同じ）で後者は黒曜石だが器面の風化が著しい。削器は安山岩製を示した。横長気味の不定形剥片の一片に刃部を加工する。UFで右のような顕著な縦長剥片はこの1点くらいで、ほとんどが不定形呈す。搔器は不確かだが刃部に角度があるものを取り上げた。石斧は玄武岩、頁岩製で破片が多く全体をつかめるものは1点のみである。片刃石斧になりそうな泥岩製の破片も3点ある。叩き石、磨り石は玄武岩、花崗岩製が多い。

4) 小結

2次調査に引き続き、突帯文期から前期の遺構を確認した。Ⅰ区の遺構は前期に入るもので板付Ⅱ式まで下る可能性がある。Ⅲ区ではSX100、121が種類、量ともに豊富である。甕の屈曲が強く、刻日は大きなものも多く、単純期であることは間違いなからう。深鉢、そして特に壺が少ない事が特徴的である。SX116、117の突帯文は刻日が浅いものも多く、底部の張りが弱いなどSX100よりやや新しい要素がある。SD125の矢板列などから水田耕作等の生業を行っていたと考えられ、それに伴う居住空間と考えられる。

石器組成 剥片石器の()内は安山岩の数 磨製石鏃以外は黒曜石

遺構番号	打製石鏃	磨製石鏃	搔器	削器	石鏃	UF	石核	原石	剥片・碎片	石斧	磨石	叩き石	石剣
SX100	22(1)			5(2)	1	12	26(1)		579(1)	3	1	2	1
SX121	1								120(2)				
SX103						1	5		22				
SX105							1		26				
SX106				1(1)			1	1	10				
SX107							1		68				
SX108	1						3(1)		35				
SX109							4		157(8)				
SX110				1		2	11	1	217				
SD111				1		1	4		86(1)				
SD112				1			1	5	23(1)				
SD113									585(7)				
SD114							18	1	408(1)				
SX115	2	1							21				
SX117							5		25(1)				
SX125	1						5		27(1)	1			
Ⅲ区	27(1)			9(3)	1	16	85	8	2755(33)	4	1	2	
Ⅰ区	10(4)	1	1	11(4)	1	22(1)	20		367(50)	14	5	3	
合計	37(5)		1	20(7)	1	38(1)	105	8	3122(88)	19	6	5	1



Ph.1 Ⅲ区全景（北西から）



Ph.2 SD125-1 トレンチSX118（南東から）



Ph.3 1区SD001～007、009・010 (北から)



Ph.7 1区河川②・③ (北から)



Ph.4 2区SD004～008 (南から)



Ph.8 2区河川081杭列1検出状況 (東から)



Ph.5 2区SD1 18 (東から)



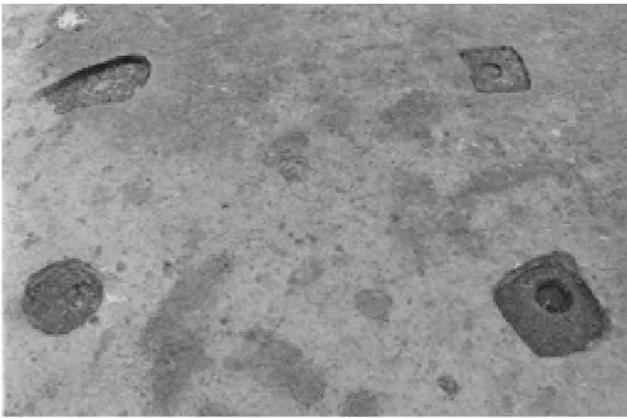
Ph.9 2区河川081杭出土状況 (西から)



Ph.6 1区河川③埋土堆積状況 (南から)



Ph.10 2区河川081土層断面 (南から)



Ph.11 1区SB029検出状況 (南から)



Ph.15 1区SK056 (北から)



Ph.12 1区SB026・027・028検出状況 (西から)



Ph.16 SK063 (西から)



Ph.13 1区SK011 (北から)



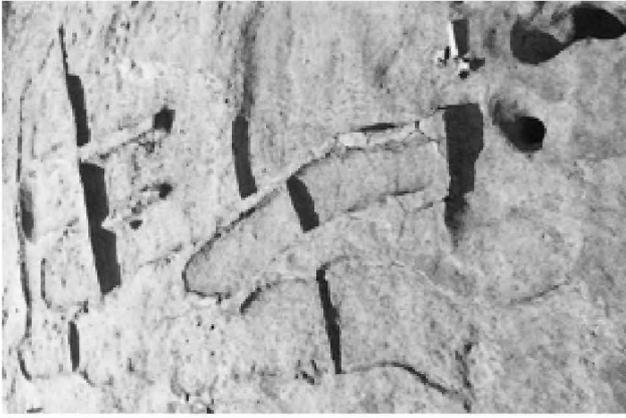
Ph.17 SD055 (北から)



Ph.14 1区SK030 (東から)



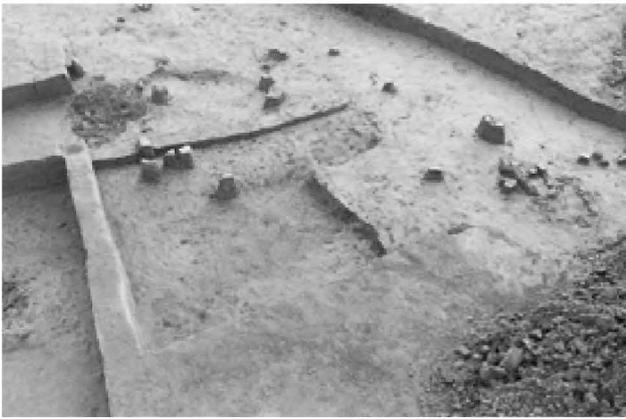
Ph.18 SD111 (南から)



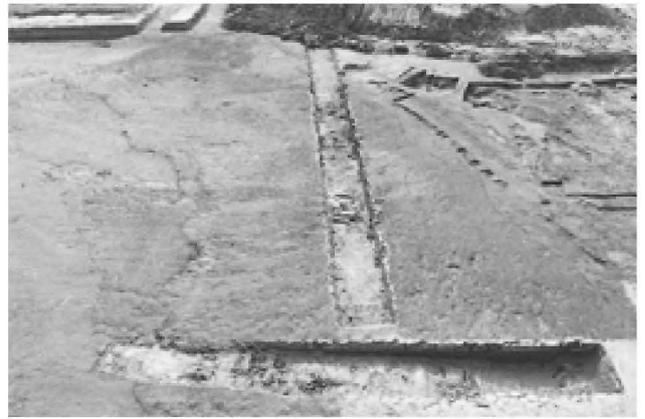
Ph.19 SDI03、105～108 (北から)



Ph.23 SX101 (東から)



Ph.20 SX121 (西から)



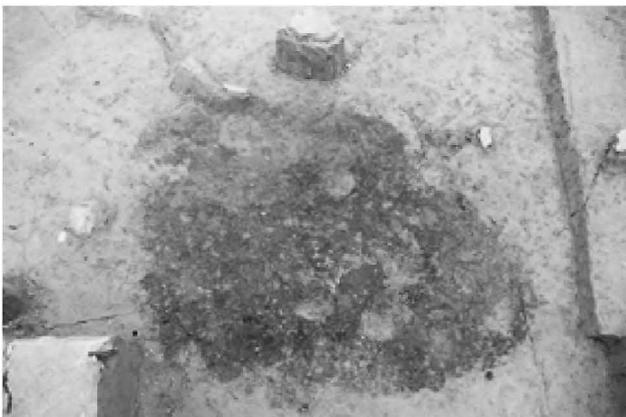
Ph.24 SDI 25 (北から)



Ph.21 土器441出土状況 (東から)



Ph.25 SDI 25-3トレンチ (北東から)



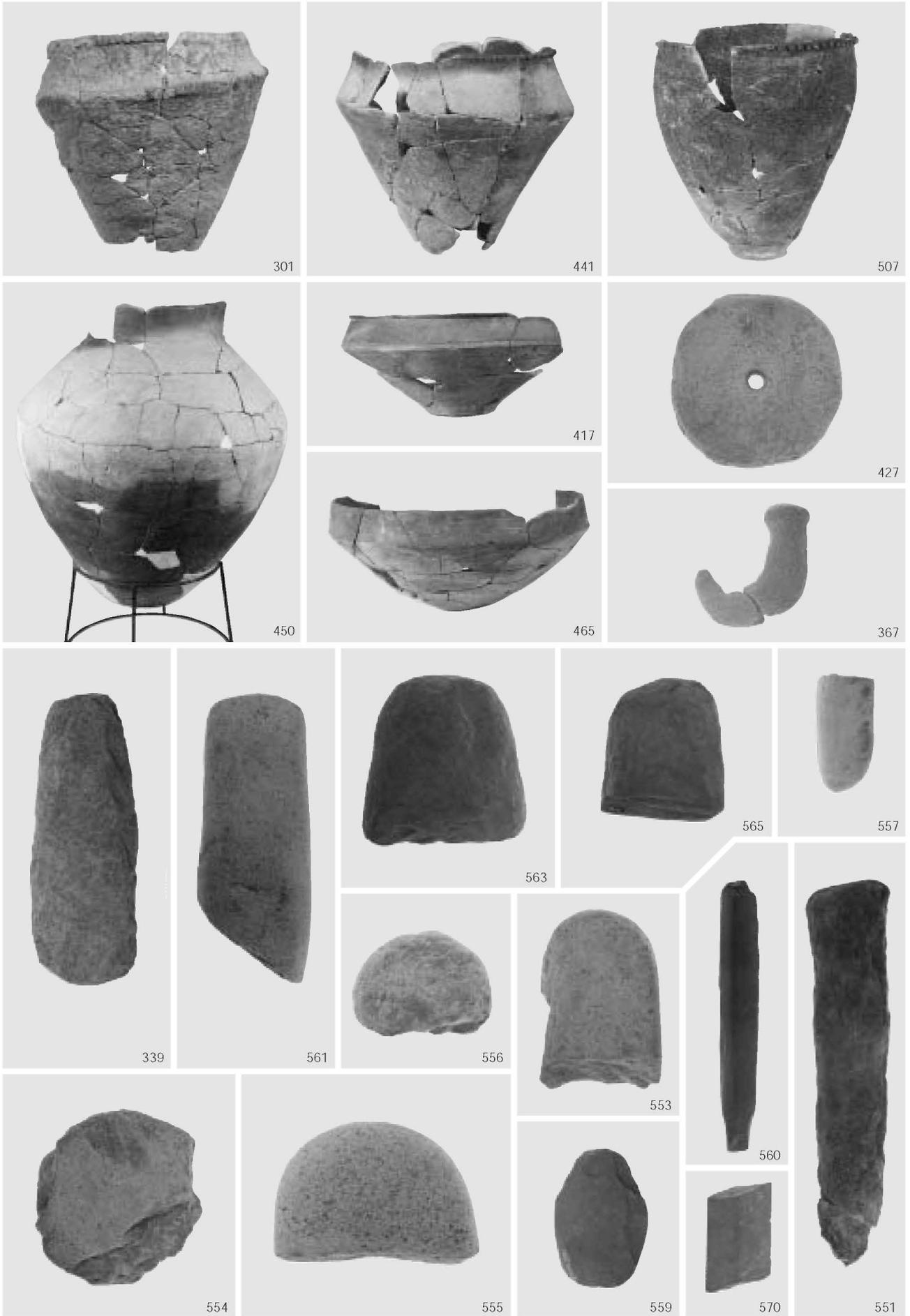
Ph.22 SX126 (北から)



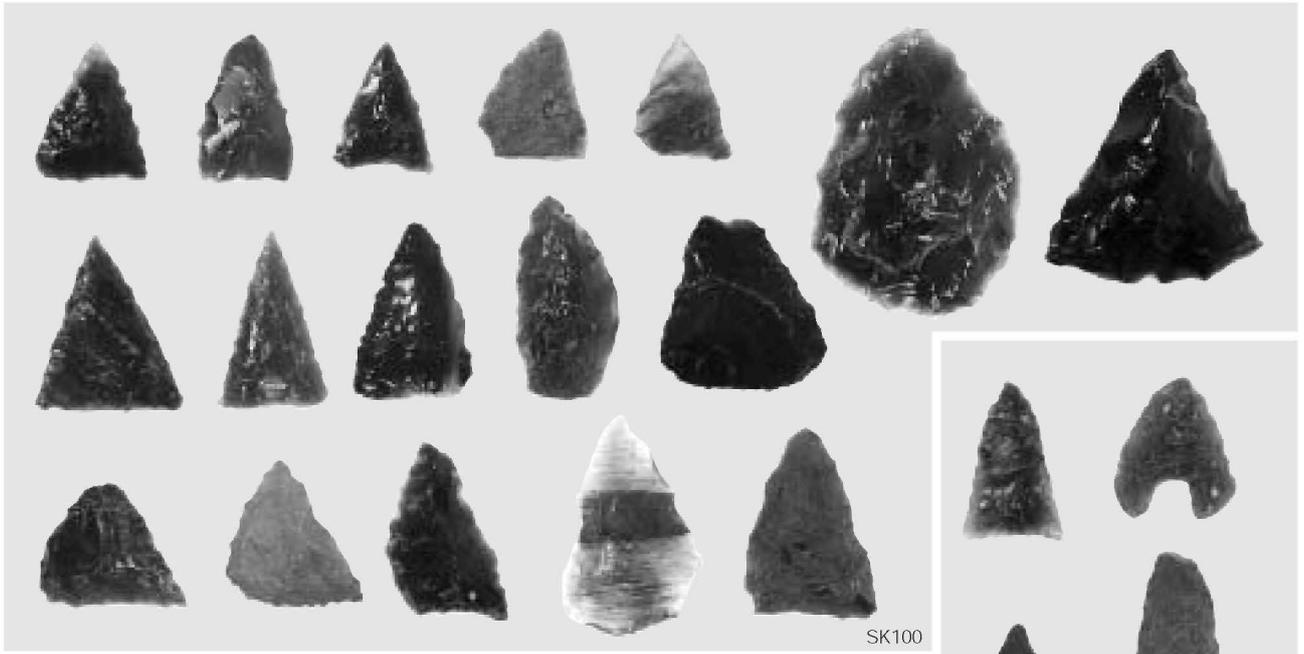
Ph.26 SX120 (北西から)



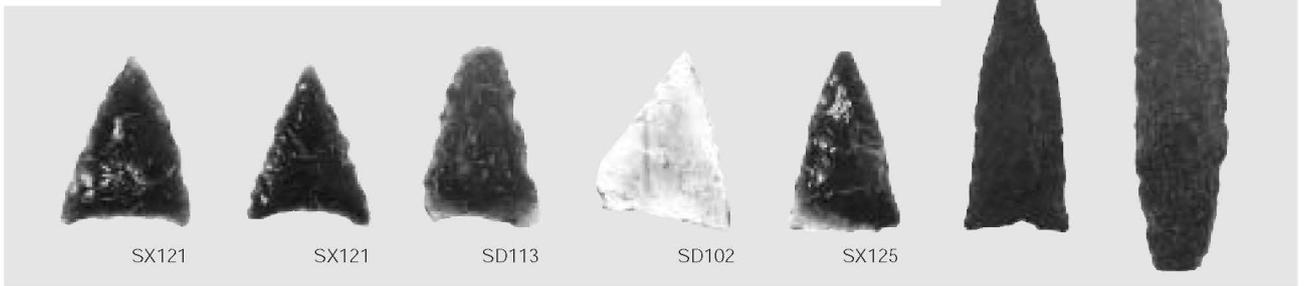
Ph.27 上層出土遺物



Ph.28 下面出土遺物1



SK100



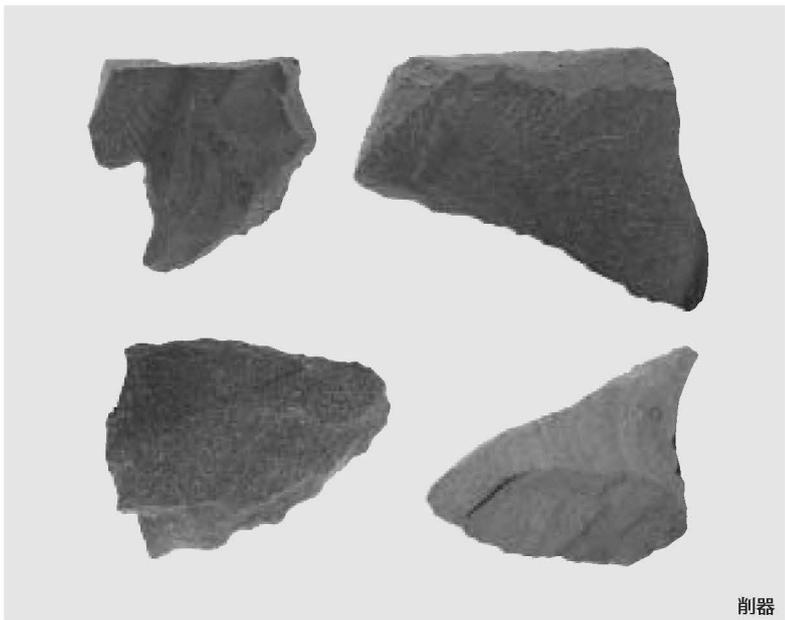
SX121

SX121

SD113

SD102

SX125



削器



UF



搔器



石核



黒曜石原石

Ph.29 下面出土遺物2

報告書抄録

書名 橋本一丁田遺跡4

副書名

巻次

シリーズ名 福岡市埋蔵文化財調査報告書

シリーズ番号 816

編著者名 池田祐司/阿部泰之

編集機関 福岡市教育委員会

発行機関 福岡市教育委員会

発行年月日 20040331

作成法人ID 40137

郵便番号 810-8621 電話番号 092-711-4667

住所 福岡市中央区天神1-8-1

遺跡名 橋本一丁田遺跡第4次

遺跡所在地 福岡市西区福重2丁目436-1、464他

市町村コード 40137 遺跡番号 0136

北緯 33° 33' 54" (世界測地系)

東経 130° 19' 7"

調査期間 20011112-20020201

調査面積 5201

調査原因 店舗建設

種別 集落、生産地

主な時代 縄文/弥生/古墳/古代/中世

遺跡概要 散布地-旧石器-細石器/集落?-縄文-くぼみ状土坑5-河川1-刻口突帯文土器群-石剣-石鏃-削器/弥生-前期-土坑2-溝1-土器-石斧/古墳-河川6+杭列3+掘立柱建物4+土坑13+性格不明遺構4-土師器+須恵器+玉類+銅鏡破片/古代-河川2-須恵器+土師器/中世-溝7-土師器+瓦器+陶磁器

特記事項

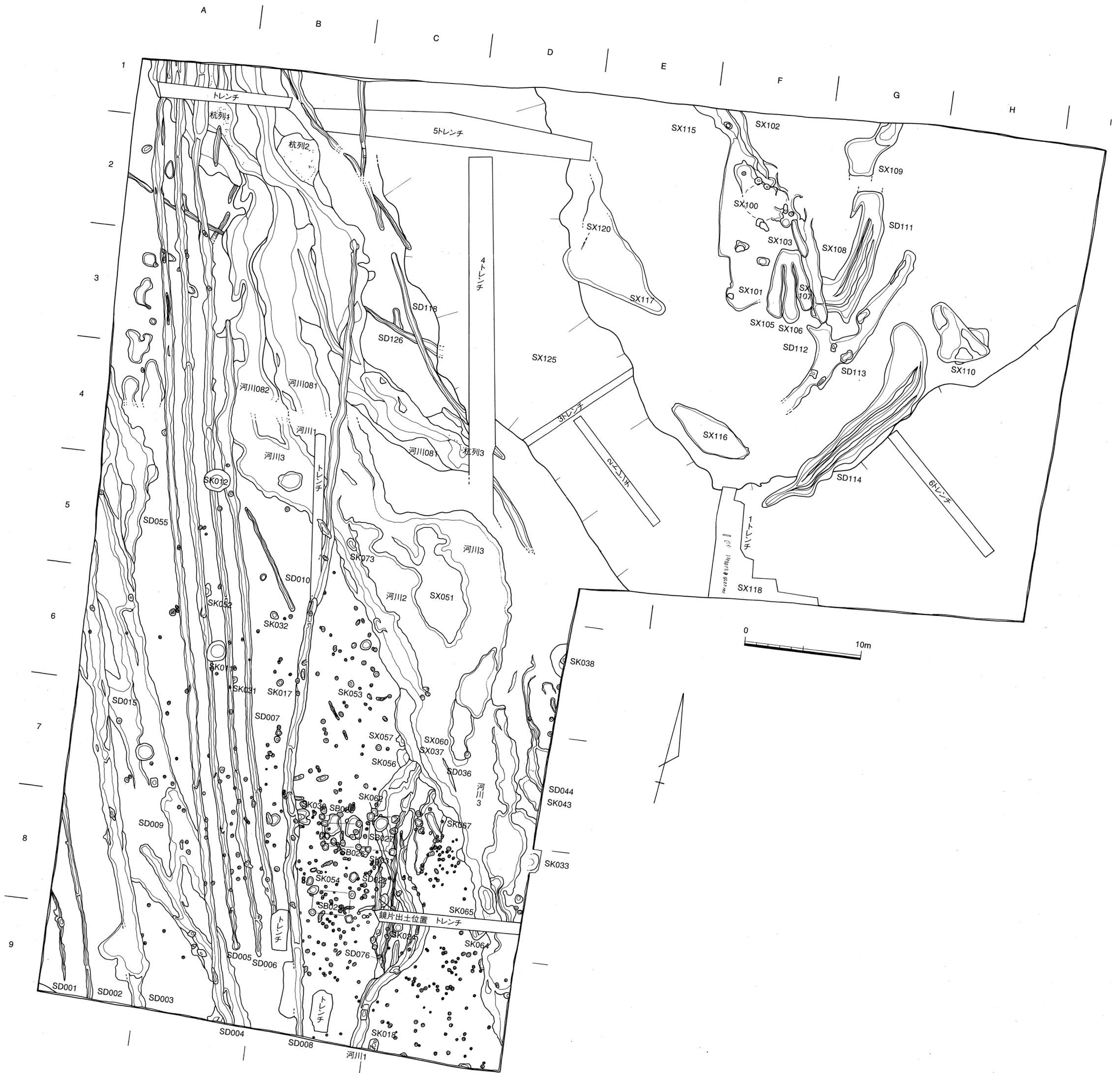
はし もと いっ ちよう だ
橋本一丁田遺跡4

福岡市埋蔵文化財調査報告書 第816集

2004年(平成16年)3月31日

発行 福岡市教育委員会
〒810-8621 福岡市中央区天神1丁目8番1号

印刷 江口印刷株式会社
〒815-0082 福岡市南区大楠2丁目22番8号



橋本一丁田遺跡4次調査全体図 (1/200)